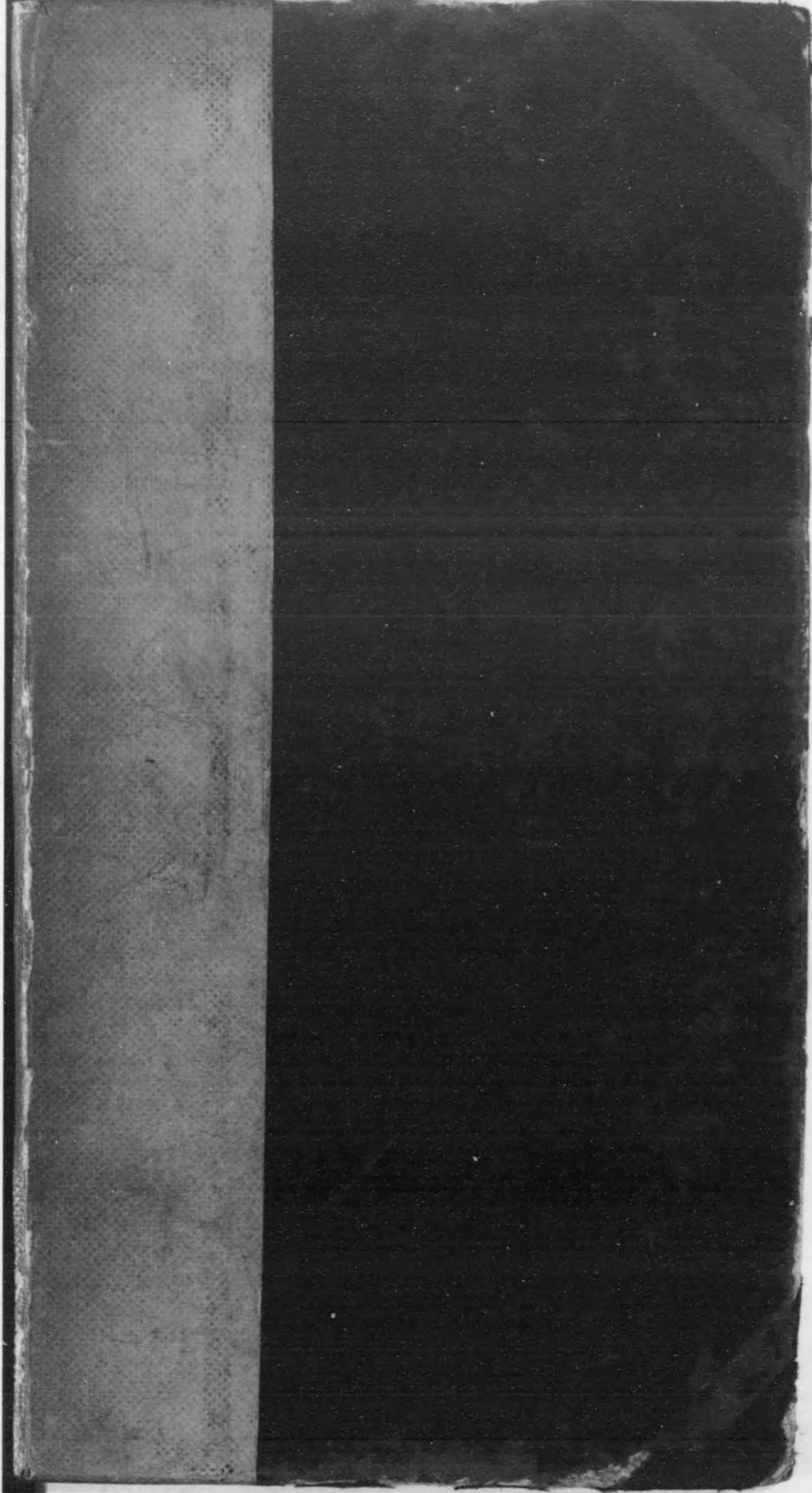
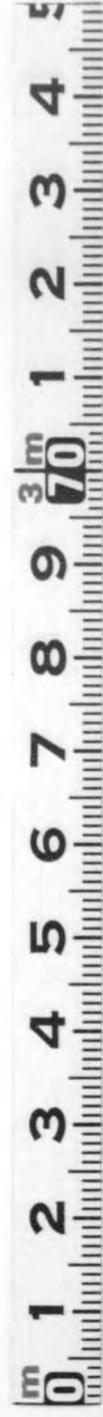


始



322
93

WILHELM HAUFFES

MÄRCHEN

AUSGEWÄHLT UND ÜBERSETZT

VON

DR. U. TANAKA.



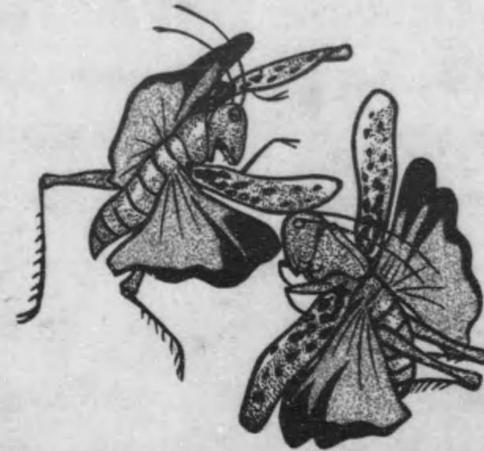
VERLAG VON NANZANDŌ

1915

獨和對譯

獨逸國民文庫の發刊に就て

凡そ一國の言語や文學等を根本的に、然も愉快に容易に理解し悟達するには、その國の國民一般の思想感情に共鳴を持つた、通俗平易で然もその國民間に愛誦されて廢ることの無い書物を読むに限る。獨逸國民文庫はさうした種類の書籍のみを選択して、獨逸語と獨逸文學の熱心なる研究者に提供せんが爲めに生れたので有る。本文庫の選に入るものは、主として童話、傳説、小説、詩歌、俗謠等の種類に涉り、その獨逸固有の精神的產物たると、將又他國よりの翻譯たるとを問はず、何れも皆、學問の有無や、貴賤老少の別に論無く、獨逸國民のあらゆる階級から等しく驩迎された、謂はゞ「國民公選書」と見做さるべきものゝみで、讀むに易くして權威は自然に其内に備つた良書のみで有る。従てこれを読む人は、讀書に消耗する時間と精力とを少くして、得る所の甚大なることを疑はぬ。對譯は最も嚴正周密ならん事を期し、加之原作者の傳記若しくは該書に對する研究批評等も卷頭に附して、飽くまで讀者の會得に便ならしめて有る。願くは本文庫を友として、快適の裡に獨逸の言語文學に悟達するの秘鍵を握られんことを、大方の研究者に奨める次第で有る。



ハウフとその童話

ハウフの童話は藝術童話(Kunstmärchen)界に於て、一つの典型と見做される所謂「ハウフ」型を作つた。彼の型は全然彼自身の創造ではなく、彼に先だつ古い物語が、彼の作の原型を成したことは明かであるが、恰もイスラエルの古く廢れかかつた教義の底から、新しい宗教の泉をば基督が汲取つたやうに、ハウフも亦彼の原型の古い粘土を捏上げ、彼自身の命の息氣を吹入れて、ハウフ型を造り上げ、以てその創造者と成つたのである。彼の生涯は實に短かつた。取別け彼の作家としての活動期は短かつた。生を送ること二十有五年、筆を執ること僅かに二年有餘にして、惜しや天才の花は散つた。

Wilhelm Hauff は千八百〇二年の十一月二十九日南獨逸の Stuttgart に生れた。父は Friedrich 二世(Wilh. Karl)の下に、秘書官の榮職に在つたが、彼四歳の時父の轉官と共に、彼は Tübingen に移住した。その後父は何か贓職の罪があつて閑職に貶黜されたのを不満に思つて、千八百〇八年に再び故郷の Stuttgart に居を移し、翌九年ハウフが漸く七歳の時、父は此世を去つた。

父の死後彼は Tübingen の祖父さんの許に行つて、土地の寺院小學校に通つて、兎も角そこに十五の歳まで學んだが、成績は一體に良い方ではなかつた。續いて十六の歳から、二年程 Blaubeuren の寺院學校を修業した後、丁度彼の十八歳の時、即ち千八百二十年に、Tübingen の師範學校(高等の程度の)に入學を許されて、哲學と神學を修了した。二十二の時にそこを卒業すると、當時一般の風習に従つて、Württemberg の軍事參議院長 Freiherr von Hügel 家の家庭教師と成つた。學校生活に於て彼は、學問にかけては頗る身が入ら

ず、従つて成績も香ばしくなかつた方で、學生としての彼は前途に何等囑目されるところが無かつたが、一度家庭教師と成つて、彼の眼の前に新しく開けた小兒といふ世界を見た時、始めて彼は自分の生きる世界を發見したのであつた。

彼は Hügel の小兒達や、その他それに關係した家庭の人々の前で、時折り古い獨逸の説話や、種々の傳説童話集などから讀み知つた話を物語つてみた。彼は自分の話しに聽入つて、うつとりと成つた幼い兒達の眼が、話中の主人公の成敗浮沈に伴れて、或は暗くなり或は耀くのを、吾れながら話すと云ふものの小兒に及ぼす効果と、己れの天分のその方面に於て、意外に豊かなことに驚いた。彼が童話を作らうといふ直接の誘因の一つは、確かに彼が此家庭教師に成つたといふ事に存する。ハウフの作家として生涯の第一歩は、定庭教師と成つた第二年目、即ち千八百二十五年に始まり、然もその初女作は實に童話袖珍本(Märchen-Almanach)であつた。童話の創作は翌々年迄續けて、遂に今日見るやうな Die Karawane, Der Scheik von Alessandria und seine Sklaven, Das Wirtshaus im Spessart の三つの標題の下に、それぞれの標題範圍内で連絡を保つた、多くの作が出来上つたのである。

家庭教師生活二年の間に彼の作つたものは、此外に Memoiren des Satans の第一巻と、當時の通俗小説の作家 Heinrich Clauren を嘲諷せんが爲めに筆を染めて、却つて識らぬ間に夫子自らも Clauren と同じ作弊に陥つた小説 Der Mann im Mond があり、又彼の最も成功したと稱せられる小説 Lichtenstein などがある。其外にも猶ほ數種の小篇を出して居る。兎に角驚く可き多作は當時の人を驚嘆せしめ、特に Lichtenstein を出すに至つて、彼の名は頓に揚がり、彼に呈するに獨逸のスコットの尊號を以てするに至つた。思はぬ成功はハウフ自らも驚いた事であらう。「或る日吾れふと覺めたるに、吾れは名だゝる人と成りたり」と言つたバイロンの詞は、移して以て當時のハウフが身の上に當てはめる事が出来

やう。その外渾成した作品ではないが、彼の天才の最も閃めいて見えるのは、Die Bettlerin von Pont des Arts や、Jud Suss などである。千八百二十七年彼は終に流星の如く逝いた。彼の天才は亦詩作の上にも微見えて居た、惜い哉、未だ多くの形身を獨逸國民に遺さずして終つた。然し彼の遺した二つの詩は、獨逸國民の存在するかぎり、何時も靈の底から響き渡るてふのものである。二つとは何か——Reiters Morgen- gesang と Soldatenliebe とである。

さて彼の童話集は已に其標題に於て、Geschichte von 何々と書いてあるのを見るやうに、内容から見て決して純なる童話ではない。特に第二第三部に至つて、益童話の性質を失ふこと甚だしい。これは確かに彼の作に對する態度を語るもので、彼の規つたところは其童話(Märchen)といふ内容や形式の約束に従ふと従はぬとに論なく、兒童の心理の要求を美しく満足せしめたいと云ふのが彼の主眼で、何處までも興味本位の藝術品といふ所を規つたのではなからうかと思はれる。彼の作に最も影響を與へたものは何かと云ふに、先づ第一がかの一千一夜物語(アラビヤ夜話)であつた。話の筋のモチーフから觀ても、話の舞臺を東洋に借りた點から觀ても、最後に童話を總括した形式が、所謂 Rahmenerzählung (序話つきの話)の體を成してゐる點から觀ても、範を彼の物語に採つたところが多い。その外に獨逸固有の民族童話から借りて來たモチーフもあれば、ロマンチックの思潮の片影を見ぬでもないがそれは殆ど論ずるに足らぬ。要するに彼の童話は何處までも、ハウフその人の天才が作つた獨特の作品である。

彼の童話の特色を一言にして盡せば、明快の二字に現はされ得る。人物や事件の描寫の鮮かさ、輪畫の線の太く確かなこと、事件の筋のよく通つた點など、實に手際である。それに切れ目の短い彼の文章は少しも暗示的の暗い陰が無い、想像の迷路に讀者を迷はす様な叙述が微塵も無い。然も何

處までも華かで動いて居る。明、華、動の三つは少年文學には缺く可らざるもの、特に努めて濫、晦の表現法を避ける事がその第一要件であるが、ハウフは此點に於て特に至れる人で有つた。彼の童話の特色の第二は架空の事件に現實性を與へて、讀者のイリュージョンを破らぬ事に巧みな事で、第三は冒險的事件を巧みに案配して、筋の緊張を維持するに傑れた事で有つた。第四に彼の作に於て偉大なる特色は、彼の作が時代の風潮に反應した傾向的の傾が無いこと、他面から言へば時代の兒としての彼の「我」が作の何處にも跳出さぬことで、これは童話的の氣分を破らぬ爲めには、如何なる作家も必ず侵してはならぬ憲法であるが、又動もすれば侵され易いものである。(勿論小兒の爲めに讀ませる上からである。) アンダーゼンの作には應々此病を見受ける。ムーゾイスやウイーランドの作にも此弊が有る。第四と關聯したことでこれも重大なハウフの特色は、童話の中に Idee を寓せんとするの傾向の無いことで、これは童話を濫、晦な謎話しの構にして了ふもので、多くの場合その Idee を會得して貰ふよりも、却つて小兒の感興を傷くる結果と成るものである。單に小兒の讀物といふ立場から見ると、獨逸のロマンチケルの作つた童話などは、最も此 Idee に煩はされる適例となる。自分の好きなアンダーゼンなども此處に、彼の長所にして短所を抱擁して居ると謂はねばならぬ。以上五つの特色を具へたハウフの作が古も今も變ること無く愛讀されるのは、困より遇然ではないのである。

茲に譯出したのは彼の童話の中の Die Karawane の大部分である。

一千九百十五年六月

於東京 譯者 識



HAUFFS
MÄRCHEN

Die Karawane.

Es zog einmal eine große Karawane durch die Wüste. Auf der ungeheuren Ebene, wo man nichts als Sand und Himmel sieht, hörte¹ man schon² in weiter Ferne die Glocken der Kamele und die silbernen Röllchen³ der Pferde; eine dichte Staubwolke, die ihr vorherging, verkündete ihre Nähe, und wenn ein Luftzug die Wolke teilte, blendeten funkelnde Waffen und helleuchtende Gewänder das Auge. So stellte sich die Karawane einem Manne dar, welcher von der Seite her auf sie zuritt. Er ritt ein schönes arabisches Pferd, mit einer Tigerdecke behängt, an dem hochroten Riemenwerk hingen silberne Glöckchen, und auf dem Kopf des Pferdes wehte ein schöner Reiherbusch.⁴ Der Reiter sah stattlich aus, und sein Anzug entsprach der Pracht seines Rosses; ein weißer Turban, reich mit Gold⁵ gestickt, bedeckte das Haupt; der Rock und die weiten Beinkleider waren von brennendem Rot, ein gekrümmtes Schwert mit reichem Griff an seiner Seite. Er hatte den Turban tief ins Gesicht gedrückt; dies und die schwarzen Augen, die unter buschigen Brauen hervorblitzten, der lange Bart, der unter der gebogenen Nase herabhing, gaben ihm ein wildes, kühnes Aussehen. Als der Reiter ungefähr auf fünfzig Schritte dem Vortrab der Karawane nahe war, sprengte er sein Pferd an und war in wenigen Augenblicken an der Spitze des Zuges angelangt. Es war ein so ungewöhnliches Ereignis, einen einzelnen Reiter durch die Wüste ziehen zu sehen, daß die Wächter des Zuges, einen Überfall befürchtend, ihm ihre Lanzen entgegen-

隊 商

ある時隊商の大きな一群が砂漠を横切つたことがありました。砂と空より外何ものも目に留らぬ、恐ろしく廣々とした平原のまだ遠くの方から、駱駝や、馬に附けた銀の大鈴の音を響かして、隊商の行先きに立騰る濃い塵の雲は、隊商が近附いて来たことを知らせるのでした。やがて一陣の風が塵の雲を吹破りますと、キラキラと輝いた物の具や、晴ればれしく美しい身なりなどが、人の眼を眩まさんばかりに見られるので有りました。この様な工合に、隊商の横合ひから馬を飛ばして来た一人の人にも、隊商は其姿を現はしました。此人は虎の皮の被ひを掛けた見事なアラビヤ馬に跨り、眞紅な鞣皮の紐には白銀の小鈴を下げ、馬の頭の上には美しい蒼鷺の羽の飾りが風に靡いて居りました。馬上の人は如何にも堂々たる風采をしてゐて、身仕度も亦馬の飾りと能く釣合ひが取れて居りました。金糸で豊かに縫取りをした白いトルコ風の頭巾に頭を蓋ひ、上衣と太いズボンとは燃立つばかりの緋の色で、大きな柄(つか)の附いた偃月刀(そりがたな)を腰に下げて居るのでした。この人はトルコ頭巾を目深く蒙つて居りました。さうした風采や、蓬々とした眉毛の下からギロリ光つた黒い眼や、曲つた鼻から垂下つた長い髭は、此人の様子を荒く猛々しい者の様に見せました。さても此騎馬が隊商の先達から凡そ五十歩程近く来たかと思ふ頃に、彼れは馬に一鞭くれて、忽ち隊商の先達の側へ到着しました。獨りぼつちの騎者が砂漠を旅するといふ事は、全く出つかはした例しの無い出来事なので、何か襲つて来たのでないかと心安からず、隊商の見張番の者どもは騎者に鎗を差向けるといふ始末でした。「貴方がたは何をしやうと謂

streckten. „Was wollt ihr?“ rief der Reiter als er sich so kriegerisch empfangen sah. „Glaubt ihr ein einzelner Mann werde eure Karawane angreifen?“ Beschämt schlangen die Wächter ihre Lanzen wieder auf,¹ ihr Anführer aber ritt an den Fremden heran und fragte nach seinem Begehren. „Wer ist der Herr der Karawane?“ fragte der Reiter. „Sie gehört nicht einem Herrn,“ antwortete der Gefragte, „sondern es sind mehrere Kaufleute, die von Mekka in ihre Heimat ziehen, und die wir durch die Wüste geleiten, weil oft allerlei Gesindel die Reisenden beunruhigt.“ — „So führt mich zu den Kaufleuten,“ begehrte der Fremde; „das kann jetzt nicht geschehen,“ antwortete der Führer, „weil wir ohne Aufenthalt weiterziehen müssen, und die Kaufleute wenigstens eine Viertelstunde weiter hinten sind; wollt Ihr aber mit mir weiterreiten, bis wir lagern, um Mittagsruhe zu halten, so werde ich Eurem Wunsch willfahren.“ Der Fremde sagte hierauf nichts; er zog eine lange Pfeife, die er am Sattel festgebunden hatte hervor und fing an, in großen Zügen zu rauchen, indem er neben dem Anführer des Vortrabs weiterritt. Dieser wußte nicht, was er aus dem Fremden machen² sollte, er wagte es nicht, ihn geradezu nach seinem Namen zu fragen, und so künstlich er auch ein Gespräch anzuknüpfen suchte, der Fremde hatte auf das:³ „Ihr raucht da⁴ einen guten Tabak,“ oder: „Euer Rapp' hat einen braven Schritt,“ immer nur mit einem kurzen „Ja, ja!“ geantwortet. Endlich waren sie auf dem Platz angekommen, wo man Mittagsruhe halten wollte.

ふのです?と、騎者は自分がかくも戦を仕掛けられんばかりの取扱ひを受けて叫びました。「貴方がたはたつた一人の者が、貴方がたの隊商に突掛かるとでも思つてゐられるか」。見張番の者共は愧入つて、名々の鎧を元通り立て直しました。が番人の引率者なる人はこの見知らぬ騎者の許へ馬を近寄せ、さうして騎者の望むところを尋ねました。「此隊商の主は何人です?」と騎者は問ひました。問はれた方は答へました「この隊商は一人の壇那のもので無く、メツカから名々の故里へ旅をする澤山の商賣人の集りですが、時折様々の悪者が旅人を脅かすので、吾々どもが商人さん方に砂漠を通して道案内をする譯なのです。」「それなら私をその商人衆のところへ案内して頂きたい」と見知らぬ人は頼みました。「それは今する譯には参りません」——引率者は答へるのでした——「何分私共は休み無しに先きへ進まればなりませんし、その上商人さん方は少くも十五分間程ずつと後に居るのですからな。然し貴方が私共のお晝休に止まる處まで私共と一所に先きへお出でに成つて下さる積りなら、私は貴方のお願ひを叶へて差上げまじやう」。見知らぬ人は此言葉を聞いてから一言も口を利きませんでした。彼は先導隊の引率者の側を歩みながら、馬の鞍に確かり縛付けて置いた長煙草を取出して、息氣永々と煙草を吹かし始めました。引率者はこの見知らぬ人を何うあしらつて可いのか途方に暮れて了ひました。引率者は思切つて手取り早くその人の名を尋ねてみる事も仕ませんでした。それで引率者は随分言葉巧みに會話を續けやうと努めましたけれど、見知らぬ人は、「貴方は長い煙草をお吸ひですな」とか、「貴方の玄馬(くろうま)は足並みか確かりして居られます」など、話掛けた言葉に對して、何時も只「えい、えい」とばかり手短かな返事をしました。漸くのこととて一同は晝の休息をしやうと思ふ場所に到着しました。引率者

Der Anführer hatte seine Leute als Wachen ausgestellt, er selbst hielt mit dem Fremden, um die Karawane herankommen zu lassen. Dreißig Kamele, schwer beladen, zogen vorüber, von bewaffneten Führern geleitet. Nach diesen kamen auf schönen Pferden die fünf Kaufleute, denen die Karawane gehörte. Es waren meistens Männer von vorgerücktem Alter, ernst und gesetzt aussehend, nur einer schien viel jünger als die übrigen, wie auch¹ froher und lebhafter. Eine große Anzahl Kamele und Packpferde schloß² den Zug.

Man hatte Zelte aufgeschlagen und die Kamele und Pferde ringsumhergestellt. In der Mitte war ein großes Zelt von blauem Seidenzeug. Dorthin führte der Anführer der Wache den Fremden. Als sie durch den Vorhang des Zeltens getreten waren, sahen sie die fünf Kaufleute auf goldgewirkten³ Polstern sitzen; schwarze Sklaven reichten ihnen Speisen und Getränke. „Wen bringt Ihr uns da?“ rief der junge Kaufmann dem Führer zu. Ehe noch der Führer antworten konnte, sprach der Fremde: „Ich heiße Selim Baruch und bin aus⁴ Bagdad; ich wurde auf einer Reise nach Mekka von einer Räuberhorde gefangen und habe mich vor drei Tagen heimlich aus der Gefangenschaft befreit. Der große Prophet⁵ ließ mich die Glocken eurer Karawane in weiter Ferne hören, und so kam ich bei euch an. Erlaubet mir, daß ich in eurer Gesellschaft reise, ihr werdet euren Schutz keinem Unwürdigen schenken, und so⁶ ihr nach Bagdad kommet, werde ich eure Güte reichlich belohnen, denn ich bin der Neffe des Großwesirs.“⁷ Der älteste der Kaufleute nahm das Wort: „Selim Baruch,“ sprach er, „sei willkommen in unserm

ist eigenen仲間に見張番を命じて、自分丈けは見知らぬ人と一所に留まつて隊商の來るのを迎えました。三十頭の駱駝は重く荷を積まれ、武装した駱駝曳きに引かれて前を通過すると、その後から隊商の組になつた五十人の商人が美しい馬に跨つて遣つて來ました。多くは大ぶ年波の寄せた人達で眞面目にどつしりした顔付きを仕てゐましたが、唯一人丈けは外の人より遙かに年も若く、又それ丈け陽氣で威勢も好い人でした。駱駝と荷馬の澤山の數は残らず到着しました。

人々は天幕を張り駱駝や馬は其の周圍につながれました。眞ん中には青い絹地の大きな天幕がありました。其處へ番人の引率者は此の見知らぬ人をつれて行きました。此の引率者と見知らぬ人と二人が天幕の帷(とぼり)を潜つて中へ入りますと、五人の商人が金で細工のしてある椅子に座つて居るのに眼がとまりました。黒ん坊の奴隷はその五人の人に食物や飲み物をさし出して居りました。「御前は一體誰方を吾々の所へお連れしたのか」と若い商人が引率者に云ひました。ところで引率者がその返事をし得ない先きに、見知らぬ人は話しかけました。「私はゼリム、パルフと申して、バクダッド生れの者ですが、メツカへ行く旅の途中で盜賊の一隊に攫まり、三日前に密つと救出して來たのです。偉い豫言者様は貴方がたの鈴の音を遙くから聞かして下さつたので、貴方がたの處へやつて來たやうな譯です。どうか貴方がたの仲間になつて旅行することを免して下さい。貴方がたは決して世話甲斐のない者にお世話をしたことはないでしやう。貴方がたがバクダッドへお着きになつてから、私は貴方がたの御親切に對しては厚く御禮をしましやう。何を隠さう私は總理大臣の甥です」。商人の中の一番の老人が口を出して「ゼリム、パルフ様」と彼は云ひました。——「ま、何うぞ

Schatten.¹ Es macht uns Freude, dir beizustehen; vor allem aber setze dich und iß und trinke mit uns.“

Selim Baruch setzte sich zu den Kaufleuten und aß und trank mit ihnen. Nach dem Essen räumten die Sklaven die Geschirre hinweg und brachten lange Pfeifen und türkischen Sorbett. Die Kaufleute saßen lange schweigend, indem sie die bläulichen Rauchwolken vor sich hinbliesen und zusahen, wie sie sich ringelten und verzogen und endlich in die Luft verschwebten. Der junge Kaufmann brach endlich das Stillschweigen. „So sitzen wir seit drei Tagen,“ sprach er, „zu Pferd und am Tisch, ohne uns durch etwas die Zeit zu vertreiben. Ich verspüre gewaltig Langeweile, denn ich bin gewohnt, nach Tisch Tänzer zu sehen oder Gesang und Musik zu hören. Wißt ihr gar nichts, meine Freunde, das uns die Zeit vertreibe?“ Die vier älteren Kaufleute rauchten fort und schienen ernsthaft nachzusinnen, der Fremde aber sprach: „Wenn es mir erlaubt ist, will ich euch einen Vorschlag machen. Ich meine, auf jedem Lagerplatz könnte einer von uns den andern etwas erzählen. Dies könnte uns schon die Zeit vertreiben.“ — „Selim Baruch, du hast wahrgesprochen,“ sagte Achmet, der älteste der Kaufleute; „laßt uns den Vorschlag annehmen.“ — „Es freut mich, wenn euch der Vorschlag behagt,“ sprach Selim, „damit ihr aber sehet, daß ich nichts Unbilliges verlange, so will ich den Anfang machen.“

Vernügt rückten die fünf Kaufleute näher zusammen und ließen den Fremden in ihre Mitte sitzen. Die Sklaven schenkten die Becher wieder voll, stopften die Pfeifen ihrer Herren frisch und brachten glühende Kohlen zum Anzünden. Selim

私共に守られておいでなさりませ。貴方さんを御助けする事なら喜んで致しまするぢや。まゝ何は兎もあれ、お掛けになつて、私共と御一所に飲食ひなりとなさりませ。

セリム、バルフは商人の脇に座つて、一しよに飲食しました。食事が済んでから後、奴隷どもが食器を取片附けると、長い煙管とトルコ産の胸すかしの飲み物を持つて参りました。商人たちは青い煙草の煙りを目の前に吹いて、其の煙が輪を畫いたりくねり曲つたりして、終に空中に消え行くのを見乍ら永い間黙つて座つて居りましたが、終に若い商人は沈黙を破りました。「こうして吾々は別に暇潰しと云つては何にんもせず、三日此方といふものは、乗つたり机の側に座つたりして居るのだ——若い商人は云ひました——「私は侵みじみ退屈を感ずますな。何分にも私は、食後には踊を見るとか歌や音楽を聞く癖が附いてゐるものですから。御同僚、貴方がたには何ぞ暇潰しの名案は御座いませんか？」四人の年寄つた商人はやはりまだ煙草をふかし續けて、しんみりと考込んでゐる様子でしたが、見知らぬ人の方で口を切りました。「お宥し下さるなら、私は貴方がたに一つの御相談を持出しましやう。吾々名々のものが一場所毎に、外の方々に何かお話しなされ相なものと私は思ふのだが。さうすれば必ず暇潰しも出来るでしやう。」——「セリム、バルフ様、本當に貴様方の仰言る通りぢや」商人の内の一番老人が云ひました。——「吾々は此の申出を採用しようではないか。「此の申出を御採用下さるなら、私は嬉しいです。然し私が手前勝手な申出しをしないと云ふ事が御分りになる様に、先づ私から話し始めましやう」とセリムが云ひました。

五人の商人は満足の態で椅子を近く引きよせ、見知らぬ人を眞中に座らせました。奴隷は再び脚高の盃に酒をなみなみと注ぎ、又その主人の煙管に新に煙草を詰め更へて、火を點ける爲めに紅々と燃えて居る石炭の火を持つて來ました。セリムの方では又、ソルマツト

aber erfrischte seine Stimme mit 'einem tüchtigen' Zuge Sorbett, strich den langen Bart über den Mund weg und sprach: „So hört denn die Geschichte von Kalif Storch.“

Die Geschichte von Kalif Storch.

I

Der Kalif Chasid zu Bagdad saß einmal an einem schönen Nachmittag behaglich auf seinem Sofa; er hatte ein wenig geschlafen, denn es war ein heißer Tag, und sah nun nach seinem Schläpchen recht heiter aus. Er rauchte aus einer langen Pfeife von Rosenholz, trank hier und da ein wenig Kaffee, den ihm ein Sklave einschenkte, und strich sich allemal vergnügt den Bart, wenn es ihm geschmeckt² hatte. Kurz, man sah dem Kalifen an, daß es ihm recht wohl war. Um diese Stunde konnte man gar gut mit ihm reden, weil er da immer recht mild und leutselig war, deswegen besuchte ihn auch sein Großwesir Mansor alle Tage um diese Zeit. An diesem Nachmittag nun kam er auch, sah aber sehr nachdenklich aus, ganz gegen seine Gewohnheit. Der Kalif tat³ die Pfeife ein wenig aus dem Mund und sprach: „Warum machst du ein so nachdenkliches Gesicht, Großwesir?“

Der Großwesir schlug seine Arme kreuzweis über die Brust, verneigte sich vor seinem Herrn und antwortete: „Herr! ob ich ein nachdenkliches Gesicht mache, weiß ich nicht, aber da unten am Schloß steht ein Krämer, der hat so schöne Sachen, daß es mich ärgert, nicht viel überflüssiges Geld zu haben.“

を威勢よく一飲み飲んで、聲に勢をつけ、口の上の長い髭を手梳(しごい)てから、さて云ひました「では一つカリフ、シュトルヒの話聞いて下さい」。

カリフ、シュトルヒの話

I

バグダツドの回々教主のカシツドが或る好天氣の日の午後、好い氣分になつて安樂椅子に腰を掛けて居りました。暑い日だつたものですから、教主は少しばかり晝眠をしました。教主は少し眠んだ後ですから、顔を上機嫌に見受けました。彼は薔薇の木で作つた長い煙管から煙草をふかしては、奴隷が注いだ⁴コーヒーを時折少し飲み、そしてコーヒーの味が旨いと、いつも満足して髭を手梳くのでした。一口に申せば、教主は非常に機嫌がよいのだと云ふことが分ります。こう云ふ折は何時も教主は大變穩かて人づきが好いのですから、話しをするのには都合よく出来ます。ですから又彼の⁵函相のマンゾルも亦、毎日此の時に教主を訪問しました。此日の午後にも亦、今し函相はやつて來ましたが、しかし彼は例もの習ひとは全く打つて變つて、大層考へ込んで居る様子でした。教主は暫くパイプを口から離して申しました「何故そなたは其様に思案顔をして居るのぢや?」

函相は自分の腕を胸の上に十字架に組合せ、主人の前に屈んで答へました、「吾君手前が思案顔をして居ますやら居らぬやら、手前存じませぬが、兎に角そこのお城下の所に、誠に美事な品物を持参しました雜貨商人が居ります。その品物が美事なにつけ、手前に思ふ存分の金が無いのが慥立たしくなりますのです。

Der Kalif, der seinem Großwesir schon lange gern eine Freude gemacht hätte,¹ schickte seinen schwarzen Sklaven hinunter, um den Krämer herauf zu holen. Bald kam der Sklave mit dem Krämer zurück. Dieser war ein kleiner dicker Mann, schwarzbraun im Gesicht und in zerlumptem Anzug. Er trug einen Kasten, in welchem er allerhand Waren hatte. Perlen und Ringe, reichbeschlagene Pistolen,² Becher und Kämmе. Der Kalif und sein Wesir musterten alles durch, und der Kalif kaufte endlich für sich und Mansor schöne Pistolen, für die Frau des Wesirs aber einen Kamm. Als der Krämer seinen Kasten schon wieder zumachen wollte, sah der Kalif eine kleine Schublade und fragte, ob da auch noch Waren seien. Der Krämer zog die Schublade heraus und zeigte darin eine Dose mit schwärzlichem Pulver und ein Papier mit sonderbarer Schrift, die weder der Kalif noch Mansor lesen konnten. „Ich bekam einmal diese zwei Stücke von einem Kaufmann, der sie in Mekka auf der Straße fand,” sagte der Krämer, „ich weiß nicht, was sie enthalten; Euch stehen sie um geringen Preis zu Dienst, ich kann doch nichts damit anfangen.“ Der Kalif, der in seiner Bibliothek gerne alte Manuskripte hatte, wenn er sie auch nicht lesen konnte, kaufte Schrift und Dose und entließ den Krämer. Der Kalif aber dachte, er möchte gerne wissen, was die Schrift enthalte, und fragte den Wesir, ob er keinen kenne, der es entziffern könnte. „Gnädigster Herr und Gebieter,” antwortete dieser, „an der großen Moschee wohnt ein Mann; er heißt Selim der Gelehrte, der versteht alle Sprachen, laß ihn kommen, vielleicht kennt er diese

これ迄随分長い間函相の喜ぶやうな事を仕てやりたいと思つてゐた教主は、商人を上へ呼び寄せる爲めに黒人の奴隷を下へやりました。間もなく奴隷が其の商人を伴つて歸つて參りました。商人といふのは小造りの肥つた人で、顔の色は黒すんだ蔦色をして居り、ホロホロの着物を纏ふて居りました。彼れは一つの箱を携え、其の中には種々雑多の品物がはいつて居りました。眞珠や、指環や、美事に象眼を施した金や、盃、櫛など教主と函相は残らずの品物を一通り見ちらかしてから、教主は終に自分と函相に美しい金牌を買ひ、それらか函相の夫人のために櫛を買つてやりました。さて商人が今や元通り箱を閉じやうとした時に、教主は小さい引出しを眼にとめて、其の引出しには未だ品物があるのかと尋ねました。商人は引出しを引出して、其の中にある黒い色の粉薬のはいつて居る箱と、教主にも函相にも讀むことの出来ない不思議な文字の書いてある紙を見せました。「手前は前へ方此の二つの品物を、メツカの往來で拾つて來た商人から手に入れましたので御座いまするか」と雜貨商人は云ふのでした——「手前に此の二つの物が、何れ丈けの値打の物か存じませぬので。此の二つの物を貴方様がたにお安くお願い致しておきまするか。實のところ手前は持つてたところで何うするとも出来ませぬので御座います。自分の圖書館に好んで古い記録を所持して居つた教主は、讀むには讀めなかつたけれど、書き物と箱とを買入れて商人を歸しました。然し教主は書き物にどんな事が書いてあるのか知りたく思つて、誰ぞ其の書き物を讀解く人を知らないかと函相に尋ねました。函相は答へました「御慈深き御主なる吾君！あの大本山のほとりに一人の男が住んで居ります。その名を學者のセリムと呼ばれて、凡そ如何やうな言葉でも解すことが出来ます。彼の者を御呼寄せなさりましては、恐らく此の隱密至極な文字をも知て

geheimnisvollen Züge."^{27/8}

Der gelehrte Selim war bald herbeigeholt. „Selim,“ sprach zu ihm der Kalif, „Selim, man sagt, du feiest sehr gelehrt; guck einmal ein wenig in diese Schrift, ob du sie lesen kannst; kannst du sie lesen, so bekommst du ein neues Festkleid von mir, kannst du es nicht, so bekommst du zwölf Backenstreiche und fünfundzwanzig auf die Fußsohlen, weil man dich dann umsonst Selim den Gelehrten nennt.“ Selim verneigte sich und sprach: „Dein Wille geschehe, o Herr!“ Lange betrachtete er die Schrift, plötzlich aber rief er aus: „Das ist Lateinisch, o Herr, oder ich lass' mich hängen.“ — „Sag', was drin steht,“ befahl der Kalif, „wenn es Lateinisch ist.“

Selim fing an zu übersetzen: „Mensch, der du dieses findest, preise Allah für seine Gnade. Wer von dem Pulver in dieser Dose schnupft und dazu spricht: Mutabor, der kann sich in jedes Tier verwandeln, und versteht auch die Sprache der Tiere. Will er wieder in seine menschliche Gestalt zurückkehren, so neige er sich dreimal gen Osten und spreche jenes Wort. Aber hüte dich, wenn du verwandelt bist, daß du nicht lachest, sonst verschwindet das Zauberwort gänzlich aus deinem Gedächtnis, und du bleibst ein Tier.“

Als Selim der Gelehrte also gelesen hatte, war der Kalif über die Maßen vergnügt. Er ließ den Gelehrten schwören, niemand etwas von dem Geheimnis zu sagen, schenkte ihm ein schönes Kleid und entließ ihn. Zu seinem Großwesir aber sagte er: „Das heiß' ich gut einkaufen, Mansor! Wie freue ich mich, bis ich ein Tier bin! Morgen früh kommst du zu mir. Wir gehen dann miteinander

欠

欠

中よりの少しばかりを嗅ぎ、空の中や水の中、森や野で話されて居る事どもを立聴きしやうではないか。」

II

翌日教主のカシツドが朝飯を喰べて、衣服を着換へるか着換へぬ内に、函相は教主が命じた通り、散歩の御供をしやうと早くもやつて参りました。教主は呪薬の入つて居る箱を腰帯の中へ押し込み、侍従の者共についてくるなと命じた後、函相とたつた二人つ切りで出掛けました。彼等は始めは教主の広い庭園を通つて行きましたが、彼等に技術が出来るかどうかを試めして見やうと思つて、何か生きものを探しましたが骨折り甲斐も有りませんでした。函相は終に尙もつと進んで、一つの池の畔へ出掛けやうと申出しました。其の池の畔で彼等はこれまで屢々澤山の動物を見ました、特に鶴(カフノトリ)を見ました。鶴は威厳を具へた奴で、且つその嘴をガクガクと音を立てるので何時も函相の注意を引きました。

教主は函相の申出に賛成して一緒に池の方へ行きました。彼等が池に着きますと、一羽の鶴が蛙を捜しながら、そして又時折獨りでガクガク嘴を鳴らし乍ら、眞面目な様子をしてあつちこつち歩いて居たのに目がとまりました。同時に彼等は外の一羽の鶴が、遠い高空の中に在つてこちらへ飛んで来るのを見ました。

「私は私の髭に誓つて申します」と函相が云ひました、「此の二匹の足長の人達は今面白い話しを話合ふで御座いましやう。吾々が鶴に成りましたら、どんなもので御座いましやう？」

「うまい事を申したな」と教主は答へました。「然し鳥になる前に、どうして人間に歸れるかと云ふ仕方を調べて置かうと思ふのぢや。さうさう違ひない！三遍東に向つて御辭儀して、ムウタアボールと云

geneigt und Mutabor gesagt, so bin ich wieder Kalif und du Wesir. Aber nur ums Himmels willen! nicht gelacht, sonst sind wir verloren!”

Während der Kalif also sprach, sah er den andern Storchen über ihrem Haupte schweben und langsam sich zur Erde lassen. Schnell zog er die Dose aus dem Gürtel, nahm eine gute² Prise, bot sie dem Großwesir dar, der gleichfalls schnupfte, und beide riefen: Mutabor!

Da schrumpften ihre Beine ein, und wurden dünn und rot, die schönen gelben Pantoffeln des Kalifen und seines Begleiters wurden unförmliche Storchfüße, die Arme wurden zu Flügeln, der Hals fuhr aus den Achseln und ward eine Elle lang, der Bart war verschwunden und den Körper bedeckten weiche Federn.

„Ihr habt einen hübschen Schnabel, Herr Großwesir,” sprach nach langem Erstaunen der Kalif. „Beim Bart des Propheten,³ so etwas habe ich in meinem Leben nicht gesehen.”

„Danke untertänigst,” erwiderte der Großwesir, indem er sich bückte; „aber wenn ich es wagen⁴ darf, möchte ich behaupten, Eure Hoheit sehen als Storch beinahe noch hübscher aus denn⁵ als Kalif. Aber kommt, wenn es Euch gefällig ist, daß wir unsere Kameraden dort belauschen und erfahren, ob wir wirklich Storchisch können?”

Indem war der andere Storch auf der Erde angekommen. Er putzte sich mit dem Schnabel seine Füße, legte seine Federn zurecht und ging auf den ersten Storchen zu. Die beiden neuen Störche aber beeilten sich, in ihre Nähe zu kommen, und vernahmen zu ihrem Erstaunen folgendes Gespräch: „Guten Morgen, Frau Langbein, so früh schon auf

ふのぢや。さうすると予は教主に、そなたは函相に戻れるのぢや。然し弓矢入幡決して決して笑つてはならぬ。笑つたら吾々はもう最後ぢや。」

教主がかう云つてる間に、彼は頭の上に他の一方の鶴が飛んで来て、緩やかに地に下りるのを見ました。教主は素早く帯から箱を取りだして、たつぶり一撮(つまみ)の粉薬を取りだして、これを函相にやりました。函相は早速これをを嗅ぎまして、二人でムタポールと唱へました。

すると二人の足はしばまつて、短く赤くなりました。教主と函相の美しい黄色の上靴は、不細工な鶴の足と變りまして、腕は翼になり、首は肩から伸出して来て一エール(二尺一寸九分)も長くなりました。髭は無くなつてしまひ、體は柔い羽で包まれました。

「そなたは美しい嘴を持つて居るな函相」と暫くの間あつげに取られて居た後で教主は云ひました。「豫言者様のお髭に誓つて云ふが、予は生れてからこんな髭を見たことはない。」

「謹んで御禮申上げます」と函相は御辭儀し乍ら答へました。「然し差出がましい事を御免下さるなら、吾君には教主としてより、鶴としての方が何うやら美しく御見えになります。然し吾々が其處に居る鶴仲間の語を立聴きして、吾々が本當に鶴語(カウノトリゴ)が出来るかどうかを、實驗して見たいお積りが御座りますなら、御出でなされませ。」

其の中に他の鶴が地面に下りました。此の鶴は嘴で足を磨いたり、翼を整へたりして、第一の鶴の方へ行きました。然し此の新しく鶴となつた二人は眞の鶴の近くへ行かうと急ぎました。そして驚いた事には次の様な話を聞きました、「御早うラングバイン(長脚夫

der Wiese?"

„Schönen Dank, liebe Klapperschnabel! Ich habe mir ein kleines Frühstück geholt. Ist Euch vielleicht ein Viertelchen Eidechs gefällig, oder ein Froschschenkelein?"

„Danke gehorsamst;¹ habe heute gar keinen Appetit. Ich komme auch wegen etwas ganz anderem auf die Wiese. Ich soll heute vor den Gästen meines Vaters tanzen, und da will ich mich im stillen ein wenig üben."

Zugleich schritt die junge Störchin in wunderlichen Bewegungen durch das Feld. Der Kalif und Mansor sahen ihr verwundert nach. Als sie aber in malerischer Stellung auf einem Fuß stand und mit den Flügeln anmutig dazu wedelte, da konnten sich die beiden nicht mehr halten; ein unaufhaltsames Gelächter brach aus ihren Schnäbeln hervor, von dem sie sich erst nach langer Zeit erholten.² Der Kalif faßte sich zuerst wieder: „Das war einmal³ ein Spaß," rief er, „der nicht mit Gold zu bezahlen ist. Schade, daß die dummen Tiere durch unser Gelächter sich haben verschrecken lassen, sonst hätten sie gewiß auch noch gesungen!"

Aber jetzt fiel es dem Großwesir ein, daß das Lachen während der Verwandlung verboten war. Er teilte seine Angst deswegen dem Kalifen mit. „Poz Mekka und Medina! Das wäre ein schlechter Spaß, wenn ich ein Storch bleiben müßte! Besinne dich doch auf das dumme Wort, ich bring' es nicht heraus."

„Dreimal gen Osten müssen wir uns bücken, und dazu sprechen: Mu— Mu— Mu—"

Die stellten sich gegen Osten und bückten sich in einem⁴ fort, daß ihre Schnäbel beinahe die Erde

人)さん、そんなに早く牧場にお出かけですか?"

「難有う、可愛いクラツベル、シユネーベル(カラカラ嘴)さん! 私は少しばかりの朝飯を持って来たのですが、あなたは一體蜥蜴(トカゲ)の四ツ割りがお好き、それとも蛙の小さな腹がお好きですか?"

「難有う御座います、今日はちつとも食べたくはありませんの。私は食物の事では無く、全く別の用で牧場に参つたので御座います。私は今日父のお客様の前で踊りを踊らなければなりませんのよ。ですから私はこつそりと少し練習しやうと思ひますの。」

此れと同時に「若い鶴は妙な動き方をして野をあるいて行きました。教主と函相は之を不思議に思ひ乍ら見送りました。然し此の若い鶴が畫に描かれたやうな姿勢で一本足で立つて、其の上愉快さうに羽叩きするに至つて、此の二人はもはや我慢することが出来ませんでした。抑へきれない笑ひが人の口から吹出しました。して此の笑は永くかゝつて後、やつと治まりました。教主の方が先づ元通りに落付きまして、叫びました、「これは金づくで買換への出来ぬじやうだんぢやつた。吾々の大笑ひのために馬鹿な動物を追感して了つたのは残念の事ぢやつた。それで無かつたら、あの鶴どもはきつと歌まで歌つたらうに。」

然し今や函相は、鳥に變化して居る間は笑ひは禁ぜられて居たと云ふことに氣が付きました。それ故彼れは此の氣掛りを教主に話しました。「オヤ大變! 私が鶴になりきりで居なければならぬなら、それこそ飛んだじやうだんぢやつた。そなたはあの馬鹿らしい言葉を考へて見なさい、予にはそれを思ひ出す事が出来ん。」

「吾々は東に向つて三廻屈まなければならぬ、そして其の上に云ふのはムー、ムー、ムー」

彼等は東に向つて、さうして一息に御辭儀し續けるので、其の嘴が殆んど地に觸れるほどでした。然し悲しや呪文は彼等の覚えから消

berührten. Aber, o Jammer! Das Zauberwort war ihnen entfallen, und so oft sich auch der Kalife bückte, so sehnlich auch sein Wesir Mu— Mu— dazu rief, jede Erinnerung daran war verschwunden, und der arme Chasid und sein Wesir waren und blieben¹ Störche.

III

Traurig wandelten die Verzauberten durch die Felder, sie wußten gar nicht, was sie in ihrem Elend anfangen sollten. Aus ihrer Storchenhaut konnten sie nicht heraus, in die Stadt zurück konnten sie auch nicht, um sich zu erkennen zu geben, denn wer hätte einem Storchen geglaubt, daß er der Kalif sei, und wenn man es auch geglaubt hätte, würden die Einwohner von Bagdad einen Storchen zum Kalifen gewählt haben?

So schlichen sie mehrere Tage umher, und ernährten sich kümmerlich von Feldfrüchten, die sie aber wegen ihrer langen Schnäbel nicht gut verspeisen konnten. Zu Eidechsen und Fröschen hatten sie übrigens keinen Appetit. Denn sie befürchteten, mit solchen Leckerbissen sich den Magen zu verderben. Ihr einziges Vergnügen in dieser traurigen Lage war, daß sie fliegen konnten, und so flogen sie oft auf die Dächer von Bagdad, um zu sehen, was darin vorging.

In den ersten Tagen bemerkten sie große Unruhe und Trauer in den Straßen. Aber ungefähr am vierten Tag nach ihrer Verzauberung saßen sie auf dem Palast des Kalifen, da sahen sie unten in der Straße einen prächtigen Aufzug. Trommeln und Pfeifen ertönten, ein Mann in einem goldgestickten Scharlachmantel saß auf einem geschmück-

去つて居ました。で教主が幾度御辭儀しても、函相が如何に一心に成つてそこへ△—△—と叫んでも、呪文についての記憶は消失せてしまつて、あはれなカシツドと函相はやつぱり鶴のまゝでありました。

III

悲しみに打たれて呪をかけられた二人は野をさまよひました。二人は此の不幸な境遇に於てどうしたらよいのか全く途方に暮れました。彼等は鶴の皮を剥ぐことは出来ませんでした。鶴は自分達だと認めさせる爲めに、町へ歸ることも亦出来ませんでした。何故なれば、此の鶴が教主であると云ふことを誰が信じまじやう。又たとひ信じたとしても、バグダツドの住民が一羽の鶴を、どうして教主に選挙ませうぞ。

こんな譯で二人は永い月日の間彷徨ひ歩いて、難澁な思をしながら野の果物で空腹をふたぎましたが、此の果物も然し、自分達の長い嘴の爲めうまく味はふことは出来ませんでした。さは言へますが彼等は、蜥蜴や蛙を味ふ氣にはなりませんでした。何故なれば二人は此の様な御馳走で、胃を悪くすることを恐れて居つたからでありました。此の哀れな境遇に於て彼等の唯一つの樂しは、飛ぶ事が出来ると云ふ事にして、彼等は町中に何か起つて居るかを見る爲めに、度々バグダツドの町の屋根の上を飛びました。

始めの頃は彼等は往來で大なる不安と悲しみを認めました。けれども彼等が呪ひにかゝつて後殆んど四日目に、二人は教主の宮殿の上に停まりましたところが、その下の往來に立派な行列が通るのを見ました。太鼓や角笛の音が響き渡つて、金の縫ひのしてある緋色のマントを着て居る一人の人が、纏きわたる侍従に取巻かれて、飾

ten Pferd, umgeben von glänzenden Dienern. Halb Bagdad sprang ihm nach, und alle schrien: „Heil Mizra! Dem Herrscher von Bagdad!“ Da sahen die beiden Störche auf dem Dache des Palastes einander an, und der Kalif Chasid sprach: „Ahnst du jetzt, warum ich verzaubert bin, Großwesir? Dieser Mizra ist der Sohn meines Todfeindes, des mächtigen Zauberers Kaschnur, der mir in einer bösen Stunde Rache schwur. Aber noch gebe ich die Hoffnung nicht auf. Komm mit mir, du treuer Gefährte meines Elends, wir wollen zum Grab des Propheten wandern, vielleicht daß an heiliger Stätte der Zauber gelöst wird.“

Sie erhoben sich vom Dach des Palastes und flogen der Gegend von Medina zu.

〔Mit dem Fliegen wollte es aber nicht gar gut gehen, denn die beiden Störche hatten noch wenig Übung. „O Herr“ ächzte nach ein paar Stunden der Großwesir, „ich halte es mit Eurer Erlaubnis nicht mehr lang aus, Ihr fliegt gar zu schnell! Auch ist es schon Abend, und wir täten wohl, ein Unterkommen für die Nacht zu suchen.“〕

Chasid gab der Bitte seines Dieners Gehör; und da er unten im Tale eine Ruine erblickte, die ein Obdach zu gewähren¹ schien, so flogen sie dahin. Der Ort, wo sie sich für diese Nacht niedergelassen hatten, schien ehemals ein Schloß gewesen zu sein. Schöne Säulen ragten unter den Trümmern hervor, mehrere Gemächer, die noch ziemlich erhalten waren, zeugten von der ehemaligen Pracht des Hauses. Chasid und sein Begleiter gingen durch die Gängen umher, um sich ein trockenes Plätzchen zu suchen; plötzlich blieb der Storch Mansor stehen. „Herr und Gebieter,“ flüsterte er leise, „wenn es

立てられた馬に跨つて居りました。バグダットの人民の半ばは彼の跡に追従ひ、総ての人が「バグダットの王ミヅラに榮へあれ」と叫びました。そこで宮殿の屋根の上に居る二匹の鶴は互ひに顔見合せて、教主のカシッドは申しました、「何故に予が呪ひをかけられたか、今こそあなたに合點が行つたか、何うちや函相。此のミヅラといふのは吾が不倶戴天の敵なる大魔術師のカシユヌールの子で、予が非運の折を覘つて復讐すると言つた奴ぢや。しかし予はまだ望は捨てない。わが苦境に於ける忠實な友よ、予と共に來れ。吾らは聖地で呪ひを解いて頂けるため、豫言者様の墓の方へ旅しやうと思ふのぢや。」

彼等は宮殿の屋根から飛立つて、メジナの方へ飛んで行きました。

しかし飛ぶ事はあまりうまく行きませんでした。何故なれば此の二匹の鶴は、まだほんの練習を仕たかせぬか位でしたから。「オー御前様!」と函相は一二時間の後溜息を吐きました、「誠に申譯も無いことで御座いますが、もう永く耐へる事が出来ませぬ。御前様にはあまり早くお飛びなされますな。且又もう夕暮で御座ります。吾々は今宵の宿を捜すが宜ろしからうと存じます。」

カシッドは彼の侍従の願ひを聞入れました、で彼が下の方の谷の中に、一つの隠れ場所にもつてこいの廢墟を見出しましたから、二人はその方へ飛んで行きました。二人が此の晩泊つた此の場所は、以前には一つの城であつた様でした。立派な柱は廢墟の中に突立つて、まだ可なり原のまゝに残つて居つた澤山の部屋は、此の城の以前の立派さを證して居ました。カシッドと侍従は、乾いた場所を捜す爲めに、廊下を通つてあるき廻りましたが、突然に函相のマンソルは立止まりました。「吾君」と彼れは密かにさしやきました、「幽霊を恐れるといふは、函相たるものに取つて馬鹿げた事でなく、まして鶴

nur¹ nicht töricht für einen Großwesir, noch mehr aber für einen Storchen wäre, sich vor Gespenstern zu fürchten! Mir ist ganz unheimlich zu Mut, denn hier neben hat es ganz vernehmlich geseufzt und gestöhnt." Der Kalif blieb nun auch stehen und hörte ganz deutlich ein leises Weinen, das eher einem Menschen als einem Tiere anzugehören schien. Voll Erwartung wollte er der Gegend zugehen, woher die Klage töne kamen; der Wesir aber packte ihn mit dem Schnabel am Flügel und bat ihn flehentlich, sie nicht in neue, unbekannte Gefahren zu stürzen. Doch vergebens! Der Kalif, dem auch unter dem Storchenflügel ein tapferes Herz schlug, riß sich mit Verlust einiger Federn los und eilte in einen finstern Gang. Bald war er an einer Türe angelangt, die nur angelehnt schien, und woraus er deutliche Seufzer, mit ein wenig Geheul vernahm. Er stieß mit dem Schnabel die Türe auf, blieb aber überrascht auf der Schwelle stehen. In dem verfallenen Gemach, das nur durch ein kleines Gitterfenster spärlich erleuchtet war, sah er eine große Nachtule am Boden sitzen. Dicke Tränen rollten ihr aus den großen runden Augen, und mit heiserer Stimme stieß sie ihre Klagen aus dem krummen Schnabel heraus. Als sie aber den Kalifen und seinen Wesir, der indes auch herbeigeschlichen war, erblickte, erhob sie ein lautes Freudengeschrei. Zierlich wischte sie mit dem braungefleckten Flügel die Tränen aus dem Auge, und zu dem großen Erstaunen der beiden rief sie in gutem menschlichem Arabisch: „Willkommen ihr Störche, ihr seid mir ein gutes Zeichen meiner Errettung, denn durch Störche werde mir ein großes Glück kommen, ist mir einst prophezeit worden!"

に取つては、尙更馬鹿氣た事でないならばですな、手前は薄氣味わるさかいつげいで御座ります。何故なれば此側の方で、呻いだり溜息をつく聲がありありとよく聞えますので。」教主も今や立止まつて、禽獸の聲と云ふよりは寧ろ、人間の聲の様な低い泣聲を極くはつきりと聞きました。確かに何か見付かるといふ豫期をしながら、教主は此の嘆聞が聞えて来る方へ行かうと思ひましたが、しかし面相は嘴で教主の翼をくわえて、二人が新しい爲體の知れない危険に飛び入ることをせぬ様にと哀願しました。しかしそれは無駄でした。鶴の翼の下に勇しい心を持つて居つた教主は、少しの羽の抜けるのもかまわず振切つて、暗い廊下の中へと急ぎました。間もなく教主は唯寄りかゝつて居るらしい一つの戸の所へ着きました。其の戸の中から彼は少しく咆へるやうな聲と共に、はつきりした呻き聲を聞きました。彼れは嘴で戸を開けましたが、驚きの餘り敷居の上に立ち止りました。只小さい格子窓を通して、僅かに月の光が射入るところの壞れかゝつた部屋の中に、彼は大きな鼻が床の上に座つて居るのを見ました。大粒の涙は鼻の大きな圓い目からこぼれ落ちて、皺枯れ聲で鼻は、曲つた嘴から自分の訴への言葉を洩しました。然し鼻は教主と、さうこう仕てゐる内にやはり忍び足でやつて来た面相を見た時に、大きな喜びの聲を上げました。鼻は鶯色斑の翼で目から出る涙を品よく拭ひまして、二人の大變驚いた事には、鼻はうまい人間のアラビヤ語で叫びました、「貴方がた鶴さん、よく来て下さいました。貴方がたは私が助かる目出度い徴です。何故なれば鶴によつて私に大いなる幸が来ると云ふ事は、以前より私に豫言された事なのですから。」

Als sich der Kalif von seinem Erstaunen erholt hatte, bückte er sich mit seinem langen Hals, brachte seine dünnen Füße in eine zierliche Stellung und sprach: „Nachteule! Deinen Worten nach darf ich glauben, eine Leidensgefährtin in dir zu sehen. Aber ach! Deine Hoffnung, daß durch uns deine Rettung kommen werde, ist vergeblich. Du wirst unsere Hilflosigkeit selbst erkennen, wenn du unsere Geschichte hörst.“ Dieachteule bat ihn zu erzählen, der Kalif aber¹ hub an und erzählte, was wir bereits wissen.

III

Als der Kalif der Eule seine Geschichte vorge² tragen hatte, dankte sie ihm und sagte: „Vernimm auch meine Geschichte und höre, wie ich nicht weniger unglücklich bin als du. Mein Vater ist der König von Indien, ich, seine einzige unglückliche Tochter, heiße Lusa. Jener Zauberer Kaschnur, der euch verzauberte, hat auch mich ins Unglück gestürzt. Er kam eines Tages zu meinem Vater und beehrte mich zur Frau für seinen Sohn Mizra. Mein Vater aber, der ein hitziger Mann ist, ließ ihn die Treppe hinunterwerfen. Der Elende wußte sich unter einer andern Gestalt wieder in meine Nähe zu schleichen, und als ich einst in meinem Garten Erfrischungen zu mir nehmen wollte, brachte er mir, als Sklave verkleidet, einen Trank bei, der mich in diese abscheuliche Gestalt verwandelte. Vor Schrecken ohnmächtig,³ brachte er mich hierher und rief mir mit schrecklicher Stimme in die Ohren: Da sollst du bleiben, häßlich, selbst von den Tieren verachtet, bis an dein Ende, oder bis einer aus freiem Willen dich, selbst

verachten
achten

教主は驚きから気が落付いて来た時に、その長い首で御辭儀をして、彼の細い足を美事な姿勢に持つて來、そして教主は云ひました「梟さん、貴方の御言葉に依て察すると、貴女は吾々同様難儀をなされておられる御婦人と察せられますな。しかし噫、吾々が貴方を助ける事が出来るだらうと云ふ貴方の望は駄目ぢや。貴方が吾々の話を聞いたなら、吾々が助ける力のない事が分るぢやらう。」梟は教主にその身の上話をしてくれと頼みました。教主はそこで吾等讀者が既に知つて居る事を物語り始めました。」

III

教主が梟に自分の身の上を仕た時に、梟は教主に感謝して云ひました、「私の物語にも御耳を貸して下さいませ、して私がどれほど貴方に劣らず不幸者であるか御聞き下さい。妾の父は印度王でして、妾は父のたつた一人の不幸な娘の、名はルーザと申します。かの貴方がたに呪文をかけた魔法師のカシユムールはまた、私を不幸に陥れたので御座います。あの男は或る日妾の父の所へやつて來て、妾をあの男の子息のミツラの妻にくれと申出でました。しかし妾の父は腹立ち易い人でしたから、あの男を階段から突き落したので御座います。此の非道い目にあつた魔法使は、ほかの妾で妾の身近くに忍んで來まして、妾が妾の花園で清涼液を取らうと思つて居ました折に、奴隷の妾に化けて、飲み物を妾の所へ持つて來ましたが、その飲み物が妾を此様な嫌々な形に變へて了つたので御座います。愕きの餘り氣絶して居る妾をこゝに持つて來て、妾の耳にあの男は物凄く聲で叫びました、お前は見悪くなつて畜生にすら卑まれて、死ぬ迄か或は、ある者がこの嫌々な妾のお前でも、喜んで妻にし

in dieser schrecklichen Gestalt, zur Gattin begehrt. So räche ich mich an dir und deinem stolzen Vater.

Seitdem sind viele Monate verflossen. Einsam und traurig lebe ich als Einsiedlerin in diesem Gemäuer, verabscheut von der Welt, selbst den Tieren ein Greuel; die schöne Natur ist vor mir verschlossen, denn ich bin blind am Tage, und nur, wenn der Mond sein bleiches Licht über dies Gemäuer ausgießt, fällt der verhüllende Schleier von meinem Auge."

Die Eule hatte geendet und wischte sich mit dem Flügel wieder die Augen aus, denn die Erzählung ihrer Leiden hatte ihr Tränen entlockt.

Der Kalif war bei der Erzählung der Prinzessin in tiefes Nachdenken versunken. „Wenn mich nicht alles täuscht," sprach er „so findet zwischen unserem Unglück ein geheimer Zusammenhang statt; aber wo finde ich den Schlüssel zu diesem Rätsel?" Die Eule antwortete ihm: „O Herr! auch mir ahnet dies; denn es ist mir einst in meiner frühesten Jugend von einer weisen Frau prophezeit worden, daß ein Storch mir ein großes Glück bringen werde, und ich wüßte vielleicht, wie wir uns retten könnten." Der Kalif war sehr erstaunt und fragte, auf welchem Wege sie meine. „Der Zauberer, der uns beide unglücklich gemacht hat," sagte sie, „kommt alle Monate einmal in diese Ruinen. Nicht weit von diesem Gemach ist ein Saal. Dort pflegt er dann mit vielen Genossen zu schmausen. Schon oft habe ich sie dort belauscht. Sie erzählten dann einander ihre schändlichen Werke, vielleicht, daß er dann das Zauberwort, das Ihr vergessen habt, ausspricht."

„O teuerste Prinzessin," rief der Kalif, „sag' an,

やうと望むまでこゝに留まらなければならない。こうして私はお前とお前の高慢な父に、仇返しをしてやるのだとの事で御座いました。

その時から多くの月が経過しました。私は世の中から嫌はれ、動物にさへ恐れられる者となつて、寂しく悲しく隠遁者として此の部屋に住んで居ります。美しい自然は妾の前に閉ぢられました。何故なれば私は日中は盲目で御座いますから、只月がその青白い光を此の壁の上に注ぎかける時ばかり、蔽はれた覆ひが目から取れるので御座います。」

梟は話を終つて再び翼で目を拭きました。何故なれば自分の苦勞した話が彼女の涙を誘ひましたからです。

教主は王女の話してゐる際に深い考へに沈んで居りました。「萬事が私を欺かぬものとしたならば、吾々の不幸の間には神秘的な關係が出来て居るのぢや」と教主は云ひました——「しかし私は此の謎を解く鍵を何處で見出すことが出来やう？」梟は彼に答へました、「おーあなた！妾にもそう云ふ事が出来さうな氣がいたします、何故なれば妾は妾がすつと若い子供の時代に、ある時一人の智識のたけた婦人から、或る鶴が妾に大なる幸福を齎らすだらうと云ふことを豫言されました。で妾は多分吾々が何うして助かることが出来るか、それを知つて居るかも知れません。」教主は非常に驚いて如何なる方法を彼女が考へて居るかを尋ねました。「吾々二人を不幸にした魔法師は毎月一度この廢墟に参ります」——彼女は申すのでした——「此の部屋から遠からぬ所に廣間があります。そこであの男は大勢で宴會を開くの常として居ります。これ迄度々妾はそこで彼の人達の話を盗聴きしました。あの人達は相互に、自分が人にあだをした仕事について話して居りました。それ故恐らく貴方がお忘れになつた呪文の言葉も話すことがありましやう。」

「おー尊い王女よ」と教主は叫びました、「何時彼がやつて來ます

wann kommt er, und wo ist der Saal?"

Die Eule schwieg einen Augenblick und sprach dann: „Nehmet es nicht ungütig, aber nur unter einer Bedingung kann ich euren Wunsch erfüllen.“ — „Sprich aus! Sprich aus!“ schrie Chasid. „Befehl, es ist mir jede recht.“

„Nämlich ich möchte auch gerne zugleich frei sein, dies kann aber nur geschehen, wenn einer von euch mir seine Hand reicht.“

Die Störche schienen über den Antrag etwas betroffen zu sein, und der Kalif winkte seinem Diener, ein wenig mit ihm hinaus zu gehen.

„Großwesir," sprach vor der Türe der Kalif, „das ist ein dummer Handel, aber Ihr könntet sie schon nehmen.“

„So?" antwortete dieser, „daß mir meine Frau, wenn ich nach Haus komme, die Augen auskratzt? Auch bin ich ein alter Mann, und Ihr seid noch jung und unverheiratet, und könnet eher einer jungen schönen Prinzessin die Hand geben.“

„Das ist es eben," seufzte der Kalif, indem er traurig die Flügel hängen ließ, „wer sagt dir denn, daß sie jung und schön ist? Das heißt die Katze³ im Sack kaufen!"

Sie redeten einander gegenseitig noch lange zu, endlich aber, als der Kalif sah, daß sein Wesir lieber Storch bleiben, als die Eule heiraten wollte, entschloß er sich, die Bedingung lieber selbst zu erfüllen. Die Eule war hocheifrig. Sie gestand ihnen, daß sie zu keiner bessern Zeit hätten kommen können, weil wahrscheinlich in dieser Nacht die Zauberer sich versammeln würden.

Sie verließ mit den Störchen das Gemach, um sie in jenen Saal zu führen; sie gingen lange in

ca, して其の廣間は何處に在りますか御話し下され。

梟は暫く黙つて居りましたが、やがて申しました「悪く取つて下さいますな。お話しは致しますが、然し妾はある条件の下で丈、貴方の御望を叶へて差上げまじやう。」「おつしやつて下され、おつしやつて下され」とカシツドは叫びました、「仰せ下されどんな条件でも結構です。」

「と申すのは、妾も何うぞして御一所に自由になりたいので御座います。しかしこの事は貴方がたの中の御一人が、妾を妾にお望み下さることによつて出来るので御座います。」

鶴たちは此の申出について聊かぎよつとした様でした。で教主はその侍従に、自分と共に暫く室の外へ行く様にくばせしました。

「函相!」と教主は戸の前で云ひました、「これは馬鹿馬鹿しい取引ぢや、しかしそなたは大丈夫あの梟を妾とするぢやらうな。」

「妾にするのですつて?」と函相は返辭をしました、「手前が家へ歸つたなら、手前の妻は手前を睨付けるのにですか。その上手前は年寄でもあります。吾君は未だお若く未婚でいらせらるゝで、吾君こそ寧ろ若い美しい王女に結婚の承諾をしてよろしいので御座りまじやうか。」

「話はそぢや」と教主は悲しそうに翼を垂らし乍ら嘆息しました、「一體彼の女が若くて美しいなど、誰がそなたに申した? それは見ずに物を買ふ様なものぢや。」

彼等は互ひに何時までも張合つて言争つて居りましたが、終には函相が梟と結婚する氣になるよりは、寧ろ鶴で居た方がよいと思つて居るのを教主が知つた時に、教主はいつそ其の条件を自分が叶へてやらうと決心しました。梟は大變喜びました。梟は二人が今日よりもつと都合のよい時には、決して來られなかつたらうと彼等二人に打明けました。何故なれば今夜、魔法師連が多分集るらしいからだとの事でした。

梟は鶴をその廣間へ案内する爲めに一緒に其の部屋を出ました。して彼等は永い間一つの暗い廊下を通つて行きましたが、終に半ば

einem finstern Gang hin; endlich strahlte ihnen aus einer halbverfallenen Mauer ein heller Schein entgegen. Als sie dort angelangt waren, riet ihnen die Eule, sich ganz ruhig zu verhalten. Sie konnten von der Lücke, an welcher sie standen, einen großen Saal übersehen. Er war ringsum mit Säulen geschmückt und prachtvoll verziert. Viele farbige Lampen ersetzten das Licht des Tages. In der Mitte des Saales stand ein runder Tisch, mit vielen und ausgesuchten Speisen besetzt. Ringsum den Tisch zog sich ein Sofa, auf welchem acht Männer saßen. In einem dieser Männer erkannten die Störche jenen Krämer wieder, der ihnen das Zauberpulver verkauft hatte. Sein Nehensitzer forderte ihn auf, ihnen seine neuesten Taten zu erzählen. Er erzählte unter andern auch die Geschichte des Kalifen und seines Wesirs.

„Was für ein Wort hast du ihnen denn aufgegeben?“ fragte ihn ein anderer Zauberer. „Ein recht schweres lateinisches, es heißt Mutabor.“

V

Als die Störche an ihrer Mauerlücke dieses hörten, kamen sie vor Freude beinahe außer sich. Sie liefen auf ihren langen Füßen so schnell dem Tor der Ruine zu, daß die Eule kaum folgen konnte. Dort sprach der Kalif gerührt zu der Eule: „Retterin meines Lebens und des Lebens meines Freundes, nimm zum ewigen Dank für das, was du an uns getan, mich zum Gemahl an.“ Dann aber wandte er sich nach Osten. Dreimal bückten die Störche ihre langen Häuse der Sonne entgegen, die soeben hinter dem Gebirge heraufstieg; Mutabor, riefen sie, und im Nu¹ waren sie ver-

bleibten. 壊れた壁からきらきらとした光が彼等を照しました。其の壁の所へ来た時に、梟は二人に極く静かにしてくれと聲をかけました。彼等は自分等の立つてゐるところの傍の隙目から廣間を覗くことが出来ました。廣間は周圍が柱で以つて飾られてあつて、又立派に裝飾されて居ました。色々の色のランプが日の光の足らぬところを補ひました。廣間の眞中には澤山の、そして廻り集めた珍味を置いてある圓い机がありました。机のまはりには一つの安樂椅子が長々と据ゑられて、其の上に八人の男が座つて居ました。これらの男の一人の中に、教主と函相に魔法の呪薬を賣つた、あの小間物屋が居るといふことを二人は認めました。其の小間物屋の傍に座つて居る人は、彼の一番近頃の仕事について話してくれと催促しました。小間物屋は外の話の中で特に教主と函相の語をしました。

「では一體お手前はどんな言葉を彼等に教へてやつたか？」と他の一人の魔法師が彼に尋ねました。「それは非常に難しいラテン語で、ムターボルと云ふ言葉さ。」

V

鶴が壁の孔の所でこの話を聞いた時に、歡しさの餘り殆んど氣が狂ひさうで有りました。彼等は其の長い足で非常に早く荒城の門の方へ走つて行きました。その爲めに梟は殆んど附いて行く事が出来なかつた程でした。回々教主は其處で大いに感慨に打たれて梟に話しました: 予の命と予の友の命の救人よ、貴方が吾々に爲してくれた事に對する永久の感謝の印として、どうか予を貴方の夫に取つて下され。それから更に彼は東方に向ひました。二羽の鶴はその時丁度山の端から上つて来た所の太陽に向つて、三たび其長い首を下げ、二人はムターボルと叫びました。所が忽ち二人は人間に變りま

wandelt, und in der hohen Freude des neu geschenkten Lebens lagen Herr und Diener lachend und weinend einander in den Armen. Wer beschreibt aber ihr Erstaunen, als sie sich umsahen? Eine schöne Dame, herrlich geschmückt, stand vor ihnen. Lächelnd gab sie dem Kalifen die Hand. „Erkennt ihr eure Nachteule nicht mehr?“ sagte sie. Sie war es; der Kalif war von ihrer Schönheit und Anmut so entzückt, daß er ausrief: Es sei sein größtes Glück, daß er Storch geworden sei.

Die drei zogen nun miteinander auf Bagdad zu. Der Kalif fand in seinen Kleidern nicht nur die Dose mit Zauberpulver, sondern auch seinen Geldbeutel. Er kaufte daher im nächsten Dorfe, was zu ihrer Reise nötig war, und so kamen sie bald an die Tore von Bagdad. Dort aber erregte die Ankunft des Kalifen großes Erstaunen. Man hatte ihn für tot ausgegeben, und das Volk war daher hoch erfreut, seinen geliebten Herrscher wieder zu haben.

Um so mehr aber entbrannte ihr Haß gegen den Betrüger Mizra. Sie zogen in den Palast und nahmen den alten Zauberer und seinen Sohn gefangen. Den Alten schickte der Kalif in dasselbe Gemach der Ruine, das die Prinzessin als Eule bewohnt hatte, und ließ ihn dort aufhängen. Dem Sohn aber, welcher nichts von den Künsten des Vaters verstand, ließ der Kalif die Wahl, ob er sterben oder schnupfen wolle. Als er das letztere wählte, bot ihm der Großwesir die Dose. Eine tüchtige Prise, und das Zauberwort des Kalifen verwandelte ihn in einen Storch. Der Kalif ließ ihn in ein eisernes Käfig sperren und in seinem Garten aufstellen.

した。で新しく恵まれた生の高い喜びに於て、君と臣の二人は泣き笑ひつして互に抱き合ひました。然し彼等が振回つて見た時の驚きの様は誰が描けませうか。立派に飾つた一人の綺麗な婦人が彼等の前に立つて居ました。婦人は微笑みつゝ教主に手を差出しました。「貴方がたは最早梟をば御分りないのですか」と婦人は申しました。かの女は梟なのでした。教主は自分が鶴となつた事は非常に幸福であつたと叫んだ程、婦人の美と愛嬌とのために恍惚としました。

三人は今や一所にバグダツトの方へ道を取りました。教主は自分の衣服の内に魔法の粉の入つた箱ばかりでなく、亦金財布まで見出しました。彼はそれ故次の村で旅行に必要な物を買ひ、斯うして三人は間もなくバグダツトの城門まで來ました。ところが其處では教主の到着が非常に市民を驚かしました。人々は教主をば既に死んだものと見なして居ましたから、市民は彼らの墓ふてゐた君主を再び迎へるのを非常に喜びました。

然し喜べば喜ぶ程、偽者のミヅラに對する國民の憎惡の念は益々燃立ちました。國民は宮殿に押し寄せまして、老魔法師と其息子をば捕へました。教主は此老人をば梟として王女が住んで居た所の荒城内のあの室へ押込めまして、其處で首を釣上げました。然し父親の妖術に關しては何も心得てゐなかつた所の息子に對しては、教主は彼が死ぬなり又は呪劑を嗅ぐなり、何れとも其望む方を撰ませました。息子が嗅ぐ方を撰びました時に、宰相は彼に呪劑の箱を提供しました。藥のたつぶり一撮みと教主の呪言とは、彼を鶴に變化させました。教主はこの鶴をば鐵製の籠の中に閉ぢ込めて、彼の庭園に据えて置きました。

Lange und vergnügt lebte Kalif Chasid mit seiner Frau, der Prinzessin; seine vergnügtesten Stunden waren immer die, wenn ihn der Großwesir nachmittags besuchte; da sprachen sie dann oft von ihrem Storchententeuer, und wenn der Kalif recht heiter war, ließ er sich herab, den Großwesir nachzuahmen, wie er als Storch aussah. Er stieg dann ernsthaft, mit steifen Füßen im Zimmer auf und ab, klapperte, wedelte mit den Armen, wie mit Flügeln, und zeigte, wie jener sich vergeblich nach Osten geneigt und Mu — Mu — dazu gerufen habe. Für die Frau Kalifin und ihre Kinder war diese Vorstellung allemal eine große Freude; wenn aber der Kalif gar zu lange klapperte und nickte und Mu — Mu — schrie, dann drohte ihm lächelnd der Wesir, er wolle das, was vor der Türe der Prinzessin Nachteule verhandelt worden sei, der Frau Kalifin mitteilen.

Als Selim Baruch seine Geschichte geendet hatte, bezeugten sich die Kaufleute sehr zufrieden damit. „Wahrhaftig, der Nachmittag ist uns vergangen, ohne daß wir es merkten, wie!“ sagte einer derselben, indem er die Decke des Zeltes zurückschlug. „Der Abendwind wehet kühl, wir könnten noch eine gute Strecke Weges zurücklegen.“ Seine Gefährten waren damit einverstanden, die Zelte wurden abgebrochen, und die Karawane macht sich in der nämlichen Ordnung, in welcher sie herangezogen war, auf den Weg.¹

Sie ritten beinahe die ganze Nacht hindurch; denn es war schwül am Tage, die Nacht aber war erquicklich und sternhell. Sie kamen endlich an einem bequemen Lagerplatz an, schlugen die Zelte

教主は満足して王女なる自分の夫人と共に長い間暮しました。教主の一番満足な時は、何時も宰相が午後に彼を訪問する時でありました。其時に二人は屢々彼等が鶴となつた遭難の談を語合ひしました。さうして教主がいたく上機嫌に成りますと、宰相が鶴であつた時、どんな身振り様子をしたかを真似するために御座から下りて参ります。其れから教主は眞面目くさつて、硬ばつた足つきで部屋の中をあちこちと跳れて廻り、又カクカクと口で音を立て、翼でする様に腕を以て羽叩きをしました。さうして宰相が如何に無駄骨折つて東方に向つて御辭儀をし、其上ム—ム—と叫んだかを仕ぐさで表はしました。教主夫人及び其子供達に取つては、此の身振りが何時も非常な喜びでありました。然し教主が餘り非常に長い間カクカクと口で音を立て、首を下げてム—ム—と叫ぶ折には、王女なる梟の戸の前ところで、何んな事が商議されたかを教主夫人に打明けますよといつて、宰相は笑ひながら教主を脅しました。

セリム・バルツフが話を終りました時に、商人共は其話で非常に満足しました。「いや實際、知らない中に午後の時間が過ぎ去つて了ひましたね」と天幕の幕をば撥れのけて商人の中の一人が言ひました。「夕風は冷々と吹いてゐる。吾々は尙ほ大ぶんの道を進む事が出来やう」。彼の仲間は其れに同意しました。天幕は取りはづされました。さうして隊商は今迄進んで来たのと同じ順序を整へて出發しました。

彼等は殆ど夜通し乗り續けました。何となれば日中は蒸熱いから、夜は爽快で星が晴れてゐましたからでした。遂に彼等は好適な露營所へ到着して、天幕を張つて、其處でやすみました。ところで此外客

auf und legten sich zur Ruhe. Für den Fremden aber sorgten die Kaufleute, wie wenn er ihr wertester Gastfreund wäre. Der eine gab ihm Polster, der andere Decken, ein dritter gab ihm Sklaven, kurz, er wurde so gut bedient, als ob er zu Hause wäre. Die heißeren Stunden des Tages waren schon heraufgekommen, als sie sich wieder erhoben, und sie beschlossen einmütig, hier den Abend abzuwarten. Nachdem sie miteinander gespeist hatten, rückten sie wieder näher zusammen, und der junge Kaufmann wandte sich an den Ältesten und sprach: „Selim Baruch hat uns gestern einen vergnügten Nachmittag bereitet, wie wäre es, Achmet, wenn Ihr uns auch etwas erzähltet, sei es nun ans Euren langen Leben, das wohl viele Abenteuer aufzuweisen hat, oder sei es auch ein hübsches Märchen.“ Achmet schwieg auf diese Anrede eine Zeitlang, wie wenn er bei sich im Zweifel wäre, ob er dies oder jenes sagen sollte, oder nicht, endlich fing er an zu sprechen: „Liebe Freunde! Ihr habt euch auf dieser unserer Reise als treue Gesellen erprobt, und auch Selim verdient mein Vertrauen; daher will ich euch etwas aus meinem Leben mitteilen, das ich sonst ungern und nicht jedem erzähle: die Geschichte von dem Gespensterschiff.“

③

Die Geschichte von dem Gespensterschiff.

Mein Vater hatte einen kleinen Laden in Balsora. Er war weder arm noch reich und einer von jenen Leuten, die nicht gerne etwas wagen, aus Furcht das Wenige zu verlieren, das sie haben. Er erzog mich schlicht und recht und brachte es

に對して商人共は、恰も自分達の最も大切な御客様であるかの様に世話を致しました。一人の商人は彼に長布團を提供しましたし、又他の人は掛蒲團を、第三の商人は奴隷を彼に與へました。簡単に申せば、彼は恰も家に居る時の様に非常に丁寧な取扱を受けたのでありました。彼等が再び寢床を離れた時は、既に日中のすつと熱い時となつて居ました。で彼等は此處で晩の來るのを待つ事と異口同音に一決しました。彼等が一所に食事を済した後で、彼等は再び密集致しました。そして若い商人が一番の年寄りに向つて言ひました「セリム・バルツフさんは昨日吾々に満足な午後を供へて下さいました。何うですれアハメツトさん、貴方が吾々どもに又何かお話し下されては? 恐らく澤山の冒険談を示せる丈けのものを持つてゐる、貴方の長い生涯からの話でも宜しいし、それとも又可愛いお伽噺でも結構です。」アハメツトは斯く話しかけられたけれども、彼はあの事を話さうか、それとも此の事を話さうか、それとも亦話さないで置かうかなどい、迷つて居るかの様に暫くの間黙して居りましたが、遂に彼は話の口を切りました。「親しい友がた、御前さんがたはこの吾々の旅行中に、誠實な仲間であるといふ證據を見せられた。して亦セリムさんも私の信用を置けるお方ぢや。それぢやに依つて私はふだん嫌やであつて誰れにも話さない私の生涯からの一寸した話、即ち幽霊船の話を御前さんがたに御話ししやうと思ひますぢや。」

幽霊船の話

私の父はバルゾーラに小さな店を持つて居ました。父は貧乏ではなかつたが又金持ちでもなく、自分の持つてる財産の僅かばかりのものを無くすのを恐れて、敢て何も思切つた事をする氣になれない人々の一人でありました。父は私を生一本で正直な人間に育上げ

bald soweit, daß ich ihm an die Hand^{laufen} gehen konnte. Gerade als ich achtzehn Jahre alt war, und er eben die erste größere Spekulation machte, starb er, wahrscheinlich aus Gram, tausend Goldstücke dem Meere anvertraut zu haben. Ich mußte ihn bald nachher wegen seines Todes glücklich preisen, denn wenige Wochen hernach lief die Nachricht ein, daß das Schiff, dem mein Vater seine Güter mitgegeben hatte, versunken sei. Meinen jugendlichen Mut konnte aber dieser Unfall nicht beugen. Ich machte alles vollends zu Geld, was mein Vater hinterlassen hatte, und zog aus, um in der Fremde mein Glück zu probieren, nur von einem alten Diener meines Vaters begleitet, der sich aus alter Anhänglichkeit nicht von mir und meinem Schicksal trennen wollte.

Im Hafen von Balsora schifften wir uns mit günstigem Winde ein. Das Schiff, auf dem ich mich eingemietet hatte, war nach Indien bestimmt. Wir waren schon fünfzehn Tage auf der gewöhnlichen Straße gefahren, als uns der Kapitän einen Sturm verkündete. Er machte ein bedenkliches Gesicht, denn es schien, er kenne in dieser Gegend das Fahrwasser nicht genug, um einem Sturm mit Ruhe begegnen zu können. Er ließ alle Segel einziehen, und wir trieben ganz langsam hin. Die Nacht war angebrochen, war hell und kalt, und der Kapitän glaubte schon, sich in den Anzeichen des Sturmes getäuscht zu haben. Auf einmal schwebte ein Schiff, das wir vorher nicht gesehen hatten, dicht an dem unsrigen vorbei. Wildes Jauchzen und Geschrei erscholl von dem Verdeck herauf, worüber ich mich, zu dieser angstvollen Stunde vor einem Sturm, nicht wenig wunderte.

て、間もなく私が父の助けの出来るまでに仕込みました。丁度私が十八歳になつた折で、父が始めてこれ迄にない大きな投機事業に手を出した時に、大方は数千の金貨を海上に托した事を苦にした爲めだつたらうか死んで了ひました。其後間もなく私は父の死を幸福であつたと謂はればならなかつたのです。何となれば数週間後に、父が貨物を委託したる船は、沈没したといふ評判が立つたからでありました。然しながら此の不幸は私の青年の意氣を挫く事は出来なかつたのでした。私は私の父が残して行つた物を一切金にして、外周で私の運試したせんものと飛び出しました。僕には只一人の老僕を連れしました。彼は昔から奉公してゐたといふ關係からして、私と私の運命からは離れやうと思はなかつたのでした。

バルゾーラの港で私達は乗船しまして、好都合の追風と共に出帆しました。私の乗込んだ船は印度へと航路は定まつておりました。吾々は既に十五日間も普通航路を航海しました時に、船長は暴風の警報を與へました。船長は氣遣はしい顔付を致しました。何となれば彼は此邊の海上では安神して暴風に對抗する程、充分に航路を知らない様子でしたから。彼は帆を凡て下ろさせまして、吾々は非常に緩ゆる航海しました。夜が始まりました。返へた寒い晩でした。で船長は最早暴風の前兆を見違へたと思つてました。ところへ不意に以前には吾々が見た事のない一艘の船が、吾々の船のすぐ側を通り過ぎました。荒々しい歡呼の聲や叫聲が其甲板から響渡つて來ました。其聲について私は、暴風の前にびくびくしてゐる時でしたから、少なからず不思議に思ひました。然し私の側にゐた船

Aber der Kapitän an meiner Seite wurde blaß wie der Tod. „Mein Schiff ist verloren,” rief er, „dort segelt der Tod!” Ehe ich ihn noch über diesen sonderbaren Ausruf befragen konnte, stürzten schon heulend und schreiend die Matrosen herein: „Habt ihr ihn gesehen?” schrien sie, „jetzt ist's mit uns vorbei!”

Der Kapitän aber ließ Trostsprüche aus dem Koran vorlesen und setzte sich selbst ans Steueruder. Aber vergebens! Zusehends brauste der Sturm auf, und ehe eine Stunde verging, krachte das Schiff und blieb sitzen. Die Boote wurden ausgesetzt, und kaum hatten sich die letzten Matrosen gerettet, so¹ versank das Schiff vor unsern Augen, und als ein Bettler² fuhr ich in die See hinaus. Aber der Jammer hatte noch kein Ende. Fürchterlicher tobte der Sturm, das Boot war nicht mehr zu regieren. Ich hatte meinen alten Diener fest umschlungen, und wir versprachen uns, nie voneinander zu weichen. Endlich brach der Tag an. Aber mit dem ersten Anblick der Morgenröte faßte der Wind das Boot, in welchem wir saßen, und stürzte es um. Ich habe keinen meiner Schiffsleute mehr gesehen. Der Sturz hatte mich betäubt; und als ich aufwachte, befand ich mich in den Armen meines alten treuen Dieners, der sich auf das umgeschlagene Boot gerettet, und mich nachgezogen hatte. Der Sturm hatte sich gelegt. Von unserem Schiff war nichts mehr zu sehen, wohl aber entdeckten wir nicht weit von uns ein anderes Schiff, auf das die Wellen uns hintrieben. Als wir näher hinzukamen, erkannte ich das Schiff als dasselbe, das in der Nacht an uns vorbeigefahren und welches den Kapitän so sehr in Schrecken gesetzt hatte.

長は死人の様に青くなりました。「私の船は助らない」——彼は叫びました——「死人が其處を航行してる。」で此の奇怪な叫聲に就て私が尙ほ尋ねない内に、水夫共は唸りつ悲鳴をあげつして飛込んで来ました。「貴所方はあれを見ましたか」——彼等は叫びました——「もう吾々は駄目です。」

然しながら船長はコーラン(回々教の經典)の中から慰めの經文を讀上げさせて、自分自ら舵機の所に座りました。然し無効でした。見る間に暴風は烈しく荒れ出して、一時間立たない中に船はガラリと響を立て、停止しました。端艇は下されて、最後の水夫が助けられたか助けられぬ先に、船は眼前に沈没しました。そして救助者をあてにする人となつて、私は海を漕出しました。然しながら悲惨はまだそれでお終ひにならなかつたのです。暴風は益々恐ろしく荒れ狂ひ、端艇は最早操縦する事も出来なくなりました。私は老僕をば確かと抱いて、決して互に離れない様に約しました。遂に夜が明けました。然し始めての曙の光を見たと同時に、風は吾々の乗つた端艇を攫んで、遂に之を轉覆させました。私は最早船員の一人も見ませんでした。轉覆は私の氣を喪はさせました。で私が正氣に歸つて見ると、私は顛覆した端艇の上へ乗つて命拾ひをして、私を引上げてくれた忠實なる老僕の腕の中にあるのを見出しました。暴風は静まりました。吾々の船に就ては何物を見る事は出来なかつたのでした。然るに實に吾々は吾々から程遠くない所に、他の一艘の船を見附けましたのですが、浪は其船の方へ吾々を追流して行くのです。私は漸次近づいてみますと、私は其船が昨夜吾々の側を通り過ぎたもので、その船が船長をば非常に驚かした所のものである事

Ich empfand ein sonderbares Grauen vor diesem Schiffe. Die Äußerung des Kapitäns, die sich so furchtbar bestätigt hatte, das öde Aussehen des Schiffes, auf dem sich, so nahe wir auch herankamen, so laut wir schrien, niemand zeigte, erschreckte mich. Doch es war dies¹ unser einziges Rettungsmittel, darum priesen wir den Propheten, der uns so wundervoll erhalten hatte.

Am Vorderteil des Schiffes hing ein langes Tau herab. Mit Händen und Füßen ruderten wir darauf zu, um es zu erfassen. Endlich glückte es. Laut erhob ich meine Stimme, aber immer blieb es still auf dem Schiff. Da klimmten wir an dem Tau hinauf, ich als der Jüngste voran. Aber Entsetzen! Welches Schauspiel stellte sich meinem Auge dar, als ich das Verdeck betrat! Der Boden war mit Blut gerötet, zwanzig bis dreißig Leichname in türkischen Kleidern lagen auf dem Boden, am mittleren Mastbaum stand ein Mann, reich gekleidet, den Säbel in der Hand, aber das Gesicht war blaß und verzerrt, durch die Stirne ging ein großer Nagel, der ihn an den Mastbaum heftete, auch er war tot. Schrecken fesselte meine Schritte, ich wagte kaum zu atmen. Endlich war auch mein Begleiter heraufgekommen. Auch ihn überraschte der Anblick des Verdeckes, das gar nichts Lebendiges, sondern nur so viele schreckliche Leichname zeigte. Wir wagten es endlich, nachdem wir in der Seelenangst zum Propheten gefleht hatten, weiter vorzuschreiten. Bei jedem Schritte sahen wir uns um, ob nicht etwas Neues, noch Schrecklicheres sich darbiete. Aber alles blieb, wie es war. Weit und breit² nichts Lebendiges, nur wir und das Weltmeer. Nicht einmal³ laut zu sprechen

を認めました。私は此の船に對して唯ならぬ恐れを感じました。かくも恐ろしく事實となつた船長の言葉、如何程近づいても、如何程聲高く叫んでも、誰れ一人出て來ない所の船のすさまじい有様などが私を驚かしました。然し是れが吾々の唯一つの救助物でありましたから、吾々は吾々を不思議にも助けて下された豫言者(マホメツトの事)を賞讃へました。

船首には一本の長い綱が下つて居ました。吾々は其を掴まんがために其方へ手や足で漕いで行きました。遂に成功しました。私は大聲を揚げましたが、然し相變らず船上はひっそりして居ました。其時に吾々は綱につかまつて上つて行きました。最年少者の私は真先に上りました。ところが驚いたの愕かないの。私が甲板に足をかけると、如何なる光景が目前に現はれたてしやう!。床板は血で紅かに染み、床上には土耳其の服装をした二十乃至三十の屍骸が横はつて居て、中央の帆柱の側には、立派な着物を附け、手には洋刀を持つた一人の男が立つて居ましたが、顔は青ざめて皺を寄せ、額には此人を帆柱に固く打附けにしてる大きな釘が付き通つて居ました。此人も亦死んで居ました。驚きが私の歩みを縛つて、私は息つく事もやつと出來た位でした。遂に私の従者も亦上つて來ました。生きた人間は一人もなく、たゞ斯様に澤山の恐ろしい屍ばかりを見た、甲板上の此の光景に彼も膽をつぶしました。吾々は心配の餘り豫言者様に祈願をこめた後、終に思切つて猶ほ先へ行つて見ました。吾々は一步進む毎に何か新しい事、もつと怖ろしい事が起りやまいかと周りを見回しました。然し何から何までそのまゝで動きませんでした。見渡すかぎり生きものは一つも無く、只々吾等二人

wagten wir, aus Furcht, der tote, am Mast ange-
spießte Kapitano möchte¹ seine starren Augen nach
uns hindrehen, oder einer der Getöteten möchte
seinen Kopf umwenden. Endlich waren wir bis an
eine Treppe gekommen, die in den Schiffsraum
führte. Unwillkürlich machten wir dort Halt und
sahen einander an, denn keiner wagte es recht,²
seine Gedanken zu äußern.

„O Herr,“ sprach mein treuer Diener, „hier ist
etwas Schreckliches geschehen. Doch, wenn auch
das Schiff da unten³ voll Mörder steckt, so will
ich mich ihnen doch lieber auf Gnade und Ung-⁴
nade ergeben, als längere Zeit unter diesen Toten
zubringen.“ Ich dachte wie er, wir faßten ein
Herz⁵ und stiegen voll Erwartung hinunter. Toten-
stille war aber auch hier, und nur unsere Schritte
hallten auf der Treppe. Wir standen an der Türe
der Kajüte. Ich legte mein Ohr an die Türe und
lauschte; es war nichts zu hören. Ich machte auf.
Das Gemach bot einen unordentlichen Anblick dar.
Kleider, Waffen und anderes Geräte lagen unter-
einander. Nichts in Ordnung. Die Mannschaft oder
wenigstens der Kapitano mußte vor kurzem gezecht
haben, denn es lag alles noch umher. Wir gingen
weiter von Raum zu Raum, von Gemach zu Ge-
mach, überall fanden wir herrliche Vorräte in Seide,
Perlen, Zucker und so weiter. Ich war vor Freude
über diesen Anblick außer mir, denn da niemand
auf dem Schiffe war, glaubte ich, alles mir zueignen
zu dürfen, Ibrahim aber machte mich aufmerksam
darauf, daß wir wahrscheinlich noch sehr weit vom
Land seien, wohin wir allein und ohne menschliche
Hilfe nicht kommen könnten.

Wir labten uns an den Speisen und Getränken,

と海ばかりでした。帆柱の所に釘付けにされて死んだ船長が、彼の
死んだどんより眼を吾々の方に向けやしまいか、それとも亦殺され
た人の一人が頭をふり向けやしまいかといふ怖さに、大聲で話し
る度胸すら出ませんでした。遂に吾々は船室の方へ通つて居る階
段まで乗りましたが、吾々は思はず識らず其處に立留まつて、互に
顔を見合せました。何故といふのに何れも自分の思ひを、確かつと
思切つて言表す事が出来なかつたからでした。✓

「オ、旦那様」——私の忠僕は申しました——「此處では何か怖ろ
しい事が起つたので御座いますな。然しです、よし此の下の方に人
殺しがいつげいに隠れて居ましても、私はいつ迄もこんな死人の間
で時を過すよりも、いつその事どんな目に逢ふとも、彼等に降参した
方がましと思ひます。」私も彼と同じ様に考へました。で吾々は度
胸を定め、詰度何か起るだらうと十分豫期をして下りて行きました。
ところがやはり此處も亦死んだやうに静かでありまして、吾々の足
音ばかりが階段の上で響きました。吾々は船室の戸の所へ立ちまし
た。私は耳を戸にあて、立聞きしてみました、聞えるものは何も
ありませんでした。私は戸を開けました。室は不秩序な光景を呈
して居ました。着物や武器やその外の道具が、互に重なりあつて散
らばつておました。』¹⁹一つとして整頓して有るものはありませんでし
た。乗組員が少くとも船長が、少し前に大酒を飲んだに違ないので
した。何となれば凡ての物がごろごろと散在して居ましたからで
す。吾々は尙ほ大部屋から小部屋と見廻りまして、到る所に立派な
絹物、眞珠貝、砂糖や其他色々な物を見出しました。私は此光景を
見て、喜びの餘り我れを忘れんばかりでありました。何故となれば
船には誰も居ないから、凡ての物は私のものとしてもよいと私は思
つたからでした。然し忠僕イブラヒムは私に注意をしてしてくれまし
た。恐らく吾々は未だ陸地から大部離れて居るだらう、その陸地へ
は、吾々二人丈けて、人の助を借らないでは行く事は出来まいと。』

吾々は多量に見出した食物と酒とで元氣をつけまして、遂にまた、

die wir in reichlichem Maß vorfanden, und stiegen endlich wieder aufs Verdeck. Aber hier schauderte uns immer die Haut ob dem schrecklichen Anblick der Leichen. Wir beschlossen, uns davon zu befreien und sie über Bord zu werfen. Aber wie schauerlich ward uns zu Mut, als wir fanden, daß sich keiner aus seiner Lage bewegen ließ. Wie festgebannt lagen sie am Boden, und man hätte die Bretter des Verdecks ausheben müssen, um sie zu entfernen, und dazu gebracht es uns an Werkzeugen. Auch der Kapitano ließ sich nicht von seinem Mast losmachen, nicht einmal³ seinen Säbel konnten wir der starren Hand entwenden. Wir brachten den Tag in trauriger Betrachtung unserer Lage zu, und als es Nacht zu werden anfang, erlaubte ich dem alten Ibrahim, sich schlafen zu legen, ich selbst aber wollte auf dem Verdeck wachen, um nach Rettung auszuspähen. Als aber der Mond heraufkam und ich nach den Gestirnen berechnete, daß es wohl die elfte Stunde sei, überfiel mich ein so unwiderstehlicher Schlaf, daß ich unwillkürlich hinter ein Faß, das auf dem Verdeck stand, zurückfiel. Doch war es mehr Betäubung als Schlaf, denn ich hörte deutlich die See an der Seite des Schiffes anschlagen und die Segel im Winde knarren und pfeifen. Auf einmal glaubte ich Stimmen und Männertritte auf dem Verdeck zu hören. Ich wollte mich aufrichten, um danach zu schauen. Aber eine unsichtbare Gewalt hielt meine Glieder gefesselt, nicht einmal die Augen konnte ich aufschlagen. Aber immer deutlicher wurden die Stimmen, es war mir, als wenn ein fröhliches Schiffsvolk auf dem Verdeck sich umhertrieb. Mitunter glaubte ich, die kräftige Stimme eines

甲板の上に上りました。然し此處では絶えず吾々は屍の恐ろしい光景を見て慄ひ通してありました。吾々はこの怖い目から逃れんために、船から屍をば投げ出さうと相談を決めました。ところがどの死屍も其の場所から動かない。その事を見た時の吾々の氣味の悪さつたら有りませんでしたよ！死屍は床板に餘程固く喰附いて居たのでしやう、死屍を取除くには床の板を割がねばならないと思はれる程でした。でそれには吾々は其道具が入用でした。又船長も帆柱から離れないのです、まして吾々にはその刃を固くなつた手からもぎ取る事は出来なかつたのです。吾々は自分達の身の様を悲しく観ながら其日を暮しました。さうして夜になりかゝりますと、私はイブラヒム老爺に寝る事を許しましたが、然し私自身は救助を探し求める爲めに甲板上で見張りをしやうと思ひました。然しながら月が上り、私が星を勘定して大方十一時頃と思ふ時分になりますと、とても抵抗の出来ない眠氣が襲つて來まして、知らず識らず私は甲板の上に立つて居た所の桶の後に仰向けに倒れるのでした。然しそれは眠るといふよりも寧ろ氣が茫とするといふ方でした。何となれば私は船側に波の打つかる音をも、亦帆が風のためにビュービューと鳴るのをもはつきり聞いたからです。急に私は甲板の上に人の聲と人の足音のするのを聞いたやうに思ひました。私は其方を見るがために立上らうと思ひました、然しながら何か目に見へない或る力が私の手足を抑付けておますので、まして目などを私に開ける事が出来なかつたのです。然しその人聲は益々はつきりとして來まして、宛て湯氣な船員が甲板の上を歩き廻つて居る様でした。時には一人の命令をしてゐる人の力強い聲を聞いて居る様に思はれました。又私

Befehlenden zu hören, auch hörte ich Taue und Segel deutlich auf und ab ziehen. Nach und nach aber schwanden mir die Sinne, ich verfiel in einen tieferen Schlaf, in dem ich nur noch ein Geräusch von Waffen zu hören glaubte, und erwachte erst, als die Sonne schon hoch stand und mir aufs Gesicht brannte. Verwundert schaute ich mich um, Sturm, Schiff, die Toten und was ich in der Nacht gehört hatte, kam mir wie ein Traum vor, aber als ich aufblickte, fand ich alles wie gestern. Unbeweglich lagen die Toten, unbeweglich war der Kapitano an den Mastbaum geheftet. Ich lachte über meinen Traum und stand auf, um meinen Alten zu suchen.

Dieser saß ganz nachdenklich in der Kajüte. „O Herr!“ rief er aus, als ich zu ihm hereintrat, „ich wollte lieber im tiefsten Grunde des Meeres liegen, als in diesem verhexten Schiff noch eine Nacht zubringen.“ Ich fragte ihn nach der Ursache seines Kummers, und er antwortete mir: Als ich einige Stunden geschlafen hatte, wachte ich auf und vernahm, wie man über meinem Haupte hin und her lief. Ich dachte zuerst, Ihr wäret es, aber es waren wenigstens zwanzig, die oben umherliefen, auch hörte ich rufen und schreien. Endlich kamen schwere Tritte die Treppe herab. Da wußte ich nichts mehr von mir, nur hie und da kehrte auf einige Augenblicke meine Besinnung zurück, und da sah ich denn denselben Mann, der oben am Mast angenagelt ist, an jenem Tisch dort sitzen, singend und trinkend, aber der, der in einem roten Scharlachkleid nicht weit von ihm am Boden liegt, saß neben ihm und half ihm trinken.“ Also erzählte mir mein alter Diener.

は綱や帆の上げ下しの音をも聞きました。然し漸次私の氣は遠くなつて了つて深い眠に陥りしたが、其眠りの中にもやはり未だ武器の騒がしい音丈は聞えた様に思ひました。そして太陽が高く登り、私の顔を照付ける時にやつと私は起きました。驚いてあたりを見回しましたが、暴風とか、船とか、死人やその外、夜中耳にしたことなどが皆夢の様に私の心に浮んで参りましたが、さて私が眼を見上げますと凡ての物は昨日の通りでありました。死人は動かずに横はり、船長は亦動かずに帆柱に釘付けられてました。私は私の夢を笑ひまして、老僕を探すためにと立上りました。

老僕は全く思に沈んで船室の中に座して居ました。「お、旦那様」私が彼の所へ入つて行きますと彼は申しました——「私は此の寃につかれた船の中で尙ほ一夜を暮すよりも、一その事海のどん底に沈んだ方がまして御座います。」私は彼の心を痛めてる譯を尋ねました。彼は私に答へました「私が二三時間寝つた時分に、目を覺まして、私は自分の頭の上で人々が彼方此方へ走り回るのを聞き取りました。私は初めは貴君であらうと思つたのですけれども、然し私の上の方を走回つてるのは少くも二十人計りだつたし、その上私は呼んだり叫んだりする聲も聞きました。終ひには重い足音が階段を下りて來ましたが、其時私は正氣を失つて了つたのです。只時々一寸の間私の氣がはつきりとする事がありますと、其時に上の帆柱に釘付けにされて居たと同じ人が、其處のその机の側に座つて、歌つたり、飛んだりすると、これはまた船長から遠く離れてゐないところの甲板に、赤い緋の着物を附けて居た男が、船長の側に座つて、お酒の助けをしてゐるのを見ました。」と斯様に私の老僕は私に語りました。

Ihr könnt es mir glauben, meine Freunde, daß mir gar nicht wohl zu Mut war; denn es war keine Täuschung, ich hatte ja auch die Toten gar wohl gehört. In solcher Gesellschaft zu schiffen, war mir greulich. Mein Ibrahim aber versank in tiefes Nachdenken. „Jetzt hab' ich's!“ rief er endlich aus; es fiel ihm nämlich ein Sprüchlein ein, das ihm sein Großvater, ein erfahrener, weitgereister Mann, gelehrt hatte, und das gegen jeden Geister- und Zauberspuk³ helfen konnte; auch behauptete er, jenen unnatürlichen Schlaf, der uns befahl, in der nächsten Nacht verhindern zu können, wenn wir nämlich recht fleißig Sprüche aus dem Koran⁴ beteten. Der Vorschlag des alten Mannes gefiel mir wohl. In banger Erwartung sahen wir die Nacht herankommen. Neben der Kajüte war ein kleines Kämmerchen, dorthin beschlossen wir uns zurückzuziehen. Wir bohrten mehrere Löcher in die Türe, hinlänglich groß, um durch sie die ganze Kajüte zu überschauen; dann verschlossen wir die Türe, so gut es ging, von innen, und Ibrahim schrieb den Namen des Propheten in alle vier Ecken. So erwarteten wir die Schrecken der Nacht. Es mochte⁵ wieder ungefähr elf Uhr sein, als es mich gewaltig zu schläfern anfang. Mein Gefährte riet mir daher, einige Sprüche des Korans zu beten, was mir auch half. Mit einem Male schien es oben lebhaft zu werden, die Taue knarnten, Schritte gingen über das Verdeck und mehrere Stimmen waren deutlich zu unterscheiden. Mehrere Minuten hatten wir so in gespannter Erwartung gesessen, da hörten wir etwas die Treppe der Kajüte herabkommen. Als dies der Alte hörte, fing er an, den Spruch, den ihm sein Großvater gegen Spuk und Zauberei gelehrt hatte, herzusagen:

れ—皆さん、私には餘り好い氣持で無かつたと思つて下されるでしやうね。何故と申すに其れは決して氣の迷ひではなく、私は實際に死人の話すのまでもを聞いたからです。私は斯る仲間の中に居つて航海するのは私には底氣味が悪いのでありました。けれども私の僕イブラヒムは深く考込んで居ました。「やつと思當りました」と遂に彼は叫びました。外でもない彼は、色々の目に遭つて來て廣く旅をしたことの有る彼の祖父さんが、自分に教へた呪文の事と、又其呪文は何んな幽霊や化物に向つてもよく役に立つといふ事を思出したからでした。」で先づ吾々がコーランからの經句をば確かり念を疑めて唱へるならば、吾々を襲つて來る所のあの常ならぬ眠りを、翌曉は防ぐ事が出來ると彼は申立てました。此の老人の申出は私に得心がゆきました。心もとなく待設けてゐる内に吾々は夜の來るのを見ました。船室の側には小さい室がありました。其方へ吾々は引き退かると相談を決めました。吾々は戸に澤山の穴を穿ちまして、其處から^窓閣屋中を見通せるだけの大きさの穴に致しました。其れから出來る丈け確かと内部から戸を閉ぢ、そしてイブラヒムはマホメットの名を戸の四隅に書きました。斯様にして吾々は夜の怖れを待ちました。私がひどく眠くなつた刻限は、又候凡そ十一時頃でありましたらう。私の供人はコーランからの數句を唱へる様に私に勧めました。「それは私の役に立ちました。俄かに上の方では活氣附いて來た様に見へました。網はバタバタと鳴り響き、足音は甲板の上で往復する、そして多くの人聲は明かに區別する事が出來ました。吾々はこの隙に氣を張詰めて待ち構へをして數分間座つて居ました。其時に吾々は何か船室の階段を下りて來るのを聞ききました。老人が是を聞ききました時に、彼は自分の祖父が幽霊や魔術除けに彼に教へた所の呪文をば唱へ始めました。

„Kommt ihr herab aus der Luft,
Steigt ihr aus tiefem Meer,
Schließt ihr in dunkler Gruft,
Stammt ihr vom Feuer her:
Allah¹ ist euer Herr und Meister,
Ihm sind gehorsam alle Geister.“

Ich muß gestehen, ich glaubte gar nicht recht an diesen Spruch, und mir stieg das Haar zu Berg,² als die Türe aufflog. Hereintrat jener große, stattliche Mann, den ich am Mastbaum angenagelt gesehen hatte.) Der Nagel ging ihm auch jetzt mitten durchs Hirn, das Schwert aber hatte er in die Scheide gesteckt, hinter ihm trat noch ein anderer herein, weniger kostbar gekleidet; auch ihn hatte ich oben liegen sehen. Der Kapitano, denn dies war er unverkennbar, hatte ein bleiches Gesicht, einen großen schwarzen Bart, wildrollende Augen, mit denen er sich im ganzen Gemach umsah. Ich konnte ihn ganz deutlich sehen, als er an unserer Türe vorüberging; er aber schien gar nicht auf die Türe zu achten, die uns verbarg. Beide setzten sich an den Tisch, der in der Mitte der Kajüte stand, und sprachen laut und fast schreiend miteinander in einer unbekanntenen Sprache. Sie wurden immer lauter und eifriger, bis endlich der Kapitano mit geballter Faust auf den Tisch hineinschlug, daß das Zimmer dröhnte. Mit wildem Gelächter sprang der andere auf und winkte dem Kapitano, ihm zu folgen. Dieser stand auf, riß seinen Säbel aus der Scheide, und beide verließen das Gemach. Wir atmeten freier, als sie weg waren; aber unsere Angst hatte noch lange kein Ende. Immer lauter und lauter ward es auf dem Verdeck. Man hörte

爾等空より降り來るとも、
爾等深海より浮き上るとも、
爾等暗き墓穴に眠るとも、
爾等火中より生れ出づるとも、
神は爾等の主ぞ君ぞ、
萬靈悉く神に順なり。

私は此の言葉をちつとも信じては居なかつたと自状せればなりません、で戸が開いた時に私の髪は顔立ちました。私の帆柱に釘附けになつてゐるのを見た、あの大きな立派な男の入來!。釘は今も猶ほ彼の額の真中を貫いて居ましたが、劔は鞘に納めて居ました。又彼の後ろには値打の少し落ちる着物を附けた今一人の男が入つて來ました。此の男もやはり上に横はつてゐたのを見ました。船長は——何となれば此男が船長たる事は見そこないが無いかからです——青ざめた顔、大きな黒い鬚、ぎよるぎよるしてゐる眼を持つて居て、その眼で彼は部屋の中を見廻しました。彼の戸の側を通つた時に、私は明かに彼を見る事が出来ました。然し彼は吾々を隠した戸の方には何も氣をとめない様子でした。此二人の男は船室の真中にあつた机の側に座つてわけの解らない言葉で、大聲に然も殆ど叫ぶ様な調子で話合つてゐました。彼等は益々大聲に而も熱して來ました。遂には船長が拳骨を固めて部屋が震出すほど机の上を叩くに至りました。暴くれた大笑をして今一人の男は跳び上り、自分に附いて來る様にと船長に相圖しました。船長は立上つて、鞘から劔を引きぬき、そして二人は其部屋を出ました。彼等が立去りました時に、吾々は前よりも樂に息がつけました。然し吾々の心配は尙ほ暫くはお終ひに成らなかつたのです。甲板上では益々大聲に騒々しくなりました。急いで彼方此方と走る音や叫ぶ聲、笑ひ聲やわめく聲が聞

eilends hin und her laufen und schreien, lachen und heulen. Endlich ging ein wahrhaft höllischer Lärm los, so daß wir glaubten, das Verdeck mit allen Segeln komme zu uns herab, Waffengeklirr und Geschrei — auf einmal aber tiefe Stille. Als wir es nach vielen Stunden wagten, hinaufzugehen, trafen wir alles wie sonst; nicht einer lag anders als früher, alle waren steif wie Holz.

So waren wir mehrere Tage auf dem Schiffe; es ging immer nach Osten, wohinzu nach meiner Berechnung Land liegen mußte, aber wenn es auch bei Tag viele Meilen zurückgelegt hatte, bei Nacht schien es immer wieder zurückzukehren, denn wir befanden uns immer wieder am nämlichen Fleck, wenn die Sonne aufging. Wir konnten uns dies nicht anders erklären, als daß die Toten jede Nacht mit vollem Winde zurücksegelten. Um nun dies zu verhüten, zogen wir, ehe es Nacht wurde, alle Segel ein und wandten dasselbe Mittel an wie bei der Türe in der Kajüte; wir schrieben den Namen des Propheten auf Pergament und auch das Sprüchlein des Großvaters dazu, und banden es um die eingezogenen Segel. Ängstlich warteten wir in unserem Kämmerchen den Erfolg ab. Der Spuk schien diesmal noch ärger zu toben, aber siehe, am andern Morgen waren die Segel noch aufgerollt, wie wir sie verlassen hatten. Wir spannten den Tag über nur so viele Segel auf, als nötig waren, das Schiff sanft fortzutreiben, und so legten wir in fünf Tagen eine gute Strecke zurück.

Endlich am Morgen des sechsten Tages entdeckten wir in geringer Ferne Land, und wir dankten Allah und seinem Propheten für unsere wunderbare Rettung. Diesen Tag und die folgende Nacht

de得ました所の商品をば、大變な儲けをして他の商品と交換した後に、水夫を雇ひ、私の友ムーレーには澤山の御禮を出し、然る後に私の祖國へと出帆致しました。然し私は途中寄道をしました、その間に澤山の島や陸地へ上陸して、私の商品をば市場へ出しました。豫言者様は私の企業にお恵みを垂れて下さいました。九ヶ月の後に、私は死んだ船長が私に残してくれた倍ほどの富を得まして、バルゾーラへ入着致しました。私の仲間共は富と幸福に就て大に驚きまして、私が彼の有名なる旅行家のシンドバードの、所謂金剛石の谷をば見付けたのだとしか信じなかつたのでした。私は彼等の信するが儘に委せました。けれどもそれからと云ふものは、バルゾーラの若い人達はやつと十八歳位の歳ごろになれば、私と同じやうに自分の幸福を作るがために、世界に飛出されなければならない様に成りました。然し私は安樂で平和に暮らして、私は五年毎にメツカへ旅を致しまして、聖地に於ける主(しゆ)に對してそのお恵をば感謝し、又船長や其部下の船員共の爲めには、どうか此等の人々をば極樂淨土に御引取り下さる様にと祈りました。

隊商の旅は翌日も何の障りもなくすすん進行しました。そして人々が露營所で一休み出来ました時に、外客のヒリムは商人の中の最も年若のムーレーに向つて次の様に話を始めました。「貴方は實に吾々の中での最も年少者であるが、また何時も上機嫌でおいでだ。が吾々のために大方何か一つ道化た話とでも云つたものを御存知でしやう。日中の熱氣の後に吾々を元氣付けさせるため、そのお話を御馳走しなさい。」ムーレーは答へました「私も皆さんのお慰みになる事を何か、皆さんにお話ししたいとは思つてゐましたが、然

wortete Muley, „das euch Spaß machen könnte, doch der Jugend ziemt Bescheidenheit in allen Dingen; darum müssen meine älteren Reisegefährten den Vorrang haben.¹ Zaleukos ist immer so ernst und verschlossen, sollte² er uns nicht erzählen, was sein Leben so ernst machte? Vielleicht,³ daß wir seinen Kummer, wenn er solchen hat, lindern können, denn gerne dienen wir dem Bruder, wenn er auch andern Glaubens ist.“

Der Aufgerufene war ein griechischer Kaufmann, ein Mann in mittleren Jahren, schön und kräftig, aber sehr ernst. Ob er gleich ein Ungläubiger (nicht Muselman) war, so liebten ihn doch seine Reisegefährten; denn er hatte ihnen durch sein ganzes Wesen Achtung und Zutrauen eingefloßt.⁴ Er hatte übrigens nur eine Hand, und einige seiner Gefährten vermuteten, daß vielleicht dieser Verlust ihn so ernst stimme.

Zaleukos antwortete auf die zutrauliche Frage Muleys: „Ich bin sehr geehrt⁵ durch euer Zutrauen; Kummer habe ich keinen,⁶ wenigstens keinen, von welchem ihr, auch⁷ mit dem besten Willen, mir helfen könntet. Doch, weil Muley mir meinen Ernst vorzuwerfen scheint, so will ich euch einiges erzählen, was mich rechtfertigen soll, wenn ich ernster bin als andere Leute. Ihr sehet, daß ich meine linke Hand verloren habe. Sie fehlt mir nicht von Geburt an, sondern ich habe sie in den schrecklichsten Tagen meines Lebens eingebüßt.⁸ Ob ich die Schuld davon⁹ trage, ob ich unrecht habe, seit jenen Tagen ernster, als es meine Lage mit sich¹⁰ bringt, zu sein, möget ihr beurteilen, wenn ihr vernommen habt die Geschichte von der abgehauenen Hand.“

欠

欠

切斷されたる手の話

私はコンスタンチノーベルで生まれました。私の父は土耳其朝廷の通譯官でありまして、其の傍ら香りの高い果汁や絹物を扱つて、可なり儲の多い商賣を營んでおました。父は私に立派な教育を施してくれましたが、その内一部分は自分で仕込み、一部分は吾々の僧侶の一人に私の教育を委れました。父は最初のうちは自分の商店を他日私に受繼がさうと決めて居ましたが、私が父の豫期以上に技能の勝れてゐることを表はしたところから、父の友人の勸告に従て私を醫者にしやうと決心しました。といふのは、醫者で普通のよた醫者よりも少しばかり學問をしたとなれば、醫者といふものは、コンスタンチノーベルでは幸運兒となる事が出来るからでした。私の家へは澤山のフランク人が参りましたが、其中の一人は醫術のやうなものを、無料で而も最もよく學ぶ事の出来る所の彼の祖國、ことに巴里市へ私を遊學せしめる様に父に説勤めました。そしてこのフランク人自身は、自分の歸國する時に只で私を連れて行かうとの事でした。若い時分にやはり旅行した事のある私の父は、これに賛成しました。でフランク人が私に云ふ所によれば、三月以内に用意を整へればよいとの話でした。私は外國が見出物來るので氣も轉倒せん計りに喜びまして、一瞬間も吾々が船に乗り込む時を待兼ねておました。さて愈よフランク人はその用務をも終へて、旅立ちの準備を致しました。旅立ちの前夜に父は私を自分の寢室へ伴れて行きました。其處には机の上に美しい着物と武器のあるのが私の眼にとまりました。然し一層私の目を引いた物は、うづ高く積重ねられた金でした。何故なれば私は未だこれ迄、其れ程澤山の金を一度に見た事が

einander gesehen. Mein Vater umarmte mich und sagte: „Siehe, mein Sohn, ich habe dir Kleider zu der Reise besorgt. Jene Waffen sind dein, es sind die nämlichen, die mir dein Großvater umhing, als ich in die Fremde auszog. Ich weiß, du kannst sie führen; gebrauche sie aber nie, als wenn du angegriffen wirst; dann aber schlage auch tüchtig drauf.¹ Mein Vermögen ist nicht groß; siehe, ich habe es in drei Teile geteilt, einer ist dein, einer davon sei mein Unterhalt und Notpfennig, der dritte aber sei mir ein heiliges unantastbares Gut, er diene dir in der Stunde der Not.“ So sprach mein alter Vater, und Tränen hingen ihm im Auge, vielleicht aus Ahnung, denn ich habe ihn nie wieder gesehen.

Die Reise ging gut von statten;² wir waren bald im Lande der Franken angelangt, und sechs Tage-reisen hernach kamen wir in die große Stadt Paris. Hier mietete mir mein fränkischer Freund ein Zimmer und riet mir, mein Geld, das in allem zweitausend Taler betrug,³ vorsichtig anzuwenden. Ich lebte drei Jahre in dieser Stadt und lernte, was ein tüchtiger Arzt wissen muß; ich müßte aber lügen, wenn ich sagte, daß ich gerne dort gewesen sei, denn die Sitten dieses Volkes gefielen mir nicht; auch hatte ich nur wenige gute Freunde dort, diese aber waren edle junge Männer.

Die Sehnsucht nach der Heimat wurde endlich mächtig in mir; in der ganzen Zeit hatte ich nichts von meinem Vater gehört, und ich ergriff daher eine günstige Gelegenheit, nach Hause zu kommen.

Es ging nämlich eine Gesandtschaft aus Frankennach nach der Hohen⁴ Pforte. Ich verdingte⁵ mich als Wundarzt in das Gefolge des Gesandten und

なかつたからです。父は私を抱いて申しました「これ俸、私は御前のため旅の着物の用意をしてやりました。その武器は御前にやります。其れは私が外國へ出る時に御前の祖父様が、私の身に付けて下された品なのだ。私は御前がその劔を持扱ふことの出来るのをよく知つて居る。然しその劔はお前が人から撃掛られた場合の外は、決して其れを使用してはなりません。か撃掛られた時には勇敢に相手を打返へしてやれ。私の財産は澤山はないが、御覽、私は其れを三分して置いた。一部分は御前のもの。一部分は私の暮し向きの使用と準備費とに、他の一部分は私には神聖にして手をつける事の出来ぬ財産だ。是れは無くて叶はぬ場合にお前の役に立たせるのだ。」斯様に私の父は話して、目には涙が流れて居ました。私は再び父に會ふ事が出来なかつたから、多分蟲が知らせたのでしたらう。

旅行は都合よく進行しました。吾々は間もなくフランク人の國へ到着しまして、六日の旅程の後大部會巴里へ参りました。此處で吾友フランク人は私のために一室を借りてくれまして、總計二千マルレル程になる私の金子を用心して使ふ様に忠告してくれました。私は此町で三年間暮しまして、苟も優秀なる醫者が知らればならぬ事を習得しました。然しながら自分は巴里に氣持よく暮したと私が言つたならば、私は嘘を言つた事に成るでせう。何となれば此の國民の風習が私には氣に入らなかつたからです。又私はそこに真い友人をほんの僅かしか持つて居なかつたからです。してこの真い友人と云ふのは上流の青年でありました。

私の故郷をあこがれる心は遂に私の心に力強く成つて來ました。ついぞ全く私は父に就いては何等の便りをも聞いた事がなかつたのです。それで私は故郷へ歸るある好い機會を捕へました。

即ちフランク國から一公使が土耳其政府へ行く事となりました。私は外科醫として公使隨行員の中に雇はれまして、都合よく再び

kam glücklich wieder nach Stambul. Das Haus meines Vaters aber fand ich verschlossen, und die Nachbarn erstauten, als sie mich sahen, und sagten mir, mein Vater sei vor zwei Monaten gestorben. Jener Priester, der mich in meiner Jugend unterrichtet hatte, brachte mir den Schlüssel; allein und verlassen zog ich in das verödete Haus ein. Ich fand nach alles, wie es mein Vater verlassen hatte, nur das Gold, das er mir zu hinterlassen versprach, fehlte. Ich fragte den Priester darüber, und dieser verneigte sich und sprach: „Euer Vater ist als ein heiliger Mann gestorben; denn er hat sein Gold der Kirche vermacht.“ Dies war und blieb mir unbegreiflich; doch was wollte ich machen? Ich hatte keinen Zeugen gegen den Priester und mußte froh sein, daß er nicht auch das Haus und die Waren meines Vaters als Vermächtnis angesehen hatte. Dies war das erste Unglück, das mich traf. Von jetzt an aber kam es Schlag auf Schlag.² Mein Ruf als Arzt wollte sich gar nicht ausbreiten, weil ich mich schämte, den Marktschreier³ zu machen, und überall fehlte mir die Empfehlung meines Vaters, der mich bei den Reichsten und Vornehmsten eingeführt hätte,⁴ die jetzt nicht mehr an den armen Zaleukos dachten. Auch die Waren meines Vaters fanden keinen Abgang, denn die Kunden hatten sich nach seinem Tode verlaufen und neue bekommt man nur langsam. Als ich einst trostlos über meine Lage nachdachte, fiel mir ein, daß ich oft in Franken Männer meines Volkes gesehen hatte, die das Land durchzogen und ihre Waren auf den Märkten der Städte auslegten;

シタムプールへ歸り着きました。然しながら私の父の家に来て見れば戸は閉されてありまして、隣人は私を見た時に驚いて、私の父が三年前に死んだ事を話してくれました。私の若い時に教育をしてくれたあの僧侶は、私に鍵を持って参りました。獨りぼつちに捨てられて、私は荒れ果てた家の中へ入りました。總ての物はまだ父の遺して置いた儘になつて居ましたが、只父が遺して置くと約束した金子のみが見當らなかつたのです。私は此れに就て僧侶に尋ねました所が、僧は點頭いて話しました「貴方のお父さんは神聖な人として死なれました。何となれば貴方のお父さんは金をば教會へ譲つて行かれましたから」。けれども此事は私には始終合點が行かなかつたのです。然し私は如何しやうと思つたでしやうか、私は僧侶に反對する丈けの一つの證據をも持つて居なかつたのです。で私は僧侶が父の家や品物をも遺産と見做さなかつた事を以て満足せねばならなかつたのでした。是れが私の出つかわした最初の不幸でありました。然しそれから以來と云ふものは、打撃は打撃に續いて到來しました。醫者として私の評判は少しも廣がり相にもありませんでした。と云ふのは私は大風呂敷をひろげる事を恥ぢたからであります。さうして(生きてゐたのなら)父が富豪や貴族に私を紹介してくれたらうに、その父の推擧が何處へ尋れるにも無かつたので、今は最早貴族や富豪にして、憐なる此のツアロイコスと思ひやつてくれるものは一人も無かつたのです。亦父の商品は少しも賣行きがありませんでした。と云ふのは父の死後顧客の筋も散つて、又新しい顧客は段々でなければ附ませんからでした。私は心を慰めんすべも無く自分の境遇を考へ込んでゐますと、思ひ當つたのは、フランク國で私の同胞が國中を遍歴して、町々の市場に、自分の持つてゐる商品を陳列して

ich erinnerte mich, daß man ihnen gerne abkaufte, weil sie aus der Fremde kamen, und daß man bei solchem Handel das Hundertfache erwerben könne. Sogleich war auch mein Entschluß gefaßt. Ich verkaufte mein väterliches Haus, gab einen Teil des gelösten Geldes einem bewährten Freunde zum Aufbewahren, von dem übrigen aber kaufte ich, was man in Franken selten hat, als Schals, seidene Zeuge, Salben und Öle, mietete einen Platz auf einem Schiff, und trat so meine zweite Reise nach Frankenland an. Es schien, als ob das Glück, sobald ich die Schlösser der Dardanellen im Rücken hatte, mir wieder günstig geworden wäre. Unsere Fahrt war kurz und glücklich. Ich durchzog die großen und kleinen Städte der Franken und fand überall willige Käufer meiner Waren. Mein Freund in Stambul sandte mir immer wieder frische Vorräte, und ich wurde von Tag zu Tag wohlhabender. Als ich endlich so viel erspart hatte, daß ich glaubte, ein größeres Unternehmen wagen zu können, zog ich mit meinen Waren nach Italien. Etwas muß ich aber noch gestehen, was mir auch nicht wenig Geld einbrachte: ich nahm auch meine Arzneikunst zu Hilfe. Wenn ich in eine Stadt kam, ließ ich durch Zettel verkünden, daß ein griechischer Arzt da sei, der schon viele² geheilt habe; und wahrlich, mein Balsam und meine Arzneien haben wir manch^e Zechine*) eingebracht. So war ich endlich nach der Stadt Florenz in Italien gekommen. Ich nahm mir vor, längere Zeit in dieser Stadt zu bleiben, teils weil sie mir so wohl gefiel, teils auch, weil ich mich von den Strapazen meines Umherziehens erholen wollte. Ich mietete mir ein Gewölbe³ in dem Stadtviertel Santa Croce und nicht weit davon ein paar schöne

*) Eine Zechine ist annähernd 6 Mark unseres Geldes.

のを度々見た事でした。彼等は外國から来たからといふ譯で、フランク人は喜んで買って呉れた事や、斯の様な商賣は百倍も儲けることが出来るものだと云ふことなどを思ひ出しました。其處で忽ち私の決心も出來ました。私は親譲りの家屋を賣却して、賣高の一部分を親友の保護に頼み、残りの御金でフランク人には珍奇な品物即ち肩掛、絹織物、香水や香油などを仕入れまして、船中に席を借りてフランク人の國へと二度目の旅途に上りました。私がダルダネルの諸城を後にしますと、早や幸運が再び私に向つて來たかの様に見えました。私の航海は退屈もせず都合よく行きました。私はフランク人の大市(まち)小市を通りまして、到る所で私の商品を好んで買ふ人に遇ひました。スタンブールの私の友人は絶えず新しい仕入物を送てくれました。で私は日毎に有福となりました。遂に私が一つこれ迄よりは、大仕掛けの事業を遣付ける事が出来ると思ふた程澤山を貯へました時に、私が商品を持つて伊太利へ出かけました。ところで今一つ私に少なからずお金に成つた。ある事を私は白状せねばなりません。といふのは私は商品販賣の外に、又醫藥の術を私の手助とした事であります。私がある都市へ参りますと、引き札を使つて、ギリシヤの醫者が來た。その醫者はにれ迄既に澤山な病人を治したといふ事を廣告しました。で實際私の膏藥と醫藥とは大分の身入りになつたのであります。斯様にして私は遂に伊太利のプロヴェツ市へ参りましたが、此の町は大變私の氣に入りましたのと、今一つには遍歴の疲れを癒さんと思ひましたから、長く此の町に留らうと思ひました。私はサンタ、クローチエ區で一商店を借受け、此處が

Zimmer, die auf einen Altan führten, in einem Wirtshaus. Sogleich ließ ich auch meine Zettel umhertragen, die mich als Arzt und Kaufmann ankündigten. Ich hatte kaum mein Gewölbeeröffnet, so strömten auch die Käufer herzu, und ob ich gleich ein wenig hohe Preise hatte,¹ so verkaufte ich doch mehr als andere, weil ich gefällig und freundlich gegen meine Kunden war. Ich hatte schon vier Tage vergnügt in Florenz verlebt, als ich eines Abends, da ich schon mein Gewölbe schließen und nur die Vorräte in meinen Salbenbüchsen, nach meiner Gewohnheit, noch einmal mustern wollte, in einer kleinen Büchse einen Zettel fand, den ich mich nicht erinnerte, hineingetan zu haben. Ich öffnete den Zettel und fand darin eine Einladung, diese Nacht, Punkt zwölf Uhr, auf der Brücke, die man Ponte vecchio heißt, mich einzufinden.² Ich sann lange darüber nach, wer es wohl sein könnte, der mich dorthin einlud, da ich aber keine Seele³ in Florenz kannte, dachte ich, man werde mich vielleicht heimlich zu irgend einem Kranken führen wollen, was schon öfter geschehen war. Ich beschloß also, hinzugehen, doch hing ich zur Vorsicht den Säbel um, den mir einst mein Vater geschenkt hatte.

Als es stark gegen Mitternacht ging, machte ich mich auf den Weg und kam bald auf den Ponte vecchio. Ich fand die Brücke verlassen und öde, und beschloß zu warten, bis er erscheinen würde, der mich rief. Es war eine kalte Nacht; der Mond schien hell, und ich schaute hinab in die Wellen des Arno, die weithin im Mondlicht schimmerten. Auf den Kirchen der Stadt schlug es jetzt zwölf Uhr, ich richtete mich auf, und vor mir stand ein

raus nicht zu sein, sondern, in einem der Zimmer des Hotels, die ich mir geleast hatte, zu sitzen. Ich hatte schon vier Tage vergnügt in Florenz verlebt, als ich eines Abends, da ich schon mein Gewölbe schließen und nur die Vorräte in meinen Salbenbüchsen, nach meiner Gewohnheit, noch einmal mustern wollte, in einer kleinen Büchse einen Zettel fand, den ich mich nicht erinnerte, hineingetan zu haben. Ich öffnete den Zettel und fand darin eine Einladung, diese Nacht, Punkt zwölf Uhr, auf der Brücke, die man Ponte vecchio heißt, mich einzufinden.² Ich sann lange darüber nach, wer es wohl sein könnte, der mich dorthin einlud, da ich aber keine Seele³ in Florenz kannte, dachte ich, man werde mich vielleicht heimlich zu irgend einem Kranken führen wollen, was schon öfter geschehen war. Ich beschloß also, hinzugehen, doch hing ich zur Vorsicht den Säbel um, den mir einst mein Vater geschenkt hatte.

ら遠くはないところに、ある旅館の展望室に横いてある綺麗な二間
つゞきの部屋を借りました。早速私は自分を醫師兼商人として廣告
した新ピラの方々へ持廻らせました。私が店を開くや直ぐに又もお
客はどしどし涙を打つてやつて参りまして、少々高價に商ひました
けれども、私がお客に愛想が好くつて親切であつた爲め、他の商人よ
りも一層澤山商ひを致しました。私は満足して早くも四日間をフ
ロレンツで過しました處が、其四日目の晩私が最早店を閉ぢ、何時
もの様に膏藥箱の貯蔵高なもう一度調査しやうと思ひました時に、
小さい箱の中に自分の覚えのない一枚の書付が挿入してあるのを見
付けました。私は其の書付を開けて見ますと、中には今夜正十二時
にポンテ・ベツキオといふ橋の上へ来てくれといふ呼出しが書いて
ありました。其處へ私を呼び出したのは一體誰れだらうかと長ら
く考へて見ましたが、然し此のフロレンツ市では誰一人知つてる人
もないのでありますから、今迄も既に度々あつた様に、多分秘密で或
る病人の處へ私を案内するものであらうと思ひました。それ故に私
は行かうと決心しましたが、然し用心のため私は兼て父が私に呉れ
た劔をば佩用しました。

さて充分真夜中になつた刻限に出掛けまして、間もなく私はそ
のポンテ・ベツキオに参りました。橋の上のあたりには人影絶えて
寂としてゐました。私は自分を呼び出した人の現れるのを待つ事に
決めました。其夜は寒い晩で月は皎々と照り輝いて居ました。私
は遙かに向ふの方まで月の光りの閃めいて居たアルノ河の漣を見
下しました。市の會堂は今正に十二時を打ちました。私は立上り

großer Mann, ganz in einen roten Mantel gehüllt, dessen einen Zipfel er vor das Gesicht hielt.

Ich war anfangs etwas erschrocken, weil er so plöblich vor mir stand, faßte¹ mich aber sogleich wieder und sprach: „Wenn Ihr mich habt hierher bestellt, so sagt an, was steht zu Eurem Befehl?“ Der Rotmantel wandte sich um und sagte langsam: „Folge!“ Da ward mir's³ doch etwas unheimlich zu Mut, mit diesem Unbekannten allein zu gehen; ich blieb stehen und sprach: „Nicht also,⁴ lieber Herr, wollet mir vorerst sagen, wohin; auch könnet Ihr mir Euer Gesicht ein wenig zeigen, daß ich sehe, ob Ihr Gutes⁵ mit mir vorhabt. Der Rote aber schien sich nicht darum zu kümmern. „Wenn du nicht willst, Zaleukos, so bleibe!“ antwortete er und ging weiter. Da entbrannte mein Zorn. „Meinet Ihr,“ rief ich aus, „ein Mann wie ich lasse sich von jedem Narren foppen, und ich werde in dieser kalten Nacht umsonst gewartet haben?“ In drei Sprüngen hatte ich ihn erreicht, packte ihn an seinem Mantel und schrie noch lauter, indem ich die andere Hand an den Säbel legte; aber der Mantel blieb mir in der Hand, und der Unbekannte war um die nächste Ecke verschwunden. Mein Zorn legte sich nach und nach, ich hatte doch den Mantel, und dieser sollte mir schon den Schlüssel zu diesem wunderlichen Abenteuer geben. Ich hing ihn um und ging weiter nach Hause. Als ich kaum noch hundert Schritte davon entfernt war, streifte jemand dicht an mir vorüber und flüsterte in fränkischer Sprache: „Nehmet Euch in acht, Graf, heute nacht ist nichts zu machen.“ Ehe ich mich aber umsehen konnte, war dieser Jemand schon vorbei, und ich sah nur noch einen Schatten an den

machte. sursと面前には赤い外套に全身を包んだ大きな人が立つて居ました。此人は外套の裾を以て自分の顔を覆ふて居ました。

私は最初は一寸と驚かされました。何しろその人はこんな工合に不意に私の前に立つたのでした。然し私は直ちに氣を落着かせまして、話かけました「貴方が私を此處へ御呼び出しになりましたなら、貴方の御用向きを仰言つて下さい。」赤外套の人はふり向ひて言葉靜かに申しました「附いて來い。」そこで私は、この見知らぬ男と只二人きりで行くのが薄氣味悪くなりましたので、立止つて言ひました「そう言はないで、ね—貴方、先づ第一に何處へ行くのか話して下さい。それから貴方が私について、何も悪い事をたくらんでぬないか何うかを見るため、貴方のお顔を一寸見せてもよい筈です。」然しながら赤外套の人はそんな言葉に少しも頓着しない様に見えました。「ツアロイコス御前がいやなら止つて居れ」と答へて、すんすん行つて了ひます。それで私は赫と怒り出しました。私は叫びました「貴方は私のやうな人間は、どんな馬鹿にからかはれても黙つてゐると思つてゐるのですか。私は寒い晩に、用も無いのに待つて居る様な事はしませんよ」と三足飛んで、私はその男に追ひ付いて、外套の裾を握へ、片手を劔にかけながら一層大きな聲で叫びました。ところが外套は私の手に残つて、其の見知らぬ男は直ぐ近くの角から消へて了ひました。私の怒りは段々に静まりました。然し私は外套を手を持つて居ました。この外套は確かに此不思議な冒険の謂はれを解き明かす鍵を、私に與へたに違ひない。私はその外套を體に引掛けまして、家へやつて行きました。ところが私が其處から百歩と進まぬ内に、誰れか私の直ぐ側を擦違つて通り過ぎまして、フランク語でさゝやきました「御注意なされ伯爵、今夜は何も仕事が出来ません」と。ところが未だ私が見回らさないうちに、此の或る人は已に過ぎ去つてしまひまして、私は只やつと一つの影が家々にそつて浮いて行くのを

Häusern hinschweben. Daß dieser Zuruf den Mantel und nicht mich anging, sah ich ein, doch gab er mir kein Licht über die Sache. Am andern Morgen überlegte ich, was zu tun sei. Ich war von Anfang gesonnen, den Mantel ausrufen¹ zu lassen, als hätte ich ihn gefunden, doch da konnte der Unbekannte ihn durch einen dritten holen lassen, und ich hätte dann keinen Anschluß über die Sache gehabt. Ich besah, indem ich so nachdachte, den Mantel näher. Er war von schwerem genuesischem² Samt, purpurrot, mit astrchanischem Pelz verbrämt und reich mit Gold gestickt. Der prachtvolle Anblick des Mantels brachte mich auf einen Gedanken, den ich auszuführen beschloß. — Ich trug ihn in mein Gewölbe und legte ihn zum Verkauf aus, setzt aber auf ihn einen so hohen Preis, daß ich gewiß war, keinen Käufer zu finden. Mein Zweck dabei war, jeden, der nach dem Pelz fragen würde, scharf ins Auge zu³ fassen; denn die Gestalt des Unbekannten, die sich mir nach Verlust des Mantels, wenn auch nur flüchtig, doch bestimmt gezeigt, wollte ich aus Tausenden erkennen. Es fanden sich viele Kauflustige zu dem Mantel, dessen außerordentliche Schönheit alle Augen auf sich zog, aber keiner glich entfernt⁴ dem Unbekannten, keiner wollte den hohen Preis von zweihundert Zechinen dafür bezahlen. Auffallend war mir dabei, daß, wenn ich einen oder den andern fragte, ob denn sonst kein solcher Mantel in Florenz sei, alle mit nein antworteten und versicherten, eine so kostbare und geschmackvolle Arbeit nie gesehen zu haben.

Es wollte schon Abend werden, da kam endlich ein junger Mann, der schon oft bei mir gewesen war und auch heute viel auf den Mantel geboten⁵

見たばかりでした。此の呼聲は外套に関係してゐるのであつて、私には関係がないのだといふ事を私は推察しましたが、然し此の呼聲は此の事件に関して、何んの光明をも私に與へなかつたのです。翌日私は何う仕やうかと思案しました。私は始めは、私が外套を拾ひ取つたかの様に世間に言振らさうかと思ひましたが、然しさうすれば彼の未だ見た事のない人は、ある他人の手を借りて外套を取り返すことが出来る。それでは此の事件の譯が少しも分らなく成つて了ひませう。私は斯様に考へながら外套をば詳しく検査しました。外套は丈夫なゲメア産の天鷲絨から出来てあつて、色は緋紫色のアストラカン皮で縁取りになつてあり、又金糸で豊かに刺繡がしてありました。外套の美々しい外觀は私にある考を起させました。で私はその考を實行する決心になりました。——即ち私は外套を私の店へ持ち出して、賣物としてそれを陳べて置きました。然し私はその外套に、確かに一人も買手が附かないと思ふ程の、非常に高い價を附けて置きました。斯うした私の目的は、此の毛皮の外套を尋れる人は、一人一人嚴重に目をつけて查べやうとしたのでありました。何となればほんのチラリとした間であるにはあるけれど、外套を捨て行く後から私にかつきりと現れたあの知らない男の姿をば、澤山の人々の中から探し出してやらうと思つたからです。此外套の只ならぬ美しさは萬人の目を牽き着けて、それを買ひたがつた人は澤山ありましたが、然し一人として少しでも彼の知らない男に似た者はなく、誰れも二百ツエヒーンといふ高い代價をそれに拂ふとする者はなかつたのです。此の際私の不思議に思はれた事は、私が此方の人や彼方の人に向つて、他に斯んな外套がフロレンツにあるかと訊れますと、何れも皆無いと答へて、斯んな價の高い飾りつぶされた製作品は見事がないと断言しました。

折から既に晩になりかかつてた頃に、今迄も度々私の店へ來た事があり、今日も亦外套に對し高い價ぶみをした若者が遂にやつて來

hatte, warf einen Beutel Zechinen auf den Tisch und rief: „Bei Gott! Zaleukos, ich muß deinen Mantel haben, und sollte ich zum Bettler darüber werden.“ Zugleich begann er, seine Goldstücke aufzuzählen. Ich kam in große Not; ich hatte den Mantel nur ausgehängt, um vielleicht die Blicke meines Unbekannten darauf zu ziehen, und jetzt kam ein junger Tor, um den ungeheuren Preis zu zahlen. Doch was blieb mir übrig? Ich gab nach, denn es tat¹ mir auf der andern Seite der Gedanke wohl,² für mein nächtliches Abenteuer so schön entschädigt zu werden. Der Jüngling hing sich den Mantel um und ging; er kehrte aber auf der Schwelle wieder um, indem er ein Papier, das am Mantel befestigt war, losmachte, mir zuwarf und sagte: „Hier, Zaleukos, hängt etwas, das wohl nicht zu dem Mantel gehört.“ Gleichgültig nahm ich den Zettel, aber siehe da, dort stand geschrieben: „Bringe heute nacht um die bewußte Stunde den Mantel auf den Ponte vecchio, vierhundert Zechinen warten deiner.“ Ich stand wie niedergedonnert. So hatte ich also mein Glück selbst verscherzt und meinen Zweck gänzlich verfehlt! Doch ich besann mich nicht lange, raffte die zweihundert Zechinen zusammen, sprang dem, der den Mantel gekauft hatte, nach und sprach: „Nehmt Eure Zechinen wieder, guter Freund, und laßt mir den Mantel, ich kann ihn unmöglich hergeben.“ Dieser hielt die Sache von Anfang für Spaß, als er aber merkte, daß es Ernst war, geriet er in Zorn über meine Forderung, schalt mich einen Narren, und so kam es endlich zu Schlägen⁴. Doch ich war so glücklich, im Handgemenge ihm den Mantel zu entreißen, und wollte schon damit davoneilen, als⁵

て、財布を机の上へ投げ出して言放ちました「えい糞ッ、ツアロイコス、どうしても私は御前の外套を手に入れる! 其の爲めに私は乞食となつても可い!」と直ぐに若者は金子を拂出し始めました。私は大弱りでした。私は只萬一にもあの見知らぬ男の目を此に牽かせんばかりに、外套を店に引掛けて居いたのでした。然るに今馬鹿な若者がやつて来て、とんでもない高い價を拂はうとするのです。然し私は此上何か取るべき手段がありまじやうか、私は言ふなりに成りました。といふのは本當に一方から考へて見れば、彼の夜の危い仕事³が斯う綺麗に填合せをして貰ふのだと考へられたからです。若者は外套を身に附けて立去りましたか、數居の處で再び振りかへりまして、外套に附着してた紙片を剥ぎながら紙を私に投げ出して、言ひました「ツアロイコス、これは恐らく外套に附屬して居る品ぢや無い物が引掛かつてたよ。」無頓着に私は紙片を受取りました處か、おやおや、其れには次の様な事が書いてありました「今夜お承知の時刻にポンテベツキオ橋へ外套を持って来てくれ、四百ツエヒーンが君を待つてる」と。私は神鳴が落ちたやうな思ひでつ立ちました。これで私は自分の幸運其物をだいなしに仕て、私の目的をば全々空しうして了つたのです。然し私は長くは考へてゐませんでした。二百ツエヒーンを搔擾んで、外套を買つて行つた人に追ひつき、さうして言ひました「貴方の御金を今一度に納めて貰ひたいがね、さうして外套を返して下さい。私は其れをどうも御渡しする事は出来ないのよ。」若者は初めはこれを笑談だと思つてましたが、然し彼は此の事が眞面目であると氣附いた時に、私の要求した事を大變に怒つて、私を馬鹿と罵り、遂に私を擲りました。然し私は幸ひにも組打ちして彼から外套を奪取る事が出来ましたので、正にそれを抱えて逃げ去らうとした時に、若者は警官の助を呼びまして、私を裁判所へ引張つて行

der junge Mann die Polizei zu Hilfe rief und mich mit sich vor Gericht zog. Der Richter war sehr erstaunt über die Anklage und sprach meinem Gegner den Mantel zu. Ich aber bot dem Jüngling zwanzig, fünfzig, achtzig, ja hundert Zechinen über seine zweihundert, wenn er mir den Mantel ließe. Was meine Bitten nicht vermochten, bewirkte mein Gold. Er nahm meine guten¹ Zechinen, ich aber zog mit dem Mantel triumphierend ab und mußte mir gefallen lassen, daß man mich in ganz Florenz für einen Wahnsinnigen hielt; Doch die Meinung der Leute war mir gleichgültig, ich wußte es ja besser als sie, daß ich an dem Handel noch gewann.

Mit Ungeduld erwartete ich die Nacht. Um dieselbe Zeit wie gestern ging ich, den Mantel unter dem Arm, auf den Ponte vecchio. Mit dem letzten Glockenschlag kam die Gestalt aus der Nacht heraus auf mich zu. Es war unverkennbar der Mann von gestern. „Hast du den Mantel?“ wurde ich gefragt. „Ja, Herr,“ antwortete ich, „aber er kostete² mich bar hundert Zechinen.“ — „Ich weiß es,“ entgegnete jener. „Schau auf,³ hier sind vierhundert.“ Er trat mit mir an das breite Geländer der Brücke und zählte die Goldstücke hin. Vierhundert waren es; prächtig blitzten sie im Mondschein, ihr Glanz erfreute mein Herz, ach! es ahnete nicht, daß es seine letzte Freude sein werde. Ich steckte mein Geld in die Tasche und wollte mir nun auch den gütigen Unbekannten recht betrachten; aber er hatte eine Larve vor dem Gesicht, aus der mich dunkle Augen furchtbar anblitzten. „Ich danke Euch, Herr, für Eure Güte,“ sprach ich zu ihm, „was verlangt Ihr jetzt von mir? Das sage

schon. Der Richter ist bei diesem Rechtsfall überaus erstaunt, aber die Entscheidung ist für den Mantel. Ich habe dem Jüngling zwanzig, fünfzig, achtzig, ja hundert Zechinen über seine zweihundert, wenn er mir den Mantel ließe. Was meine Bitten nicht vermochten, bewirkte mein Gold. Er nahm meine guten¹ Zechinen, ich aber zog mit dem Mantel triumphierend ab und mußte mir gefallen lassen, daß man mich in ganz Florenz für einen Wahnsinnigen hielt; Doch die Meinung der Leute war mir gleichgültig, ich wußte es ja besser als sie, daß ich an dem Handel noch gewann.

schon. Der Richter ist bei diesem Rechtsfall überaus erstaunt, aber die Entscheidung ist für den Mantel. Ich habe dem Jüngling zwanzig, fünfzig, achtzig, ja hundert Zechinen über seine zweihundert, wenn er mir den Mantel ließe. Was meine Bitten nicht vermochten, bewirkte mein Gold. Er nahm meine guten¹ Zechinen, ich aber zog mit dem Mantel triumphierend ab und mußte mir gefallen lassen, daß man mich in ganz Florenz für einen Wahnsinnigen hielt; Doch die Meinung der Leute war mir gleichgültig, ich wußte es ja besser als sie, daß ich an dem Handel noch gewann.

schon. Der Richter ist bei diesem Rechtsfall überaus erstaunt, aber die Entscheidung ist für den Mantel. Ich habe dem Jüngling zwanzig, fünfzig, achtzig, ja hundert Zechinen über seine zweihundert, wenn er mir den Mantel ließe. Was meine Bitten nicht vermochten, bewirkte mein Gold. Er nahm meine guten¹ Zechinen, ich aber zog mit dem Mantel triumphierend ab und mußte mir gefallen lassen, daß man mich in ganz Florenz für einen Wahnsinnigen hielt; Doch die Meinung der Leute war mir gleichgültig, ich wußte es ja besser als sie, daß ich an dem Handel noch gewann.

schon. Der Richter ist bei diesem Rechtsfall überaus erstaunt, aber die Entscheidung ist für den Mantel. Ich habe dem Jüngling zwanzig, fünfzig, achtzig, ja hundert Zechinen über seine zweihundert, wenn er mir den Mantel ließe. Was meine Bitten nicht vermochten, bewirkte mein Gold. Er nahm meine guten¹ Zechinen, ich aber zog mit dem Mantel triumphierend ab und mußte mir gefallen lassen, daß man mich in ganz Florenz für einen Wahnsinnigen hielt; Doch die Meinung der Leute war mir gleichgültig, ich wußte es ja besser als sie, daß ich an dem Handel noch gewann.

ich Euch aber vorher, daß es nichts Unrechtes sein darf." „Unnötige Sorge," antwortete er, indem er den Mantel um die Schultern legte; „ich bedarf Eurer Hilfe als Arzt, doch nicht für einen Lebenden, sondern für einen Toten."

„Wie kann das sein?" rief ich voll Verwunderung.

„Ich kam mit meiner Schwester aus fernen Landen," erzählte er und winkte mir zugleich ihm zu folgen; „ich wohnte hier mit ihr bei einem Freunde meines Hauses. Meine Schwester starb gestern schnell an einer Krankheit, und die Verwandten wollen sie morgen begraben. Nach einer alten Sitte unserer Familie aber sollen alle in der Gruft der Väter ruhen; viele, die in fremden Landen starben, ruhen dennoch dort einbalsamiert. Meinen Verwandten gönne ich nun ihren Körper, meinem Vater aber muß ich wenigstens den Kopf seiner Tochter bringen, damit er sie noch einmal sehe." Diese Sitte, die Köpfe geliebter Anverwandten abzuschneiden, kam mir zwar etwas schrecklich vor, doch wagte ich nichts dagegen einzuwenden,¹ aus Furcht, den Unbekannten zu beleidigen. Ich sagte ihm daher, daß ich mit dem Einbalsamieren der Toten wohl umgehn² könne, und bat ihn, mich zu der Verstorbenen zu führen. Doch konnte ich mich nicht enthalten, zu fragen, warum denn dies alles so geheimnisvoll und in der Nacht geschehen müsse? Er antwortete mir, daß seine Verwandten, die seine Absicht für grausam hielten, bei Tage ihn abhalten würden; sei aber nur erst einmal der Kopf abgenommen, so können sie wenig mehr darüber sagen; er hätte mir zwar den Kopf bringen können, aber ein natürliches Gefühl halte ihn ab, ihn selbst abzunehmen.

いますか。然しその要求は不正の事で有つてはならないことを前以て貴方に申して置きます。——「無用な心配だ」と彼は答へて外套を肩に掛けまして「私は醫者としての貴方の助けを得たいのだが、然し生きてる人に對してではなく、死人に對してだ。」

「何う云ふ譯でさうなるのです」と私は怪んで言放ちました。

「私は妹と共に遠國から來たのだが、——彼は話出して、同時に彼に附いて來いと目配せをしました——「私は妹と一所に此の町で、私の家の友人の處で住んで居たのです。處が妹は昨日急に病氣で死んで了つたものだから、親類共は明日妹を埋葬し様とする所なのですけれども、昔からの我家の家風に從へば、凡て亡くなつた者は先祖代々の墓に臥かされる筈なので、外國で死んだ者は、今でもやはりバルザム油を塗られて(木乃伊にして)墓に永眠して居る者が多いのです。其れで今私は親類共には妹の體を譲分けてやるが、今一度父に死顔を見せるために、少くとも父の處へその娘の頭は持つて行かうと思ふのです。」最愛の肉身の頭を切るといふ此習慣は、實際私にも一寸怖ろしくなつて來たのです。けれども知らぬ人を侮辱するのを怖れて、敢て何も反對しやうとはしなかつたのです。其れで私は死人を旨く木乃伊にする處置が出来ると彼に言つて、死人の方へ私を案内する様に頼みました。然し私は一體何故に萬事をかく秘密に、而も夜中に執り行はねばならぬのかと尋れない譯には往かなかつたのです。彼は私に答へました。その答によると、彼の企圖が残酷であると思つてゐる親類達が、晝間では彼を引止めるであらう、けれども先づ第一に頭を切つて了へば、もはや親類達もそれについて何とも言はれないであらうから。彼は其頭を私の處へ持つて來る事が出来る筈なのだらうが、然し自然の情として、妹の頭を切取るには手が出しかれるとの事でした。

Wir waren indes bis an ein großes, prachtvolles Haus gekommen. Mein Begleiter zeigte es mir als das Ziel unseres nächtlichen Spaziergangs. Wir gingen an dem Haupttor des Hauses vorbei, traten in eine kleine Pforte, die der Unbekannte sorgfältig hinter sich zumachte, und stiegen nun im Finstern eine enge Wendeltreppe hinan. Sie führte in einen spärlich erleuchteten Gang, aus welchem wir in ein Zimmer gelangten, das eine Lampe, die an der Decke befestigt war, erleuchtete.

In diesem Gemach stand ein Bett, in welchem der Leichnam lag. Der Unbekannte wandte sein Gesicht ab und schien Tränen verbergen zu wollen. Er deutete nach dem Bett, befahl mir, mein Geschäft gut und schnell zu verrichten, und ging wieder zur Türe hinaus.

Ich packte meine Messer, die ich als Arzt immer bei mir führte, aus und näherte mich dem Bett. Nur der Kopf war von der Leiche sichtbar, aber dieser war so schön, daß mich unwillkürlich das innigste Mitleiden ergriff. In langen Flechten hing das dunkle Haar herab, das Gesicht war bleich, die Augen geschlossen. Ich machte zuerst einen Einschnitt in die Haut, nach der Weise der Ärzte, wenn sie ein Glied abschneiden. Sodann nahm ich mein schärfstes Messer und schnitt mit einem Zug die Kehle durch. Aber welcher Schrecken! Die Tote schlug die Augen auf, schloß sie aber gleich wieder, und in einem tiefen Seufzer schien sie jetzt erst ihr Leben auszuhuchen. Zugleich schoß mir ein Strahl heißen Blutes aus der Wunde entgegen. Ich überzeugte mich, daß ich erst die Arme getötet hatte. Denn daß sie tot sei, war kein Zweifel, da es von dieser Wunde keine Rettung gab. Ich stand

彼れ是れする中に、吾々はある大きな宏壯な家の處に参りました。私の同伴者は其家を、吾々の夜中に歩いて來た其目的物であると私に指示しました。吾々は其家の正門の前を通過しまして、この見知らぬ男が丁寧に自分の後に戸締りをした小さな通用門を潜りまして、それから暗黒の中で狭い廻り階段を昇りました。此階段は微かに明りを點された廊下へ通つて居つて、此廊下を貫けまして、ある室へ参りました。此室は天井に確り附けられた一つの洋燈で照らされて居ました。

此部屋の中には一つの寢臺がありまして、その中に死骸が横はつて居ました。見知らない人は顔を側向けて涙を隠さうとしてゐる様でした。彼は其寢臺を指しまして、私の仕事を上手に且手早く仕途げる様に私に言附けて、再び戸口から出て行きました。

私は醫者として常に携へてゐる洋刀を取出して、寢臺に近づきました。頭だけが屍體から見えて居ましたが、其頭は吾れ識らず深き同情に堪へられなかつた程非常に美しくありました。黒髪は長い束となつてぶら下つて居り、顔は青白く、目は閉ぢて居ました。私は醫者が四肢を切斷する時の方法に従ひまして、第一に皮膚を一刀切りました。其次に最も鋭利な洋刀を取出しまして一息で咽喉を切斷致しました。然し驚いたの驚かないのつて！死人は目を開いて直ぐに又閉ぢ、さうして深い溜息をして、やつと今自分の命を吐出して了つた様でした。同時に一道の熱い血は切斷口から私の方へ飛出しました。私は始めて憐れな婦人を殺した事を確かと解りました。何となれば彼の婦人が死んで居るといふ事は、疑なき事でありましたからです。それと云ふのがこんな傷から、とても助かる方法が無いからでした。私は今起つた事に就て、怖ろしく胸を壓附けられるや

einige Minuten in banger Beklommenheit über das, was geschehen war. Hatte der Rotmantel mich betrogen, oder war die Schwester vielleicht nur scheinot gewesen? Das letztere schien mir wahrscheinlicher. Aber ich durfte dem Bruder der Verstorbenen nicht sagen, daß vielleicht ein weniger rascher Schnitt sie erweckt hätte, ohne sie zu töten, darum wollte ich den Kopf vollends ablösen, aber noch einmal stöhnte die Sterbende, streckte sich in schmerzhafter Bewegung aus und starb. Da übermannte mich der Schrecken und ich stürzte schauernd aus dem Gemach. Aber draußen im Gang war es finster; denn die Lampe war verlöscht, keine Spur von meinem Begleiter war zu entdecken, und ich mußte aufs Ungefähr¹ mich im Finstern an der Wand fortbewegen, um an die Wendeltreppe zu gelangen. Ich fand sie endlich und kam halb fallend, halb gleitend hinab. Auch unten war kein Mensch. Die Türe fand ich nur angelehnt, und ich atmete freier, als ich auf der Straße war. Denn in dem Hause war mir ganz unheimlich geworden. Von Schrecken gespornt, rannte ich in meine Wohnung und begrub mich in die Polster meines Lagers, um das Schreckliche zu vergessen, das ich getan hatte. Aber der Schlaf floh mich, und erst der Morgen ermahnte² mich wieder, mich zu fassen. Es war mir wahrscheinlich, daß der Mann, der mich zu dieser verruchten Tat, wie sie mir jetzt erschien, verführt hatte, mich nicht angeben würde. Ich entschloß mich gleich, in mein Gewölbe an mein Geschäft zu gehen und womöglich eine sorglose Miene anzunehmen. Aber ach! ein neuer Umstand, den ich jetzt erst bemerkte, vermehrte noch meinen Kummer. Meine Mütze und mein Gürtel, wie auch meine

うな思ひで數分間立つて居ました。あの赤外套が私を欺いたのか、其れとも怖らく妹はほんの假死に過ぎなかつたのであらうか。私には氣絶の方が眞實らしく見えました。然しながら私はもう少し緩やかに切斷したならば、彼の妹を殺さず氣をつかしたかも知れないなどと、死人の兄に話す譯にも行かなかつたのでした。其れ故に私は其頭を全く切離さうとしました處が、もう一度死人は呻きまして、苦しみ悶えて身動きをして、身體を絞こばらして死にました。此處に至つて愕きが私を打負しました。で私は慄へながら部屋を飛出しました。然しながら戸の外の廊下は黑暗でありました。何となれば洋燈が消へて居ましたからです。私の同伴者の影すらも見當りません。で私は廻り階段の處へ行かんがために、暗黒の中を壁に沿ふて目くら滅法に進んで行かなければなりません。私は遂に廻り階段を見附け出しまして、半ばは落ちんばかりに、半ばは滑りながら段を下りました。やはり下にも誰も人は居なかつたのです。戸は只おつ着けてあるばかりでありました。私は通りへ出ました時に、家の中よりも緩やかに息をつきました。何となればこの家の中では、私は全くうす氣味悪かつたからです。怖さに追立てられて、私は自分の住ひへと走りました。さうして私の爲した事を忘れるがために、私の寢臺の褥の中に身を埋めました。けれども眠氣は私のところから遁げて行つて了つて、漸く朝といふものが再び私を引締めて、心を落ち着かせてくれました。今私の目前に現はれて来たやうな、こうした殘忍なる兇行に私を誘出したあの男が、決して私を訴へやしないといふ事は私に確からしくありました。それで私は私の店に勤めに出かけて、出来る丈け心配なげの風をしてぬやうと直ぐ様決心しました。然しながら悲しや、私が今やつと氣附いた所の新しい事情が、更に私の心配を増したのであります。私の帽子と帶と、おまけに私の洋刀まで無くなつて居るのです。そして私は

Messer fehlten mir, und ich war ungewiß, ob ich sie im Zimmer der Getöteten gelassen oder erst auf meiner Flucht verloren hatte. Leider schien das erste wahrscheinlicher, und man konnte mich also als Mörder entdecken.

Ich öffnete zur gewöhnlichen Zeit mein Gewölbe. Mein Nachbar trat zu mir her, wie er alle Morgen zu tun pflegte, denn er war ein gesprächiger Mann. „Ei, was sagt Ihr zu der schrecklichen Geschichte,“ hub er an, „die heute nacht vorgefallen ist?“ Ich tat, als ob ich nichts wüßte. „Wie, solltet¹ Ihr nicht wissen, von was die ganze Stadt erfüllt ist? Nicht wissen, daß die schönste Blume von Florenz, Bianca, die Tochter des Gouverneurs, in dieser Nacht ermordet wurde? Ach! ich sah sie gestern noch so heiter durch die Straßen fahren mit ihrem Bräutigam, denn heute hätten sie Hochzeit gehabt.“ Jedes Wort des Nachbars war mir ein Stich ins Herz. Und wie oft kehrte meine Marter wieder, denn jeder meiner Kunden erzählte mir die Geschichte, immer einer schrecklicher als der andere, und doch konnte keiner so Schreckliches sagen, als ich selbst gesehen hatte. Um Mittag ungefähr trat ein Mann vom Gericht in mein Gewölbe und bat mich, die Leute zu entfernen. „Signore² Zaleukos,“ sprach er, indem er die Sachen, die ich vermißt, hervorzog, „gehören diese Sachen Euch zu?“ Ich besann mich, ob ich sie nicht gänzlich ableugnen sollte, aber als ich durch die halbgeöffnete Tür meinen Wirt und mehrere Bekannte, die wohl gegen mich zeugen konnten, erblickte, beschloß ich, die Sache nicht noch durch eine Lüge zu verschlimmern, und bekannte mich zu den vorgezeigten Dingen. Der Gerichtsmann bat mich, ihm zu folgen, und führte

其品々を死人の室へ置いて来たか、さもなくば丁度私が逃げて来る時になつて失ふたのか、見當が付きませんでした。悲しい事には死人の室に置いて来た方が當つてぬるらしく思はれました。其れ故人々は私を殺人者と見立てゝも無理では無い筈です。

私は何時もの時刻に商店を開きました。私の隣の人には話好きな人でありましたから、毎朝する様に今日も私の處へ参りました。「ネー今日明け方までに起つた怖ろしい出来事を、貴方はどう思ひなさる？」と彼は話し始めました。私は何も知らない様な風を致しました。「何ですつて！ 全市中で到るところ大評判の事を貴方が知らないつて！ 知事の娘のガイアノカアと云つて、フロレンツきつての花の美人が、夜の内に殺されたのを知らないの！ あゝ、私は昨日まだお嬢様が許嫁の婿君と一所に、非常に快活に大通を跳歩いてゐるのを見たのです。何故つて今日はお二人が婚禮式を挙げなさる筈なつたのですからさ。」隣人の一言一句は私の心に針を刺されるの思ひでした。さうして私の傍問が何遍繰回された事でしょう。何となれば来るお客様毎にその話を仕ましたが、一人よりも又一人と怖ろしく其事件を私に話したからです。けれども誰れも私自身が見た程ひどく怖しい話を話す事は出来なかつたのです。正午頃に一人の男が裁判所から私の許へ來まして、人々を遠ざける様に私に申出でました。「ツアロイコス殿」と彼男は私が無くした品物を取り出しながら云ひました——「此の品物は貴方のですか。」私はその品物を全く非認してはならないかどうかと考へましたが、然し私は半ば開いてある戸から、私に對して怖らくは反對の證明をするかも知れぬ宿の主人や多くの知合ひを見た時に、虚偽の申立をして、此上事件を困難ならしめない様にしようと思ひました。で前に示された品物の自分のものなる事を白状致しました。裁判官は自分に附いて来る様に私に云ひました。そして間もなく私の牢獄となると思ふた所の

mich in ein großes Gebäude, das ich bald für das Gefängnis erkannte. Dort wies er mir, bis auf weiteres,¹ ein Gemach an.

Meine Lage war schrecklich, als ich so in der Einsamkeit darüber nachdachte. Der Gedanke, gemordet zu haben, wenn auch ohne Willen, kehrte immer wieder. Auch konnte ich mir nicht verhehlen, daß der Glanz des Goldes meine Sinne befangen gehalten hatte, sonst hätte ich nicht so blindlings in die Falle gehen können. Zwei Stunden nach meiner Verhaftung wurde ich aus meinem Gemach geführt. Mehrere Treppen ging es hinab, dann kam man in einen großen Saal. Um einen langen, schwarzbehängten Tisch saßen dort zwölf Männer, meistens Greise. An den Seiten des Saales zogen sich Bänke herab,² angefüllt mit den Vornehmsten von Florenz. Auf den Galerien, die in der Höhe angebracht³ waren, standen, dicht gedrängt, die Zuschauer. Als ich vor den schwarzen Tisch getreten war, erhob sich ein Mann mit finsterner, trauriger Miene, es war der Gouverneur. Er sprach zu den Versammelten, daß er als Vater in dieser Sache nicht richten könne, und daß er seine Stelle für diesmal an den ältesten der Senatoren abtrete. Der älteste der Senatoren war ein Greis von wenigstens neunzig Jahren. Er stand gebückt, und seine Schläfe waren mit dünnem weißem Haar umhängt, aber feurig brannten noch seine Augen, und seine Stimme war stark und sicher. Er hub an, mich zu fragen, ob ich den Mord gestehe. Ich bat ihn um Gehör und erzählte unerschrocken und mit vernehmlicher Stimme, was ich getan hatte und was ich wußte. Ich bemerkte, daß der Gouverneur während meiner Erzählung bald blaß, bald rot wurde,

große建物の中へ私を導きました。其處で彼は追つて沙汰のある迄といつて、私に一の部屋を割當てくれました。

私が斯く獨り淋しい身となつて此事件の事を考へて見ますと、私の境遇は怖ろしいものでありました。たとへ自分の意志ではなかつたとはいへ、人殺しをしたといふ考が絶えず戻つて來ました。又金の光が私の精神を囚へたのであつたといふ事も、自分で知らぬといふ譯には行きませんでした。さうで無いならば、かくまで盲目滅法に災難に陥る様な事はなかつたでしやうから。拘留後二時間に於て私は部屋から引出されました。澤山の階段を下りて、其れから大きな廣間へ參りました。其處には長い黒布の懸けてある長い机の周りに十二人の人が腰掛けておました、大概は老人でした。廣間の壁ぎわには椅子が段々に列べてありまして、フロレンツの上流の人が一ぱいに座を占めて居ました。高いところに附いてる廊下には見物人が立つておました。私が黒机の前へ進み出ました時に、鬚ぎ込んだ悲しげな面もちをした人が身を起しました。其人は知事でありました。彼が參列した人々に言ふ事には、自分は此事件に關して裁判する事が出来ない、其れで今圓丈けは自分の役目をば、元老院議員の最年長者に委任するといふのでありました。元老院議員中の最年長者と云ふのは少くとも九十歳の老人でした。彼は曲り腰で立ちまして、そして彼の顛顛(こめかみ)の周りには薄い白髭が生下つて居ましたが、その眼は仲々まだ火の如く輝いて居て、彼の音聲は強く而も確かりしておました。彼は私が殺人を白狀するか何うちやと尋問し始めました。私は自分の申立てを聽いてくれるやうに彼に願ひましく、さてそれから怖れもせず、はつきりした聲で私の爲した事と知つて居る事を話しました。私はこの話の間に、知事が怒り青くなつた

und als ich geschlossen, fuhr er wütend auf: „Wie, Elender!“ rief er mir zu, „so willst du ein Verbrechen, was du aus Habgier begangen, noch einem andern aufbürden?“ Der Senator verwies ihm seine Unterbrechung, da er sich freiwillig seines Rechtes begeben habe, auch sei es gar nicht so erwiesen, daß ich aus Habgier gefrevelt, denn nach seiner eigenen Aussage sei ja der Getöteten nichts gestohlen worden, Ja, er ging noch weiter. Er erklärte dem Gouverneur, daß er über das frühere Leben seiner Tochter Rechenschaft geben müsse. Denn nur so könne man schließen, ob ich die Wahrheit gesagt habe oder nicht. Zugleich hob er für heute das Gericht auf, um sich, wie er sagte, aus den Papieren der Verstorbenen, die ihm der Gouverneur übergeben werde, Rat zu holen.¹ Ich wurde wieder in mein Gefängnis zurückgeführt, wo ich einen traurigen Tag verlebte, immer mit dem heißen Wunsch beschäftigt, daß man doch irgend eine Verbindung zwischen der Toten und dem Rotmantel entdecken möchte. Voll Hoffnung trat ich den andern Tag in den Gerichtssaal. Es lagen mehrere Briefe auf dem Tisch. Der alte Senator fragte mich, ob sie meine Handschrift seien. Ich sah sie an und fand, daß sie von derselben Hand sein mußten wie jene beiden Zettel, die ich erhalten. Ich äußerte dies den Senatoren, aber man schien nicht darauf zu achten, und antwortete, daß ich beides geschrieben haben könne und müsse, denn der Namenszug unter den Briefen sei unverkennbar ein Z., der Anfangsbuchstabe meines Namens. Die Briefe aber enthielten Drohungen an die Verstorbene und Warnungen vor der Hochzeit, die sie zu vollziehen im Begriff² war.

Der Gouverneur schien sonderbare Aufschlüsse³ in

り、或は忽ち赤くなつたりしたのを氣附きました。そして私が話を終りました時に、知事は荒々しく立つて「何ぢと、哀れな奴！」と彼は私に叫びました——「斯様にしてその方は自分の食慾心から犯した犯罪をば、他人に課せやうとするのだな。」元老院議員は知事自ら好んで権利を放棄したのだからして、知事の差出口を責めました。且亦知事自身の言ふ所に従へば、死人は何も盗まれたものがないと云ふのだから、私が慾心から罪を犯したといふ事も未だ證明されてないのでと議員は言ひました。いやその上に尙ほ彼は語を續けて云ひました。彼は知事に向つて、知事が自分の娘の殺される迄の生活に就て陳べればならぬと言渡しました。何とならばさうしてこそ、私が眞實を申述べてあるや否やが判明するからだとの事でした。同時に議員は、知事が自分にこれから手渡しする所の死人の書きものからして、判定の緒を取出すがためと稱して、今の裁判を閉延する事にしました。私は再び監獄へ引き入れられましたが、其處では何卒して取調べが死人と赤外套との間に、何か關係を見出してくれればよいかと、絶えず熱い望を抱いて悲しい日を送りました。望に充ちて翌日私は法廷へ出ました。机上には澤山の手紙がありました。年寄の元老院議員は其れが私の手蹟か何うかと尋ねました。私は其手紙をよく見ました所が、私が前に受取りました所の彼の二つの紙片と、同じ手であるに違ひない事を見出しました。私はこの事を老議員に告げましたが、誰も之には心を留めない様に見えました。さうして此の手紙の下の署名が明かに私の名の首字のZであるから、此の二つの手紙は私が書きもせられるし又書いたに相違ないと議員は答へました。然し此手紙は死人に對する脅迫の意を含み、且娘が正に實行しやうとして居た所の結婚に對する威嚇文でありました。

知事は私の人物に關して變な解釋を下した様でした。何となれば

Hinsicht auf meine Person gegeben zu haben. Denn man behandelte mich an diesem Tage mißtrauischer¹ und strenger. Ich berief mich zu meiner Rechtfertigung auf meine Papiere, die sich in meinem Zimmer finden mußten, aber man sagte mir, man habe nachgesucht und nichts gefunden. So schwand mir am Schlusse dieses Gerichtstages alle Hoffnung, und als ich am dritten Tag wieder in den Saal geführt wurde, las man mir das Urteil vor, daß ich, eines vorsätzlichen Mordes überwiesen,² zum Tode verurteilt sei. Dahin also war es mit mir gekommen. Verlassen von allem, was mir auf Erden noch teuer war, fern von meiner Heimat, sollte ich unschuldig in der Blüte meiner Jahre unter dem Beile sterben!

Ich saß am Abend dieses schrecklichen Tages, der über mein Schicksal entschieden hatte, in meinem einsamen Kerker, meine Hoffnungen waren dahin, meine Gedanken ernsthaft auf den Tod gerichtet, da tat sich die Türe meines Gefängnisses auf, und ein Mann trat herein, der mich lange schweigend betrachtete. „So finde ich dich wieder, Zaleukos?“ sagte er. Ich hatte ihm bei dem matten Schein meiner Lampe nicht erkannt, aber der Klang seiner Stimme erweckte alte Erinnerungen in mir. Es war Valetty, einer jener wenigen Freunde, die ich in der Stadt Paris während meiner Studien kannte. Er sagte, daß er zufällig nach Florenz gekommen sei, wo sein Vater als angesehener Mann wohne, er habe von meiner Geschichte gehört und sei gekommen, um mich noch einmal zu sehen und von mir selbst zu erfahren, wie ich mich so sehr habe verschulden können. Ich erzählte ihm die ganze Geschichte. Er schien darüber sehr verwundert und beschwor mich, ihm, meinem einzigen Freunde, alles

當局者は此の日、私を前より一層疑をかけて嚴重に取調べたからです。私は自分の辨解のために、部屋にある筈の書いた紙片を取寄せん事を控訴しましたけれども、當局者は紙片を探したが何も無かつたと私に言ひました。斯くて裁判の日の終結に私の凡ての希望は消えて了ひました。そして三日目に再び法廷に呼出された時に、判官は判決文を私に向つて朗讀しまして、私を謀殺犯なりとの断罪の下に死刑に處すべきもの也と宣告しました。従て到々私の身はこんな破目に陥つて了つたのでした。まだ此世で私には大事であつた一切の事物から捨てられ、遠く異郷の空で、未だ血氣盛りの身を、何の罪なくて私は斬首の斧の下に露と消えればならなかつたのです。

私は私の運命の決定した此怖ろしい日の晩に、淋しい自分の牢獄の中に座して居ましたが、私の希望は凡て消滅してしまひ、私の思想は眞鍮に死なるものの上に向けられて居たのです。すると其時私の牢屋の戸が開きまして、一人の男が入つて來ました、其男は長い間黙つて私を眺めて居ました。「うむやはり君に會へたか、ツアロイコス君!」と彼は言ひました。私は私の洋燈の薄明りて彼を見別ける事が出来なかつたが、然し彼の聲の響が昔の記憶を思ひ起させました。彼はバレッツチーと云つて、私が巴里市で勉學中に知り合ひとなつた少ししかない友人の中の一人でした。彼は名士と仰がれて彼の父が住居して居るフロレンツへ偶然にも來たといふ事、處が私の事件を聞いたので、もう一度私に會つて、どうしてこんな重罪を私が犯せたか、それを聞かうと思つて來たのだと私に言ひました。私は事件の一部始終を彼に話してやりました。彼は其れに就て頗る怪訝に思つて、私に懇々と言ふ事には、偽りの申立てをして言抜けやうとしないで、萬事萬端私の唯一の友人たる彼に打明けてくれいとの

zu sagen, um nicht mit einer Lüge von hinnen¹ zu gehen. Ich schwor ihm mit dem teuersten Eid, daß ich wahr gesprochen, und daß keine andere Schuld mich drücke, als daß ich, von dem Glanze des Goldes geblendet, das Unwahrscheinliche der Erzählung des Unbekannten nicht erkannt habe. „So hast du Bianca nicht gekannt?“ fragte jener. Ich beteuerte ihm, sie nie gesehen zu haben. Valetty erzählte mir nun, daß ein tiefes Geheimnis auf der Tat liege, daß der Gouverneur meine Verurteilung sehr hastig betrieben habe, und es sei nun ein Gerücht unter die Leute gekommen, daß ich Bianca schon längst gekannt und aus Rache über ihre Heirat mit einem andern sie ermordet habe. Ich bemerkte ihm, daß dies alles ganz auf den Rotmantel passe, daß ich aber seine Teilnahme an der Tat mit nichts beweisen könne. Valetty umarmte mich weinend und versprach mir, alles zu tun, um wenigstens mein Leben zu retten. Ich hatte wenig Hoffnung, doch wußte ich, daß Valetty ein weiser und der Gesetze² kundiger Mann sei, und daß er alles tun werde, mich zu retten. Zwei lange Tage war ich in Ungewißheit, endlich erschien Valetty. „Ich bringe Trost, wenn auch einen schmerzlichen. Du wirst leben und frei sein, aber mit Verlust einer Hand.“ Gerührt dankte ich meinem Freund für mein Leben. Er sagte mir, daß der Gouverneur unerbittlich gewesen sei, die Sache noch einmal untersuchen zu lassen; daß er aber endlich, um nicht ungerecht zu erscheinen, eingewilligt habe,³ wenn man in den Büchern der florentinischen Geschichte einen ähnlichen Fall finde, so solle meine Strafe sich nach der Strafe, die dort⁴ ausgesprochen sei, richten. Er und sein Vater hätten nun Tag und

事でした。私は眞實を話ししたのである、私が金の光に目が眩んで、知らぬ男の實らしくも無い話を識別する事が出来なかつたといふ事以外には、一つも私を苦める罪はないといふ事を、固く誓つて彼に言ひました。「それなればピアンカを知らなかつたのだれ」と彼は尋ねました。私はその婦人を見た事がないのだと彼に断言しました。バレッツチーは知事が私の判決を非常に取急いでやつた事には、何か深い秘密が存在してるのだといふ事、及び私がずつと以前からピアンカを知つて居て、彼の女が他の人と結婚するので、その復讐をするために彼女を殺害したのだといふ評判が、人々の間に行はれるといふ事を私に話しました。私は是等一切の事が赤外套にびつたり當嵌るといふ事と、然し又赤外套が此の行爲に關係があるといふ事を、何うも證明する事が出来ないといふ事を述べて彼に注意しました。バレッツチーは涙ながら私を抱いて、さうして少くとも私の命だけを助けんがために、出来るだけの事を遣つて見ると私に約束しました。私は殆ど望みを持ちませんでした、然し私はバレッツチーは賢明な而も法律に精通してる人であると云ふ事と、私を救ふたのにはあらゆる事をするだらうといふ事を知つて居ました。二日間は何う成るか分らずに日を送りましたが、遂にバレッツチーは現はれました。「兎もまれ苦惱は附纏ふけれども、一つの慰めを持つて来たよ。君は命を助かつて自由の身となれるだらうよ。然し片手を無くしてさ。」私は深く感激して私の命の助かつた事に對して友に禮を云ひました。彼は私に言ひましたには、知事は此事件をもう一度調査をせやうとしても頑として動かなかつた。けれども遂には不公平と見られないたにめ、若しもフロレンツの歴史書中に此の事件と似寄つた事柄があつたならば、君の罰も亦其書に現はれてる刑罪に従つて決められるべきものといふ所で、彼は承諾したとの事でした。でバレッツチーと其父とは日夜古書を讀んで、遂に私のと全く同じ様な事件

Nacht in den alten Büchern gelesen und endlich einen ganz dem meinigen ähnlichen Fall gefunden. Dort laute die Strafe: Es soll ihm die linke Hand abgehauen, seine Güter eingezogen, er selbst auf ewig verbannt werden. So laute¹ jetzt auch meine Strafe, und ich solle mich jetzt bereiten zu der schmerzhaften Stunde, die meiner warte. Ich will euch nicht diese schreckliche Stunde vors Auge führen, wo ich auf offenem Markte meine Hand auf den Block legte, wo mein eigenes Blut in weiten Bogen² mich überströmte!

Valetty nahm mich in sein Haus auf, bis ich genesen war, dann versah er³ mich edelmütig mit Reisegeld; denn alles, was ich mir so mühsam erworben, war eine Beute des Gerichts geworden. Ich reiste von Florenz nach Sizilien und von da mit dem ersten Schiff, das ich fand, nach Konstantinopel. Meine Hoffnung war auf die Summe gerichtet, die ich meinem Freund übergeben hatte, auch bat ich ihn, bei ihm wohnen zu dürfen; aber wie erstaunte ich, als dieser mich fragte, warum ich denn nicht mein Haus beziehe.⁴ Er sagte mir, daß ein fremder Mann in meinem Namen ein Haus in dem Quartier der Griechen gekauft habe, derselbe habe auch den Nachbarn gesagt, daß ich bald selbst kommen werde. Ich ging sogleich mit meinem Freunde dahin und wurde von allen meinen alten Bekannten freudig empfangen. Ein alter Kaufmann gab mir einen Brief, den der Mann, der für mich gekauft hatte, hier gelassen habe.

Ich las: „Zaleukos! Zwei Hände stehen bereit, rastlos zu schaffen, daß du nicht fühlst den Verlust der einen. Das Haus, das du siehest, und alles, was darin ist, ist dein, und alle Jahre wird man dir

を見出したのださうです。其書の刑罰に云ふには、その者の左手を切斷し、其財は之を沒收し、當のその人は永久に國外に放逐さるべしといふのださうでした。今や私の罰も亦同様にされる事となつて、私は私を待設けてゐる所の苦悶の時の至るを、今は覺悟すべしといふ事になつたのださうです。私は人目に見られる市場で、私の手を斷臺上に置いて、私自身の血が遠くまで曲線を畫いて私の體の上に溢れた、其の怖い場合を皆さんの目の前に引出して御話ししやうとは思はないのです。

パレツチーは私を彼の家へ全快するまで引留めて呉れまして、私が全快した時に、彼はけ高い心から私に旅費を調べてくれました。何となれば私が大に苦心慘澹して儲けた金は、残らず皆裁判所の收得に取上げられたからでした。私はフロレンツからジチリアへ、其處から私が見出した最初の船に乗つてコンスタンチノーヘルへ旅路を重ねました。私の望は私が朋友に預けて置いた金子に懸けられてゐまして、亦私は彼の處で住まはしてくれる様に彼に願ひました。然しながら、では何故に私自身の家へ入り込まないかと彼が私に問ふた時に、私は大に驚きました。友の言ふには、ある外國人が私の名義でギリシヤ人の街に一家を買つた、さうして其外人が隣人に向つて、もう直き私自ら歸つて来るだらうといつたとの事でした。私は直ぐに友と其處へ行つてみました。さうして私の舊知己の皆から丁寧な歓迎されました。一人の老商人が一本の手紙をば私にくれました。その手紙をば私のために家を買つてくれた人が此處に残して行つたのでした。

私は讀みました「ツアロイコスよ、君が左手一本を失ふたのを不自由に感じさせない爲めに、二本の手が休みなく働く用意をしてゐるぞ。君の見る家と其中に有る一切の物は君のものだ。さうして君

soviel reichen, daß du zu den Reichen deines Volkes gehören wirst. Mögest du den vergeben, der unglücklicher ist als du!" Ich konnte ahnen, wer es geschrieben, und der Kaufmann sagte mir auf meine Frage, es sei ein Mann gewesen, den er für einen Franken gehalten, er habe einen roten Mantel angehabt. Ich wußte genug, um mir zu gestehen, daß der Unbekannte doch nicht ganz von aller edlen Gesinnung entblößt sein müsse. In meinem neuen Haus fand ich alles aufs beste eingerichtet, auch ein Gewölbe mit Waren, schöner als ich sie je gehabt. Zehn Jahre sind seitdem verstrichen; mehr aus alter Gewohnheit, als weil ich es nötig habe, setze ich meine Handelsreisen fort, doch habe ich jenes Land, wo ich so unglücklich wurde, nie mehr gesehen. Jedes Jahr erhielt ich seitdem tausend Goldstücke; aber wenn es mir auch Freude macht, jenen Unglücklichen edel zu wissen, so kann er mir doch den Kummer meiner Seele nicht abkaufen, denn ewig lebt in mir das grauenvolle Bild der ermordeten Bianca.

Zaleukos, der griechische Kaufmann, hatte seine Geschichte geendigt. Mit großer Teilnahme hatten ihm die übrigen zugehört, besonders der Fremde schien sehr davon ergriffen zu sein; er hatte einigemal tief geseufzt, und Muley schien es sogar, als habe er einmal Tränen in den Augen gehabt. Sie besprachen sich noch lange Zeit über die Geschichte.

„Und haßt Ihr den Unbekannten nicht, der Euch so schnöde um ein so edles Glied Eures Körpers, der selbst Euer Leben in Gefahr brachte?“ fragte der Fremde.

„Wohl gab es in früherer Zeit Stunden,“ ant-

の國民中での富豪の一員となれるだけの、それだけの額を毎年君に呈しやう。どうか君よりも一層不幸な者の罪を許して下さいらん事を。」私は誰が此手紙を書いたか推測する事が出来たのです。そして其商人は私の間に對して答へて云ふ事には、何でもフランク人らしい人間であつて、その人は赤外套を身に附けて居たとの事でした。私はこの見知らぬ男がさすがに高潔な考を、すつかりは失つてゐなかつたに違ひないと充分合點が行きました。私の新しい家の中は萬事が最も好く整頓して居まして、店も商品が備附けてあつて、私が前に持つて居たものより立派でありました。其後十年の歳月が経ちました。必要といふよりも寧ろ昔からの習慣上からして、私は商賣旅行を(斯く)續けて居るのですが、然し私が非常な不運に陥つた所のあの國は、決してもう見ませんのです。其時以來私は毎年澤山の金貨を受取ります。然しながら、あの不幸なる見知らぬ男の心ばせの高潔な事を知る事は、私には喜ばしい事なれど、然し私の精神の悲しみを買取る事は彼にも出来ないのです。何となれば殺されたピアンカの凄じい面影が、何時迄も私の心の中に残つてゐるからであります。

ギリシヤの商人ツアロイコスはその話を終りました。他の人々は非常に心を傾けて彼の話を聽いてゐました。特に外客は之に就て非常に感動した様子でした。彼は二三度深い嘆息を洩しました。そればかりではなくムーレーは一時目に涙を流した様に見えました。人々は尙ほ暫くの間其話に就て話合ひました。

「其れで貴方は其んなに卑劣にも貴方の身體の至つて大切な部分を、いや貴方の生命すら危険に陥らしめた、其知らない男を憎んで居ないのですか」と外人は言ひました。

「勿論以前には、彼の男が此の苦惱をば私の身の上に持來したの

wortete der Grieche, „in denen mein Herz ihn vor Gott angeklagt, daß er dieser Kummer über mich gebracht und mein Leben vergiftet habe, aber ich fand Trost in dem Glauben meiner Väter, und dieser befiehlt mir, meine Feinde zu lieben; auch ist er wohl noch unglücklicher als ich.“

„Ihr seid ein edler Mann!“ rief der Fremde und drückte gerührt dem Griechen die Hand.

Der Anführer der Wache unterbrach sie aber in ihrem Gespräch. Er trat mit besorgter Miene in das Zelt und berichtete, daß man sich nicht der Ruhe überlassen dürfe, denn hier sei die Stelle, wo gewöhnlich die Karawannen angegriffen würden; auch glaubten seine Wachen, in der Entfernung mehrere Reiter zu sehen.

Die Kaufleute waren sehr bestürzt über diese Nachricht; Selim, der Fremde, aber wunderte sich über ihre Bestürzung und meinte, daß sie so gut geschützt wären, daß sie eine Trupp räuberischer Araber nicht zu fürchten brauchten.

„Ja, Herr,“ entgegnete ihm der Anführer der Wache, „wenn es nur solches Gesindel wäre, könnte man sich ohne Sorge zur Ruhe legen, aber seit einiger Zeit zeigt sich der furchtbare Orbasan wieder, und da gilt es, auf seiner Hut zu sein.“

Der Fremde fragte, wer denn dieser Orbasan sei, und Achmet, der alte Kaufmann, antwortete ihm: „Es gehen allerlei Sagen unter dem Volk über diesen wunderbaren Mann, Die einen² halten ihn für ein übermenschliches Wesen, weil er oft mit fünf bis sechs Männern zumal³ einen Kampf besteht, andere halten ihn für einen tapfern Franken, den das Unglück in diese Gegend verschlagen habe; von allem aber ist nur soviel gewiß, daß er ein

だ、私の生命を毒したのだと、私の心があの人を神様に訴へた時もありました。然し私は先祖を信仰する事で慰めを見出しました。そして此信仰は我が敵を受せよと私に命じました。亦實際敵たる彼の人の方が私よりも尙ほ一層不幸であります」とギリシヤ人は答へました。

「貴方はけ高いお方だ」と外人は叫んで、感動の餘りギリシヤ人の手を握りました。

ところが番兵の指揮者は彼等を逃がりました。指揮者は心配相な顔付をして天幕の中へ入つて來まして、我々は安閑としては居られない。何となれば此處は何時も隊商の襲撃を受ける場所であるから。且つ亦我部下の番兵は遠方に澤山の騎士を見たと言つて報告しました。

商人仲間は此報告を得まして大に狼狽しました。ところが珍客セリムは皆の狼狽するので驚いて言ひますには、貴方がたをうまく防禦してあげるから、決して盜賊じみたアラビア人の一隊を恐れるには及ばないとの事でした。

「はい檀那さん、之れがほんの盜人じみた浮浪人ばかりならば、心配もせず安々と臥てもぬられまじやうかな、何しろ少し前からあの恐ろしいオルバーザンが又現はれましたので、その用心をするのが肝心でがす」と番兵の指揮者は彼に應へました。

然らばそのオルバーサンとは何人かと外人は尋ねました。で老商人のアハメットは彼に答へました。「此の不思議な人間に就ては、人民の間に色々噂が行はれてるのぢや。一部の人達はオルバーザンが時折五人六人を一時に相手に戦つて勝つといふので、オルバーザンを人間以上の者と思つてるし、又外の一部の人々は不幸のため此地方へ落ちのびて來た所の、剛的なフランク人ぢやと云ふてる。が彼れこれの噂の中で確かな事は、極惡の強盜や竊盜をする男ぢやとい

verruchter Räuber und Dieb ist."

„Das könnt Ihr aber doch nicht behaupten," entgegnete ihm Lezah, einer der Kaufleute. „Wenn er auch ein Räuber ist, so ist er doch ein edler Mann, und als solcher hat er sich an meinem Bruder bewiesen, wie ich Euch erzählen könnte. Er hat seinen ganzen Stamm zu geordneten Menschen gemacht, und so lange er die Wüste durchstreift, darf kein anderer Stamm es wagen, sich sehen zu lassen. Auch raubt er nicht wie andere, sondern er erhebt nur ein Schutzgeld von den Karawanen, und wer ihm dieses willig bezahlt, der zieht ungefährdet weiter, denn Orbasan ist der Herr der Wüste."

Also sprachen unter sich die Reisenden im Zelte; die Wachen aber, die um den Lagerplatz ausgestellt waren, begann unruhig zu werden. Ein ziemlich bedeutender Haufe bewaffneter Reiter zeigte sich in der Entfernung einer halben Stunde; sie schienen gerade auf das Lager zuzureiten. Einer der Männer von der Wache ging daher in das Zelt, um zu verkünden, daß sie wahrscheinlich angegriffen würden. Die Kaufleute berieten sich untereinander, was zu tun sei, ob man ihnen entgegen gehen oder den Angriff abwarten solle. Achmet und die zwei älteren Kaufleute wollten das letztere, der feurige Muley aber und Zaleukos verlangten das erstere und riefen den Fremden zu ihrem Beistand auf. Dieser zog ruhig ein kleines blaues Tuch mit roten Sternen aus seinem Gürtel hervor, band es an eine Lanze und befahl einem der Sklaven, es auf das Zelt zu stecken; er setze sein Leben zum Pfand,¹ sagte er, die Reiter werden, wenn sie dieses Zeichen sehen, ruhig vorüberziehen. Muley glaubte nicht an den Erfolg, der Sklave aber steckte die Lanze auf das

ふ事ぢや。」

「それは然し貴方が主張するわけに参りませんよ」と商人の一人のレーザーが彼に答へました。「彼はよし強盗と謂つても、さすがに高潔の人間ですぞ。で私が貴方がたにお話しするならば、あの男は高潔な人間だといふ事を私の弟に事實で示してゐますよ。あの男は自分の一族を規律ある人間に造上げたので、あの男が沙漠を遍歴してゐる間は、決して外の盗族どもが現はれやうたつて現れる事を容さないのです。又あの男は他の者共のやうな掠め方はしないので、唯隊商から保護税を徴収するだけです。其れで誰でも心好く是れを支拂つたものは、安全に旅を續けられるのですよ。何となればオルバーサンは沙漠の王様であるからです。」

斯様に旅人らは互に天幕の中で話合つてました。が然し露營所の周りに配置されてた番人は落着かなくなり始めました。武装した騎者のかなり澤山の群集が半時間ほどの遠さに現はれました。騎者共は吾々の野營所を目掛けて進んで来る様でした。其れ故番人の一人は天幕の方へ行きまして、遇つとすると隊商が攻撃されやうといふ事を報告しました。商人共は逆襲をしたものか亦或は騎者の攻撃を待たうかと互に相談しました。アハメツトと一人の老商人とは後の方の説を主張しましたが、血氣にはやるムーレーとそれからツアコイコスとは前の説を望みまして、珍客の外人をも呼ばつて其贊助を求めました。此珍客は帯から赤い星形の染めてある、小さな青布を悠々と出しまして、長槍に是を結びつけ、奴隷の一人に命じて其れを天幕の上に押し立てさせました。「私は一命を賭けて保証する、騎者共は是の章(しるし)を見れば靜に通過するでしやう」と彼は言ひました。ムーレーは其効能を信じませんでした、奴隷は其槍

Zelt. Inzwischen hatten alle, die im Lager waren, zu den Waffen gegriffen und sahen in gespannter Erwartung den Reitern entgegen. Doch diese schienen das Zeichen auf dem Zelte erblickt zu haben, sie bogen plötzlich von ihrer Richtung auf das Lager ab und zogen in einem großen Bogen auf der Seite hin.

Verwundert standen einige Augenblicke die Reisenden und sahen bald auf die Reiter, bald auf den Fremden. Dieser stand ganz gleichgültig, wie wenn nichts vorgefallen wäre, vor dem Zelte und blickte über die Ebene hin. Endlich brach Muley das Stillschweigen: „Wer bist du, mächtiger Fremdling,” rief er aus, „der du die wilden Horden der Wüste durch einen Wink bezähmest?”—„Ihr schlagt meine Kunst höher an,¹ als sie ist,” antwortete Selim Baruch. „Ich habe mich mit diesem Zeichen versehen, als ich der Gefangenschaft entflohe: was es zu bedeuten hat, weiß ich selbst nicht, nur soviel weiß ich, daß, wer mit diesem Zeichen reiset, unter mächtigem Schutze steht.”

Die Kaufleute dankten dem Fremden und nannten ihn ihren Erretter. Wirklich war auch die Anzahl der Reiter so groß gewesen, daß wohl die Karawane nicht lange hätte Widerstand leisten² können.

Mit leichterem³ Herzen begab man sich jetzt zur Ruhe, und als die Sonne zu sinken begann und der Abendwind über die Sandebene hinstrich,⁴ brachen sie auf und zogen weiter.

Am nächsten Tage lagerten sie ungefähr nur noch eine Tagereise von dem Ausgang der Wüste entfernt. Als sich die Reisenden wieder in dem großen Zelt versammelt hatten, nahm Lezah, der Kaufmann, das Wort: „Ich habe euch gestern gesagt, daß der

天幕の上に押立てました。兎角する中に野營所に居つた皆の者は、武器を取り氣を勵まして騎者の來るのを待構へました。ところが騎者共は天幕の上の章を見たらしく、忽ち野營所への方向を曲げまして、大曲りに側面へ道をそれました。

旅人達は暫くの間、驚き怪しみ突つ立つて、忽ち騎者共を眺め、忽ち珍客を眺めたりしました。珍客はまるで何も事無きか様に、全く平氣で天幕の前に立つて砂漠の方を眺めて居ました。で遂にムーレは沈黙を破りました。「御威勢の偉い御客様、一體貴方は何様ですか？ 砂漠の荒くれた群をば、目くばせ一つで追拂つて了ひなさるとは！」と彼は叫びました。—「貴方がたは實際以上に高く私の技量を買ひかぶつてゐられる」とセリム・バルツフは答へました。「私が捕はれの身から逃げた時に、この章を用意に持つて來ました。私は此の章が何ういふ意味のものかは知らないけれど、只此の章を携えて旅行するものは、力強い加護を受けるといふ事だけは知つて居ます。」

商人共は珍客に御禮を述べて、彼等は自分達の教主と名附けました。實際騎者の人数は仲々澤山でありましたから、恐らく隊商は長く抵抗する事は出来なかつたかも知れないのでした。

人々は安心しまして今や休みに行きました。そして太陽が沈みかゝつて、夕風が砂漠の上を吹き通ふ頃に、起き出でて旅行を續けました。

翌日彼等は砂漠の終點から殆んど猶ほ一日の里程ばかりの距離の所に野營しました。旅人共が再び大天幕の中に集りました時に、商人のレーツアーは話の口を切りました。「昨日私は皆さんに、あの怖れられたオルバーサンは高潔な人間だと言ひましたね。御免を蒙つ

gefürchtete Orbasan ein edler Mann sei; erlaubt mir, daß ich es euch heute durch die Erzählung der Schicksale meines Bruders beweise. — Mein Vater war Kadi (= Richter) in Akara. Er hatte drei Kinder. Ich war der älteste, ein Bruder und eine Schwester waren bei weitem jünger als ich. Als ich zwanzig Jahre alt war, rief mich ein Bruder meines Vaters zu sich. Er setzte mich zum Erben seiner Güter ein, mit der Bedingung, daß ich bis zu seinem Tode bei ihm bleibe. Aber er erreichte ein hohes Alter, so daß ich erst vor zwei Jahren in meine Heimat zurückkehrte und nichts davon wußte, welch schreckliches Schicksal indes mein Haus betroffen, und wie gütig Allah es¹ gewendet hatte.”

Die Errettung Fatmes.

Wein Bruder Mustapha und meine Schwester Fatme waren beinahe in gleichem Alter. Jener hatte höchstens zwei Jahre voraus. Sie liebten einander innig und trugen vereint alles bei,² was unserem kränklichen Vater die Last seines Alters erleichtern konnte. An Fatmes sechzehntem Geburtstage veranstaltete der Bruder ein Fest. Er ließ alle ihre Gespielinnen einladen, setzte ihnen in dem Garten des Vaters ausgesuchte Speisen vor, und als es Abend wurde, lud er sie ein, auf einer Barke, die er gemietet und festlich geschmückt hatte, ein wenig hinaus in die See zu fahren. Fatme und ihre Gespielinnen willigten mit Freuden ein; denn der Abend war schön, und die Stadt gewährte besonders abends von dem Meere aus betrachtet einen herrlichen Anblick. Den Mädchen aber gefiel es so gut auf der Barke, daß sie meinen Bruder bewogen, immer weiter in die See hinauszufahren. Mustapha gab

te今日は私の兄弟の運命の話をして、私はその事を皆さん方に證據立てやうと思ふのですが。— 私の父はアカラの裁判官でした。父には三人の子供がありました。私は其の長男で、一人の弟と一人の妹とは私より遙かに歳下だったのでした。私の二十歳になつた時、一人の叔父が私を呼び寄せました。叔父は私を自分の財産の相続者と決めまして、叔父の死ぬ迄私が叔父の處に居ると云ふ條件を附しました。然し叔父は長生きしましたから、私はやつと二年前に故郷へ歸りましたが、其間に私の實家にどんな怖い運命が襲つたのか、そして又神様が如何に慈ぐみ深く幸運にお向け下さつたか、そんな事をちつとも私は知らなかつたのでした。

ファトメーの救助

私の弟のムスタファと妹のファトメーとは殆ど同じ年頃でありました。ムスタファの方がやつと二歳上でした。二人は眞から互に愛し合つてゐまして、吾々の病める父の老後の苦痛を軽くされうる事ならば、何事も凡て一緒にやりました。ファトメーの十六回目の誕生に弟はその祝を催しました。弟は凡ての妹の遊び仲間を招待して、お父さんのお庭に撰り拔きの御馳走を据ゑました。やがて夕暮になりました時に、彼は借入れて奇麗に裝飾をした一艘の傳馬船に乗せ、少し計り海の方へ漕出で見やうと思つて、妹の友達をお招ぎしました。ファトメーとそのお友達は喜んでその招ぎに應じました。と云ふのは夕暮が美しくもあり、又特に夕暮に海上から眺めると、市街は美事な光景を呈するからでありました。ところが少女達は船に乗つてゐるのが大變氣に入つたものですから、弟に勧めて段々に遠く海の方へ漕ぎ出させました。ムスタファは然し嫌々ながらこれに

aber ungern nach, weil sich vor einigen Tagen ein Korsar hatte sehen lassen. Nicht weit von der Stadt zieht sich ein Vorgebirge in das Meer. Dorthin wollten¹ noch die Mädchen, um von da die Sonne in das Meer sinken zu sehen. Als sie um das Vorgebirge herumruderten, sahen sie in geringer Entfernung eine Barke, die mit Bewaffneten besetzt war. Nichts Gutes ahmend, befahl mein Bruder der Ruderern, sein Schiff zu drehen und dem Lande zuzurudern. Wirklich schien sich auch seine Besorgnis zu bestätigen, denn jene Barke kam jener² meines Bruders schnell nach, überholte sie, da sie mehr Ruder hatte, und hielt sich immer zwischen dem Land und unserer Barke. Die Mädchen aber, als sie die Gefahr erkannten, in der sie schwebten,³ sprangen auf und schrien und klagten; umsonst suchte sie Mustapha zu beruhigen, umsonst stellte er ihnen vor, ruhig zu bleiben, weil sie durch ihr Hinundherrennen die Barke in Gefahr brächten, umzuschlagen. Es half nichts, und da sie sich endlich bei Annäherung des andern Bootes alle auf die hintere Seite der Barke stürzten, schlug diese um. Indessen aber hatte man vom Land aus die Bewegungen des fremden Bootes beobachtet, und da man schon seit einiger Zeit Besorgnisse wegen Korsaren hegte, hatte dieses Boot Verdacht erregt, und mehrere Barken stießen vom Lande, um der unfrigen beizustehen. Aber⁴ sie kamen nur⁵ noch zu rechter Zeit, um die Untersinkenden aufzunehmen. In der Verwirrung war das feindliche Boot entwischt, auf den beiden Barken aber, welche die Geretteten aufgenommen hatten, war man ungewiß, ob alle gerettet seien. Man näherte sich gegenseitig, und ach! es fand sich, daß meine Schwester und eine

従つたのでありました。何故と云ふに、數日前から海賊船が出没したからでありました。市街から程遠からぬ所に岬が海中に突出して居りました。少女達は其處から太陽の海中に沈みゆく有様を見やうと思つて、更に此の岬迄行かうと望みました。彼等が岬の周圍を漕ぎ廻はつて居りますと、程遠からぬ處に、武装した人々を乗込ませた一艘の船を認めました。これは決して有難い事ぢやないと感付いたので、私の弟は船を引き回へして陸の方へ漕付ける様に船頭に命じました。實際弟の心配は事實となり相に見えました。と云ふのは海賊船が急速度で弟の船の跡を追つて來まして、漕手の多い所から遂にそれに追ひ付き、そして絶えず船を陸と私達の船との間に置いたからでした。ところが少女達は身に振りかゝる危難を悟りますと、飛び上がったたり、叫んだり、歎いたりしました。ムスタファは彼等を落付かせやうと努めましたか、その甲斐もありませんでした。又靜かにしてる様に言ひ聽かしたけれど、これも徒勞に歸しました。兄が制した譯は、少女達が彼方此方驅け廻はつた爲め、船は將に轉覆し相になるからでした。弟の骨折りもあだになりました。遂に他の船が近寄つて來た時、一同が船の後部に飛退いたので、船は轉覆して了ひました。然し此の時陸からは人々が此の見知らぬ船の行動を看て居りました。そして既に數時間前から、海賊船に對して氣がかりに思つて居つたのでありましたから、此の船に疑を懸け、澤山の船が私達の船を助ける爲めに、陸から全速力で漕出されました。兎も角助け船は溺れやうとする人々を救ひ上げるには、未だしも折の好い時分に參りました。どさくさ紛れに敵の船は逃走して了ひましたが、然し救助された人々を乗せた二艘の船の人達には、全部救助されたかどうか判りませんでした。人々は交互に近づいて見ました。とこ

ihrer Gespielinnen fehlte; zugleich entdeckte man aber einen Fremden in einer der Barken, den niemand kannte. Auf die Drohungen Mustaphas gestand er, daß er zu dem feindlichen Schiff, das zwei Meilen ostwärts vor Anker liege, gehöre, und daß ihm seine Gefährten auf ihrer eiligen Flucht im Stich¹ gelassen hätten, indem er im Begriff gewesen² sei, die Mädchen auffischen zu helfen; auch sagte er aus, daß er gesehen habe, wie man zwei derselben in das Schiff gezogen.

Der Schmerz meines alten Vaters war grenzenlos, aber auch Mustapha war bis zum Tode betrübt; denn nicht nur, daß seine geliebte Schwester verloren war, und daß er sich anklagte, an ihrem Unglück schuld zu sein,³—jene Freundin Fatmes, die ihr Unglück teilte, war von ihren Eltern ihm zur Gattin zugesagt gewesen, und nur unserem Vater hatte er es noch nicht zu gestehen gewagt,⁴ weil ihre Eltern arm und von geringer Abkunft waren. Mein Vater aber war ein strenger Mann. Als sein Schmerz sich ein wenig gelegt hatte, ließ er Mustapha vor sich kommen und sprach zu ihm: „Deine Torheit hat mir den Trost meines Alters und die Freude meiner Augen geraubt. Geh' hin, ich verbanne dich auf ewig von meinem Angesicht, ich fluche dir und deinen Nachkommen, und nur wenn du mir Fatme wiederbringst, soll dein Haupt frei sein von dem Fluche des Vaters.“

Dies hatte mein armer Bruder nicht erwartet; schon vorher hatte er sich entschlossen gehabt, seine Schwester und ihre Freundin aufzusuchen, und wollte sich nur noch den Segen des Vaters dazu erbitten, und jetzt schickte er ihn mit dem Fluch beladen in die Welt. Aber hatte ihn jener Jammer vorher

るが、驚いた事には、私の妹と妹のお友達の一人居ないことが判りました。然し同時に誰れも知らない見馴れぬ一人の男を一方の船の中に発見しました。ムスタファに脅されて、此の男は自分が東方二哩のところ停泊して居る敵の船の者だと云ふ事と、少女達を救ひ上げやうとして居る際に、仲間の者供が通しく逃げたので、自分を置いてけぼりにしたのだと云ふ事を自状しました。そして又海賊共が少女達の中の二人を、船中に引張り込んだ有様を見たこと云ふ事も口外しました。

私の年老いた父の苦痛は端てしが御座いませんでした。然しムスタファとても矢張り死なん計りに悲しみました。と云ふのは可愛い妹を失つた事や、又こんな不幸に遭はしたのも自分の罪だと歎く許りか、妹と不幸を共にした妹の友達は、その両親から弟の妻にと約束されて有つたからでした。然し此の事は私達の父に丈けは未だ弟は打明けませんでした。と云ふのは女の両親と云ふのが貧乏でもあり、又氏素性が卑しい者で有つたからなものでした。ところが私の父はむづかしい氣性の人でありました。自分の苦痛が少しく治まりました時、父はムスタファを前に呼び付けて云ひます事には、「手前の馬鹿が俺の老後の慰めと、俺の眼の楽しみを奪つて了つた。出てうせろ。俺は未來永劫手前を俺の眼のとゞく限りから追出してくれるぞ。俺は手前を、お前の子々孫々までも呪つてやる。唯然し手前がファトメを再び俺の所へ連れ戻つて来れば、手前の首は父の呪から脱れるのだ。」

哀れむべき弟はこんな事にならうとは思ひも掛けませんでした。これより先き既に弟は自分の妹と妹のお友達を捜し出さうと決心しましたので、(呪はれるどころか)父の祝福の辭さへ御願ひしやうと思つてゐましたのに、今や父は彼に呪をかけて世間に突き出したのでありました。然し最初はその悲しみに彼の心も萎れて了ひました。

gebeugt, so stählte jetzt die Fülle des Unglücks, das er nicht verdient hatte,¹ seinen Mut.

Er ging zu dem gefangenen Seeräuber und befragte ihn, wohin die Fahrt seines Schiffes ginge, und erfuhr, daß sie Sklavenhandel trieben und gewöhnlich in Balsora großen Markt hielten.

Als er wieder nach Hause kam, um sich zur Reise anzuschicken, schien sich der Zorn des Vaters ein wenig gelegt zu haben, denn er sandte ihm einen Beutel mit Gold zur Unterstützung auf der Reise. Mustapha aber nahm weinend von den Eltern Zoraidens, so hieß seine geraubte Braut, Abschied, und machte sich auf den Weg nach Balsora.

Mustapha machte die Reise zu Land, weil von unserer kleinen Stadt aus nicht gerade ein Schiff nach Balsora ging. Er mußte daher sehr starke Tagreisen machen, um nicht zu lange nach² den Seeräubern nach Balsora zu kommen. Doch da er ein gutes Roß und kein Gepäck hatte, konnte er hoffen, diese Stadt am Ende des sechsten Tages zu erreichen. Aber am Abend des vierten Tages, als er ganz allein seines Weges ritt, fielen ihm plötzlich drei Männer an. Da er merkte, daß sie gut bewaffnet und stark seien, und daß es mehr auf sein Geld und sein Roß als auf sein Leben abgesehen war, so rief er ihnen zu, daß er sich ihnen ergeben wolle. Sie stiegen von ihren Pferden ab und banden ihm die Füße unter dem Bauch seines Tieres zusammen, ihn selbst aber nahmen sie in die Mitte und trabten, indem einer den Zügel seines Pferdes ergriff, schnell mit ihm davon, ohne jedoch ein Wort zu sprechen.

Mustapha gab sich einer dumpfen Verzweiflung hin;³ der Fluch seines Vaters schien schon jetzt an

が、あられもない不幸の重なりは、却つて今や彼の心を鍛上げました。

彼は捕虜になつた海賊の所へ行つて、船の行き先を尋れ、海賊共は奴隷を商買にして居つて、常はバルゾーラ(地名)に大市を營んでゐると云ふ事を聞き出しました。

彼が旅の用意をせんがため再び歸宅してみると、父の怒は多少和いで來たやうでありました。何故と云ふに父は金貨の入つた財布を、旅に出た時の足しにせよと弟に贈たからであります。ムスタファは然しゾーライテン(掠られた嫁はさう呼ばれました)の両親には泣きの涙で別れを告げ、バルゾーラ指して出發しました。

私共の小さな町からは一艘もバルゾーラ直航の船がありませんので、ムスタファは陸路を探つて旅行しました。それ故海賊共に餘り遅れずにバルゾーラへ行着くが爲めに、随分と無理な旅をしなければなりません。けれ共一頭の良馬があり、又荷物とては一もありませんでしたから、六日目の終りには此の市へ到着する見込みが立てられました。然し四日目の夕暮の事でしたが、彼がたゞ獨り馬を驅て路を進めて行きますと、突然彼は三人の男に襲撃されました。弟は三人の男がしつかり武装してゐて風強な者だといふ事や、又生命よりも金や馬に目を付けてる事に氣付いたので、彼等に身を任せると云つて聲をかけました。彼等は馬から降りて、弟の足をしつかり馬の腹に結び付け、列の中央に弟を狭んで、一人が馬の手綱を握り、一言も物を云はずに、その場から一目散に弟を連れて馬を飛ばしました。

ムスタファは暗い望絶に巻込まれました。父の呪咀は今こそ此の不幸な身に充れさんとするがやうに見えました。凡ての手段は奪

dem Unglücklichen in Erfüllung zu gehen, und wie konnte er hoffen, seine Schwester und Zoraiden zu retten, wenn' er, aller Mittel beraubt,² nur sein ärmliches Leben zu ihrer³ Befreiung aufwenden konnte. Mustapha und seine stummen Begleiter mochten wohl eine Stunde geritten sein, als sie in ein kleines Seitental einbogen. Das Tälchen war von hohen Bäumen eingefast, ein weicher dunkelgrüner Rasen, ein Bach, der schnell durch seine Mitte hinrollte, luden zur Ruhe ein. Wirklich sah er auch fünfzehn bis zwanzig Zelte dort aufgeschlagen; an den Pföcken der Zelte waren Kamele und schöne Pferde angebunden, aus einem der Zelte hervor tönte die lustige Weise einer Zither und zweier schöner Männerstimmen. Meinem Bruder schien es, als ob Leute, die ein so fröhliches Lagerplätzchen sich erwählt hatten, nichts Böses gegen ihn im Sinn haben könnten, und er folgte also ohne Bangigkeit dem Ruf seiner Führer, die, als sie seine Bande gelöst hatten, ihm winkten, abzusteigen. Man führte ihn in ein Zelt, das größer als die übrigen und im Innern hübsch, fast' zierlich aufgeputzt war. Prächtige goldgestickte Polster, gewirkte Fußteppiche, übergoldete Rauchpfannen hätten anderswo Reichtum und Wohlleben verraten, hier schienen sie nur kühner Raub. Auf einem der Polster saß ein alter, kleiner Mann; sein Gesicht war häßlich, seine Haut schwarzbraun und glänzend, und ein widriger Zug von tückischer Schlaueit um Augen und Mund machten seinen Anblick verhaßt. Obgleich sich dieser Mann einiges Ansehen zu geben suchte, so merkte doch Mustapha bald, daß nicht für ihn das Zelt so reich geschmückt sei, und die Unterredung seiner Führer schien seine Bemerkung

はれて、只彼の哀れな命一つ丈けを妹等を救出す爲めに用ひたとて、何うして仲々、妹とゾーライデンを助けるなぞと望めましやうぞ。ムスタファと黙々たる護送者とが大方一時間ほども来たと思ふ頃、一つの小さな側の谷間に曲りました。其谷は藁木に取り圍まれて、柔かい濃い緑の芝生と、その中央を速に流れてゆく小さな小川とは、心を安息に誘ふものゝ様でありました。「事實ムスタファは十五から廿位も天幕が處々に張られてあるのを見ました。天幕の柱の所には駱駝や美しい馬が繋がれてあり、一つの天幕からは立琴の音と二人の男の美しい聲とが面白相に響いて居りました。弟によくな楽しい野宿場を撰んでる人々には、よもや自分に對しても決して悪い詭計(たくらみ)を考へて居まいと思はれたので、何も心配せず指圖する者の命するがまゝに従ひました。指圖者は縛り目を解くと、彼に馬から下りると目くばせをしました。彼は他のよりも一番に大きい且つ内部には小ざつぱりとして、否寧ろ可なりな裝飾を施された天幕へ案内されました。立派に金の縫取をした腰掛布團、織り物の下敷、金張りの香爐等は、(外の所であつたら、金持で豊かに暮してゐるといふ事を窺はせる事になるでせうが、此處ではこれらの品物も只大膽なる掠奪物として見られるばかりでした。)腰掛布團の一つの上のは老寄りの小さい男が腰を卸して居りました。顔形は醜く、皮膚の色は黒みがかつた褐色を呈して光つて居り、眼と口の邊りに深ふ狡猾相な嫌な様子は、彼の容貌を憎々しいものとなりました。此の男が如何に幾分の威嚴を保たうと努めても、ムスタファは此の男の爲めに此の天幕が、這う立派に飾られてあるのではないと云ふ事に直ぐと氣付きました。而かもムスタファは彼の案内者との話し工合で彼の見當の外れてない様に思はれました。「親分は何所に居る」と案内者等は小男に尋ねますと、「親分

zu bestätigen, „Wo ist der Starke?“ fragten sie den Kleinen. „Er ist auf der kleinen Jagd,“ antwortete jener; „aber er hat mir aufgetragen, seine Stelle zu versehen.“ — „Das hat er nicht gescheit gemacht,“ entgegnete einer der Räuber, „denn es muß sich bald entscheiden, ob dieser Hund sterben oder zahlen soll, und das weiß der Starke besser als du.“

Der kleine Mann erhob sich im Gefühl seiner Würde, streckte sich lange aus, um mit der Spitze seiner Hand das Ohr seines Gegners zu erreichen, denn er schien Lust zu haben, sich durch einen Schlag zu rächen,² als er aber sah, daß seine Bemühung fruchtlos sei, fing er an zu schimpfen (und wahrlich! die andern blieben ihm nichts schuldig),³ daß das Zelt von ihrem Streit erdröhnte. Da tat sich auf einmal die Türe des Zeltes auf, und herein trat ein hoher stattlicher Mann, jung und schön wie ein Perserprinz; seine Kleidung und seine Waffen waren, außer einem reichbesetzten Dolch und einem glänzenden Säbel, gering und einfach, aber sein ernstes Auge, sein ganzer Anstand gebot Achtung, ohne Furcht einzufloßen.

„Wer ist's, der es wagt, in meinem Zelte Streit zu beginnen?“ rief er den Erschrockenen zu. Eine Zeitlang herrschte tiefe Stille, endlich erzählte einer von denen, die Mustapha hergebracht hatten, wie es gegangen sei. Da schien sich das Gesicht „des Starken,“⁴ wie sie ihn nannten, vor Zorn zu röten. „Wann hätte ich dich je an meine Stelle gesetzt, Hassan?“ schrie er mit furchtbarer Stimme dem Kleinen zu. Dieser zog sich vor Furcht in sich selbst zusammen, daß er noch viel kleiner aussah als zuvor, und schlich sich der Zelttüre zu. Ein hinlänglicher

ist ein Schritt gegangen.“ — 小男の答へてした — 「然し親分はその代りになつて取締りするやうにつて俺に頼んだのよ。」 — 「そいつは親分まづい事をやつたな」と盗賊の一人が答へて、「何故つて、此畜生を打殺すか、それとも金を出させるのか、即座に決めなくつちやならぬのだが、こんな事は手前より親分の方がよく心得てるからな」と云ひました。

小男は己れの威厳を傷けられた思ひでつ立ち上り、手の先で相手の耳を擲らうとして身を長く伸ばしました。と云ふのは擲つて復讐して見たかつたらしいのでした。然しその骨折りが無駄になつたと見て取つた時、彼は罵り始めて、その爲め天幕が彼等の喧嘩で揺動かされる程でした。實際他の者は彼に對して何も思に着せられる譯はないのでした。すると丁度そこへ不意に天幕の戸が開いて、一人の丈の高い立派な人が這入つて來ました。若くて美しいペルシヤの王子のやうでありました。彼の着物や武器は、澤山の飾りを施した短劔と、輝いてる長劔とを除いては、つまらぬ極くあつさりしたものでありましたが、然し彼の眞摯な目ざしや一切の身ごなしは、怖わがらせずして自ら敬意を表せしめれば止まぬ底のものでした。

「俺の天幕の中で喧嘩事を始めやうつて奴は誰だ」と親分は吃驚して者共に云ひました。暫くの間深い沈黙が續きましたが、遂にムスタファを連れて來た人々の中の一人が、其の一部始終を語りました。すると彼等が親分と呼んでゐる人の顔色は怒りの爲めに紅みを呈して來ました。「俺が何時貴様に俺の代理をせいと云つたか、ハッサン？」と彼は恐ろしい聲をして小男を怒なり付けました。小男は怖ろしさに前よりも猶ほ一層小さく見える程縮み上がり、扉の方

Tritt des Starken machte, daß er in einem großen, sonderbaren Sprung zur Zelttüre hinaus flog.

Als der Kleine verschwunden war, führten die drei Männer Mustapha vor den Herrn des Zelttes, der sich indes auf die Polster gelegt hatte. „Hier bringen wir den, welchen du uns zu fangen befohlen hast.“ Jener blickte den Gefangenen lange an und sprach sodann: „Bassa¹ von Sulieika! Dein eigenes Gewissen wird dir sagen, warum du vor Orbasan stehst.“ Als mein Bruder dies hörte, warf er sich nieder vor jenem und antwortete: „O Herr! Du scheinst im Irrtum zu sein, ich bin ein armer Unglücklicher, aber nicht der Bassa, den du suchst!“ Alle im Zelt waren über diese Rede erstaunt. Der Herr des Zelttes aber sprach: „Es kann dir wenig helfen, dich zu verstellen, denn ich will die Leute vorführen, die dich wohl kennen.“ Er befahl Zuleima vorzuführen. Man brachte ein altes Weib in das Zelt, das auf die Frage, ob sie in meinem Bruder nicht den Bassa von Sulieika erkenne, antwortete: „Jawohl! Und ich schwöre es beim Grab des Propheten, es ist der Bassa und kein anderer.“ — „Siehst du, Erbärmlicher! wie deine List zu Wasser geworden ist?“ begann zürnend der Starke. „Du bist mir zu elend, als daß ich meinen guten Dolch mit deinem Blut besudeln sollte, aber an den Schweif meines Rosses will ich dich binden, morgen wenn die Sonne aufgeht, und durch die Wälder dich jagen, bis sie scheidet² hinter die Hügel von Sulieika!“ Da sank meinem armen Bruder der Mut. „Das ist der Fluch meines harten Vaters, der mich zum schmachvollen Tode treibt,“ rief er weinend, „und auch du bist verloren, süße Schwester, auch du, Zoraide!“ — „Deine Verstellung hilft dir nichts,“

へ俯ひ寄りました。親分の堂々たる歩みの爲めに、小男は大きく奇妙な飛方をして天幕の扉の外に逃げ去りました。

小男が居なくなつた時に、三人の男がムスタファをば天幕の首長の前へ連れてゆきました。首長はその間に座布團の上に腰を卸しておました。「捕へて来いと言付かりました奴を此所に連れて参りました。」首長は捕はれた人を暫らく見詰めて居りましたが、やがて言ふ事には「ズリアイカの總督、何故其方が(吾れ)オルバーザンの面前に立つか、自らの真心に尋ねて見い！」私の弟は此の言葉聞いた時に、彼の前にびれ伏して答へました「オー閣下、貴方はお人違ひをして居られるやうです。私は世にも憐れな不幸の者ですが、然し閣下のお尋ねになる總督では御座いません。」天幕中の人には此の陳述を聞いて驚きました。然し天幕の首長は言ひました「偽はつても偽り了せるものでない、俺は其方をよく存知の者を其方の面前に引出すぞ。」彼はゾーライマを引出す様に命じました。賊共は一人の老婆を天幕の中に連れて來ました。私の弟をズリアイカの總督と認めるか何うかと云ふ問に對して、老婆は答へました「確かに相違御座りませぬ。妾はマホメット様のお墓を指してお誓ひ申します。此人は總督で御座います。決して外の人では御座いません。」——「何うだ、憐れな奴、其方の奸計も水の泡と消えた事か判つたか」と親分は怒つて言ひさしました。「その方は俺の立派な刀を、その方の血で汚すには當られえ餘りけちな奴だ。が然し明日、お天道様がお昇りになつたら、俺の馬の尻尾に俺は其の方を結び付けてやらう。そしてお天道様がズーライカの小山に隠れるまで、森中をその方と共に馳廻してやらう。」これを聞いて私の可哀想な弟は氣を落して了ひました。「これも自分に愧かしい最後を遂げさせるやうに仕向けた、私の酷い父の呪の爲めだ」——と弟は泣叫びました——「そして愛らしの妹よ、お前はこれ迄だ、そしてゾーライ

sprach einer der Räuber, indem er ihm die Hände auf den Rücken band, „mach,¹ daß du aus dem Zelte kommst, denn der Starke beißt sich in die Lippen und blickt nach seinem Dolch. Wenn du noch eine Nacht leben willst, so komm.“

Als die Räuber gerade meinen Bruder aus dem Zelte führen wollten, begegneten sie drei andern, die einen Gefangenen vor sich hertrieben. Sie traten mit ihm ein. „Hier bringen wir den Bassa, wie du uns befohlen hast,“ sprachen sie und führten den Gefangenen vor das Polster des Starken. Als der Gefangene dorthin geführt wurde, hatte mein Bruder Gelegenheit, ihn zu betrachten, und ihm selbst fiel die Ähnlichkeit auf, die dieser Mann mit ihm hatte, nur war er dunkler im Gesicht und hatte einen schwärzern Bart. Der Starke schien sehr erstaunt über die Erscheinung des zweiten Gefangenen: „Wer von euch ist denn der rechte?“ sprach er, indem er bald meinen Bruder, bald den anderen Mann ansah. „Wenn du den Bassa von Sulieika meinst,“ antwortete in stolzen Ton der Gefangene, „der bin ich!“ Der Starke sah ihn lange mit seinem ernstesten, furchtbaren Blicke an, dann winkte er schweigend, den Bassa wegzuführen. Als dies geschehen war, ging er auf meinen Bruder zu, zerschnitt seine Bande mit dem Dolch und winkte ihm, sich zu ihm aufs Polster zu setzen. „Es tut mir leid, Fremdling.“ sagte er, „daß ich dich für jenes Ungehener hielt; schreibe es² aber einer sonderbaren Fügung des Himmels zu, die dich gerade in der Stunde, welche dem Untergang³ jenes Verruchten geweiht war, in die Hände meiner Brüder führte.“ Mein Bruder bat ihn um die einzige Gunst, ihn gleich wieder weiter reisen zu lassen, weil jeder

deu o mo yabari sou da.」「手前が空とぼけてたつて何の役にも立つものか」と弟の手を後手に警しめながら賊の一人は言ふのでした——「天幕から出る、親分が唇を噛んで、刀の方に目を附けておられるからだ。手前が今一晩でも生き永らへてえなら、出るつて事よ。」

盜賊共が將に私の弟を天幕外に連出さうと思つて居る所へ、他の三人の者が一人の捕虜を前に逐ひ立てながら來るのに會ひました。彼等は捕虜と共に天幕に入りました。「捕へて來いとお申附けになりました總督を此所へ連れて參りました」と云つて、捕虜を首長の座布團の前に引出しました。捕虜が其所へ引出された時に、私の弟は其の男を眺める機會を得ました。そして此の男と自分との有する似通つた點が、弟自身に氣が付きしました。只此の男の方が顔色が餘計に黒くつて、黒い髭を生やして居つたばかりでした。親分は第二の捕虜が現はれて來たのに付いて非常に驚いた様でした。で首長は「一體其方達の中何方が本人なのか」と、或は弟を見或は他の男を眺めながら言ひました。「若し貴様がズリアイカの總督の事を云つてゐるのなら、その總督は俺だ」と捕虜は傲然たる調子で答へました。親分は暫く眞鍮な恐ろしい目付で彼を見詰めて居りましたが、やがて此の總督を連れ出せと黙つて目くばせしました。さて總督が連去られて了ふと、親分は私の弟の所へ進寄つて、刀で綱を切り、自分の側へ來て座布團の上へ座れよと目くばせしました。首長は言ひました「見知らぬお方よ、私はお前さんをあの悪黨と思つてゐたので、御氣の毒の事をした。然しまアそれもこれも、あの極悪人を葬らうとした共同時刻に、折も折とて丁度お前さんを私の仲間の手に誘つてくれた、お天道様の特別の御引合せと思つて下され。」私の弟は、早速にも再び旅び出させて下さるといふ、たつた一つのお恩みを御授け

Aufschub ihm verderblich werden könne. Der Starke erkundigte¹ sich nach seinen eiligen Geschäften, und als ihm Mustapha alles erzählt hatte, überredete ihn jener, diese Nacht in seinem Zelt zu bleiben, er und sein Roß würden der Ruhe bedürfen; den folgenden Tag aber wolle er ihm einen Weg zeigen, der ihn in anderthalb Tagen nach Balsora bringe. Mein Bruder schlug ein,² wurde trefflich bewirtet und schlief sanft bis zum Morgen in dem Zelt des Räubers.

Als er aufgewacht war, sah er sich ganz allein im Zelte, vor dem Vorhang des Zeltens aber hörte er mehrere Stimmen zusammen sprechen, die dem Herrn des Zeltens und dem kleinen, schwarzbraunen Mann anzugehören schienen. Er lauschte ein wenig und hörte zu seinem Schrecken, daß der Kleine dringend den andern aufforderte, den Fremden zu töten, weil er, wenn er freigelassen würde, sie alle verraten könnte.

Mustapha merkte gleich, daß der Kleine ihm gram³ sei, weil er die Ursache war, daß er gestern so übel behandelt worden; der Starke schien sich einige Augenblicke zu besinnen. „Nein,“ sprach er, „er ist mein Gastfreund, und das Gastrecht ist mir⁴ heilig, auch sieht er mir nicht aus als ob er uns verraten wollte.“

Als er so gesprochen, schlug er den Vorhang zurück und trat ein „Friede sei mit dir, Mustapha,“ sprach er, „laß uns den Morgentrunk kosten, und rüste dich dann zum Aufbruch.“ Er reichte meinem Bruder einen Becher Sorbett, und als sie getrunken hatten, zäumten sie die Pferde auf, und wahrlich, mit leichterem Herzen, als er gekommen war, schwang sich Mustapha aufs Pferd. Sie hatten

下さいと願ひしました。何故ならば愚圖々々して居ると、自分の身を亡ぼすやうな事になるかも知れないからでありました。首長は彼の急ぎの用とは何かと尋ねましたので、ムスタファが一部始終の事を話しますと、彼も馬も安息が必要だらうから、今夜は自分の天幕に宿つて行け、その代り明日は一日半でバルソーラに行ける道を教へてやらうと説き勧めました。弟は承知しまして、大した欺待を受け、翌朝迄盜賊共の天幕の中で静かに眠りました。

私の弟が眼を覺してみると、天幕の中に全く自分獨りでありました。天幕の前面に垂れた幕の方では、然し大勢の聲で一塊になつてしゃべるのが聞えました。その聲は天幕の首長と、あの小さな黒い褐色の男の聲の様でありました。弟は暫らく立ち聴きしました。そして愕いた事には、「旅客を殺して了へ、若しこれを放免する時には、彼は吾々の總てを裏切りするかも知れぬ」と小男が首長に切りと促してゐるを聞きました。

ムスタファは昨日あの小男が、ひどくやられたもとはと云へば自分にあるので、それを根に持て、小男が自分を悪んで居るのだと直ぐ感付きました。首長は一寸考へてるやうに見えましたが、「いやいや、あの人は私のお客だ、お客は鄭重にすべきだ、それにあの人は俺だちを裏切らうと思つてるやうには見えない」と云ひました。

彼はそう云つてから幕をはれ除けて、這入つて來ました。「貴方の身に平安あれ。さあ朝がけに一杯やりやしやう。やつてから出發の用意をなさい」と云ひました。彼は一杯の酒を弟に差出しました。して二人が飲み終ると、馬に手綱を着け、そして來た時よりも本當に一層氣も輕々となつて、ムスタファは馬にヒラリと飛乗りました。彼等は忽ち天幕を後にして、森の中に導く廣き道を辿りま

bald die Zelte im Rücken und schlugen dann einen breiten Pfad ein, der in den Wald führte. Der Starke erzählte meinem Bruder, daß jener Bassa, den sie auf der Jagd gefangen hätten, ihnen versprochen habe, sie ungefährdet in seinem Gebiete zu dulden; vor einigen Wochen aber habe er einen ihrer tapfersten Männer aufgefangen und nach den schrecklichsten Martern aufhängen lassen. Er habe ihm nun lange auflauern lassen, und heute noch müsse er sterben. Mustapha wagte es nicht, etwas dagegen einzuwenden, denn er war froh, selbst mit heiler² Haut davongekommen zu sein.

Am Ausgang des Waldes hielt der Starke sein Pferd an, beschrieb meinem Bruder den Weg, bot ihm die Hand zum Abschied und sprach: „Mustapha, du bist auf sonderbare Weise der Gastfreund des Räubers Orbasan geworden, ich will dich nicht aufordern, nicht zu verraten, was du gesehen und gehört hast. Du hast ungerechterweise Todesangst ausgestanden,³ und ich bin dir Vergütung schuldig. Nimm diesen Dolch als Andenken, und so⁴ du Hilfe brauchst, so sende ihn mir zu, und ich will eilen, dir beizustehen. Diesen Beutel aber kannst du vielleicht zu deiner Reise brauchen.“ Mein Bruder dankte ihm für seinen Edelmut, er nahm den Dolch, den Beutel aber schlug er aus. Doch Orbasan drückte ihm noch einmal die Hand, ließ den Beutel auf die Erde fallen und sprengte mit Sturmeseile in den Wald. Als Mustapha sah, daß er ihn doch nicht mehr werde einholen können, stieg er ab, um den Beutel aufzuheben, und erschrak über die Größe von seines Gastfreundes Großmut, denn der Beutel enthielt eine Menge Goldes. Er dankte Allah für seine Rettung, empfahl⁵ ihm den edlen Räuber in

した。首長は弟に語るやう「彼等盜賊共が狩り立て、捕へて來た彼の總督は、自分の領土内で私の仲間には何の危害をも加へず、大目に見ると私の仲間¹に約束をした。然るに二三週前に奴は、私の仲間中での大度胸者といはれた奴を捕へて、最も恐ろしい拷問にかけた末絞殺して了つたのだ。首長は總督を長らく附視つてゐたので、今日中にも彼を殺して了ふのだと云ひました。ムスタファは敢てそれに對して何とか抗辯しやうともしませんでした。何となれば自分が無事な體で免れたのが嬉しかったからでありました。」

森の出口まで來ると、首長は馬を止めて私の弟に道を教へ、別れを告げる爲めに手を差出し、そして云ふには「ムスタファさん、お前は不思議な縁で盜賊オルバーザンの客となつた。私はお前が見たり聞いたりしたことを憂切るなどは要求しない。お前は角違ひで死に目の苦しみを嘗めた。私はお前にその償ひをする義務があるのだ。記念として此の刀を納めて下され。若しお前に助けが欲しい時が有つたならば、その刀を私の所へ遣はしなさい。私は大急ぎで救ひに出かけますから。ところで此の財布はお前さんの旅行に役に立つこともあるだらう」と。弟はその氣高い心に對して感服して、刀は受取りましたが、然し財布だけは推戻しました。然しオルバーザンにも一度手を堅く握りしめ、財布をば地上に落して、疾風の如く森の中へと馬を飛ばしました。ムスタファは最早彼に追付くこは出來ぬと思つた時に、馬から降りて財布を拾上げ、そして彼の客を歡持する仕方の鷹揚さに驚きました。何となれば財布には澤山の金貨がは入つて居つたからでありました。彼はアラ-の神に助

seine Gnade und zog dann heiteren Mutes weiter auf seinem Wege nach Balsora.

Lezah schwieg und sah Achmet, den alten Kaufmann, fragend an. „Nein, wenn es so ist,“ sprach dieser, „so verbessere ich gern mein Urteil von Orbasan, denn wahrlich, an deinem Brude hat er schön gehandelt.“

Er hat getan wie ein braver Muselman,“ rief Muley; „aber ich hoffe, du hast deine Geschichte damit nicht geschlossen, denn wie mich bedünkt,¹ sind wir alle begierig, weiter zu hören, wie es² deinem Bruder erging, und ob er Fatme, deine Schwester, und die schöne Zoraide befreit hat.“

„Wenn ich euch nicht damit langweile, erzähle ich gerne weiter,“ entgegnete Lezah, „denn die Geschichte meines Bruders ist allerdings abenteuerlich und wundervoll.“

Am Mittag des siebenten Tages nach seiner Abreise zog Mustapha in die Tore von Balsora ein. Sobald er in einer Karawanserei abgestiegen war, fragte er, wenn der Sklavenmarkt, der alljährlich hier gehalten werde, anfangen. Aber er erhielt die Schreckensantwort, daß er zwei Tage zu spät komme. Man bedauerte seine Verspätung und erzählte ihm, daß er viel verloren habe, denn noch an dem letzten Tage des Marktes seinen zwei Sklavinnen angekommen, von so hoher Schönheit, daß sie die Augen aller Käufer auf sich gezogen hätten. Man habe sich ordentlich um sie gerissen und geschlagen,³ und sie seien freilich auch zu einem so hohen Preis verkauft worden, daß ihm nur ihr jetziger Herr nicht habe scheuen können. Er erkundigte sich⁴ näher

かつた事の感謝をなし、又氣高い盜賊に祝福を與へ賜へと祈りをして、それから元氣よく更にバルソーラを指して出發しました。

レーツアーは黙つて物聞きたげに老商人アッハメットを眺めました。すると老商人は「否、そう云ふ事なら私は喜んでオルバーザンに付いての私の判断を改めませう。何故と云ふのに彼は、貴方の御兄弟に對して本當に立派な事を仕たからです」と云ひました。

「彼は殊勝な回教徒の様に振舞つた」——ムーローは云ひました——「然しそれだけで貴方の御話をいよいよ終ひにならない様に望みます。と云ふのは私の観る所では、あなたの弟さんの何う成たか、又お妹御のファトメさんと、美しいゾーライアさんは救はれましたかどうか、一同の者が熱心に聞き度がつて居らるゝ様ですから。」

そこでレーツアーは「若し先きを話しても御退屈にならないのなら、喜んで先きの御話をしませう。といふ譯は弟の身の上げなしは、全く冒險づくめで不思議な事計りなのですから」と答へました。

出發後七日目の正午にムスタファはバルソーラの門を入りました。彼は一軒の隊商宿の中で馬から下りると、早速に毎年茲に開かれる奴隷市場は何時始まるかと尋ねました。然し彼は二日遅れて到着したと云ふ答を得て愕きました。人は彼が遅れて来たのを氣の毒に思ひ、云ふ事には、彼は大きな儲損れをした。何故ならば市場の最後の日の終らぬ内に、凡ての買手の眼を一身に集めた素敵な美しい二人の女奴隷が到着したからで、人々は吾れ勝ちに二人を手に入れやうと非常な張合ひをしたが、二人は實に又、獨り現在の主人丈けが尻込みしなかつたところの素晴らしい高値で賣られて了つたとの事でした。私は詳細に此の二人の様子を尋ねてみますと、正に

nach diesen beiden, und es blieb ihm kein Zweifel, daß es die Unglücklichen seien, die er suchte. Auch erfuhr er, daß der Mann, der sie beide gekauft habe, vierzig Stunden von Balsora wohne und Thiuli-Kos heiße, ein vornehmer, reicher, aber schon ältlicher Mann, der früher Kapudan-Bassa¹ des Großherrn gewesen, jetzt aber sich mit seinen gesammelten Reichtümern zur Ruhe gesetzt² habe.

Mustapha wollte von Anfang sich gleich wieder zu Pferd setzen, um dem Thiuli-Kos, der kaum einen Tag Vorsprung haben konnte, nachzueilen. Als er aber bedachte, daß er als einzelner Mann dem mächtigen Reisenden doch nichts anhaben, noch weniger seine Beute ihm abjagen konnte, sann er auf einen andern Plan und hatte ihn auch bald gefunden. Die Verwechslung mit dem Bassa von Sulieika, die ihm beinahe so gefährlich geworden wäre, brachte ihn auf den Gedanken, unter diesem Namen in das Haus des Thiuli-Kos zu gehen und so einen Versuch zur Rettung der beiden unglücklichen Mädchen zu wagen. Er mietete daher einige Diener und Pferde, wobei ihm Orbasans Geld trefflich zu statten kam,³ schaffte sich und seinen Dienern prächtige Kleider an und machte sich auf den Weg nach dem Schlosse Thiulis. Nach fünf Tagen war er in die Nähe dieses Schlosses gekommen. Es lag in einer schönen Ebene und war rings von hohen Mauern umschlossen, die nur ganz wenig von den Gebäuden überragt wurden. Als Mustapha dort angekommen war, farbte er Haar und Bart schwarz, sein Gesicht aber bestrich er mit dem Saft einer Pflanze, die ihm eine bräunliche Farbe gab, ganz wie sie jener Bassa gehabt hatte. Er schickte hierauf einen seiner Diener in das Schloß und ließ, im

seiner eigenen Person die beiden Unglücklichen zu retten, einen Brief an den Bassa von Sulieika zu schreiben, in dem er ihm die beiden Mädchen anbot. Der Bassa, der diesen Brief erhielt, war sehr erfreut, und ließ sofort einen Boten an Mustapha schicken, um ihm zu sagen, daß er die beiden Mädchen annehmen würde, wenn er sie ihm in drei Tagen bringen könnte. Mustapha, der diesen Brief erhielt, war sehr erfreut, und ließ sofort einen Boten an den Bassa von Sulieika schicken, um ihm zu sagen, daß er die beiden Mädchen annehmen würde, wenn er sie ihm in drei Tagen bringen könnte. Mustapha, der diesen Brief erhielt, war sehr erfreut, und ließ sofort einen Boten an den Bassa von Sulieika schicken, um ihm zu sagen, daß er die beiden Mädchen annehmen würde, wenn er sie ihm in drei Tagen bringen könnte.

Mustapha war zunächst nicht glücklich, sondern sehr unglücklich. Er hatte sich vorgenommen, die beiden Mädchen zu retten, und nun sollte er sie in drei Tagen bringen. Er dachte nach, und endlich fiel ihm ein Plan ein. Er ließ sofort einen Boten an den Bassa von Sulieika schicken, um ihm zu sagen, daß er die beiden Mädchen annehmen würde, wenn er sie ihm in drei Tagen bringen könnte. Mustapha, der diesen Brief erhielt, war sehr erfreut, und ließ sofort einen Boten an den Bassa von Sulieika schicken, um ihm zu sagen, daß er die beiden Mädchen annehmen würde, wenn er sie ihm in drei Tagen bringen könnte. Mustapha, der diesen Brief erhielt, war sehr erfreut, und ließ sofort einen Boten an den Bassa von Sulieika schicken, um ihm zu sagen, daß er die beiden Mädchen annehmen würde, wenn er sie ihm in drei Tagen bringen könnte.

Namen des Bassa von Sulieika, um ein Nachtlager bitten. Der Diener kam bald wieder und mit ihm vier schön gekleidete Sklaven, die Mustaphas Pferd am Zügel nahmen und in den Schloßhof führten. Dort halfen sie ihm selbst vom Pferd, und vier andere geleiteten ihn eine breite Marmortreppe hinauf zum Thiuli.

Dieser, ein alter lustiger Geselle, empfing meinen Bruder ehrerbietig und ließ ihm das Beste, was sein Koch zubereiten konnte, aussetzen. Nach Tisch brachte Mustapha das Gespräch nach und nach auf die neuen Sklavinnen, und Thiuli rühmte ihre Schönheit und beklagte nur, daß sie immer so traurig seien, doch er glaubte, dieses würde sich bald geben. Mein Bruder war sehr vergnügt über diesen Empfang und legte sich mit den schönsten Hoffnungen zur Ruhe nieder.

Er mochte¹ ungefähr eine Stunde geschlafen, da weckte ihn der Schein einer Lampe, der blendend auf seine Auge fiel. Als er sich aufrichtete, glaubte er noch zu träumen, denn vor ihm stand jener kleine, schwarzbraune Kerl aus Orbasans Zelt, eine Lampe in der Hand, sein breites Maul zu einem widrigen Lächeln verzogen. Mustapha zwickte sich in den Arm, zupfte sich an der Nase, um sich zu überzeugen, ob er denn wache, aber die Erscheinung blieb wie zuvor. „Was willst du an meinem Bette?“ rief Mustapha, als er sich von seinem Erstaunen erholt hatte. „Bemühet Euch doch nicht so, Herr!“ sprach der Kleine; „habe wohl erraten, weswegen Ihr hierher kommt. Auch war mir Euer wertiges Gesicht noch erinnerlich, doch wahrlich, wenn ich nicht den Bassa mit eigener Hand hätte erhängen helfen, so hättet Ihr mich vielleicht getäuscht. Jetzt

四人の立派に着飾た奴隷がやつ来ました。奴隷は此ムスタファの馬の手綱を取り、城の廣場へと案内しました。其處で奴隷たちはムスタファを馬から助下してやりますと、他の四人の奴隷が廣い大理石の階段を昇つてチュリーの所へ導きました。]

この年を取つた陽氣なチュリーは丁重に私の弟を迎へ、料理番の腕かぎりの御馳走を弟に出しました。食事の後で、ムスタファは話柄を段々に新來の女奴隷の方に近づけて行きました。するとチュリーは女奴隷の美しい事を賞讃へましたが、唯彼等がいつも非常に悲しかつてゐるのをこぼしてゐました。が然しこれも間もなく納まる事だらうと彼は信じてゐました。私の弟は大變此のもてなしに満足し、頗る上々吉の望を抱いて寢に就きました。

彼が殆んど一時間も寢たかと思ふ頃、眩ゆく彼の眼を射るランプの光に眼を覺ました。彼は起き上がった時に、未だ夢を見てゐるのだと信じてました。何故ならば彼の前にはオルバーザンの天幕に居つたあの小さな黒鷲色の奴が、手にはラレブを持ち、大きな口をゆがめて、憎らしい嘲笑を浮べて立つてゐるのですもの。ムスタファは一體眼覺めてゐるのかどうか確かめやうと思つて、腕を捻つて見たり、鼻を摘んで見たりしました。然しその現象は以前と變りはありませんでした。「私の床の側でどうしやうと云ふのだ」と、ムスタファは驚きから氣が落ちついて來た時叫びました。「まあそんなに貴方心配しなされるな。私は何の爲めに貴方が此所へ來たかよく察して居る。又貴方の御尊顔をば私は未だ覺えて居ます。然し實のところ、若し私があの總督を自分の手に掛けて絞殺する手助けをしなかつたら、貴方は私を偽むき了せたかも知れやせん。だが今私は一つ御

aber bin ich da, um eine Frage zu machen.”

„Vor allem sage, wie du hierher kommst,” entgegnete ihm Mustapha voll Wut, daß er verraten war. „Das will ich Euch sagen,” antwortete jener; „ich konnte mich mit dem Starken nicht länger vertragen, deswegen floh ich; aber du, Mustapha, warst eigentlich die Ursache unseres Streites, und dafür mußt du mir deine Schwester zur Frau geben, und ich will Euch zur Flucht behilflich sein; gibst du sie nicht, so gehe ich zu meinem neuen Herrn und erzähle ihm etwas von dem neuen Bassa.”

Mustapha war vor Schrecken und Wut außer sich: jetzt, wo er sich am sicheren Ziel seiner Wünsche glaubte, sollte dieser Elende kommen und sie vereiteln; es war nur ein Mittel, das seinen Plan retten konnte, er mußte das kleine Ungetüm töten; mit einem Sprung fuhr er daher aus dem Bett auf den Kleinen zu, doch dieser, der etwas solches geahnt haben mochte, ließ die Lampe fallen, daß sie verlöschte, und entsprang im Dunkeln, indem er mörderisch um Hilfe schrie.

Jetzt war guter Rat teuer;¹ die Mädchen mußte er für den Augenblick aufgeben und nur auf die eigene Rettung denken; daher ging er an das Fenster, um zu sehen, ob er nicht entspringen könnte. Es war eine ziemliche Tiefe bis zum Boden, und auf der andern Seite stand eine hohe Mauer, die zu übersteigen war. Sinnend stand er an dem Fenster, da hörte er viele Stimmen sich seinem Zimmer nähern; schon waren sie an der Türe, da faßte er verzweiflungsvoll seine Dolch und seine Kleider und schwang sich zum Fenster hinaus. Der Fall war hart, aber er fühlte, daß er kein Glied gebrochen hatte; darum sprang er auf und lief der Mauer zu,

聞き申し度いことがあつて此處へ参りやしたのです。」

「何は免もかくどうして手前は此所へ来たのか」と、ムスタファは裏を掻かれたので鬱と怒て彼に問い返しました。すると小男は答へました「それをお聞かせ申しませう。私は親分とは最うとても仲好してゐる事は出来やせんので、逃げて来たのでさあ。然しムスタファさん、貴方が元もと吾々の喧嘩の本なのだ。だからその代り貴方は貴方の御妹御を、私の妻に呉んなさらにやなられえ。そうすれば私は貴方をお助けして逃がして上げませう。若し嫌と云ふなら、私は新しい檀那の所へ行つて、新奇な總督の事について少し許り告げ口するが」と云ひました。

ムスタファは驚きと怒りの爲めに狂氣の如くなりました。彼の願ひは確かに目的を達することが出来ると信じてた今に、此の災難が来て、其の願ひをほごにせればならぬのだ。彼の計畫を救ふ唯一の手段は是非とも此の小さな悪漢を殺すのにあるのでした。それ故弟は一と躍りに床から跳ね起きて此の小男に飛びかかりました。然しこんな事があらうと感付いてた此男は、ランプを落して火を消して了ひ、人殺しだ助けて呉れと呼び乍ら暗の中に逃げ失せました。

さあ好い考が浮ばない、差當り弟は少女だちを見捨て、只自分丈けを救出す工夫を考へねばなりません。そこで弟は飛出せるかどうかを見る爲めに窓の側にゆきました。地面までは可成の深さであり、又一方の側には高塀がありまして、これを越さねばなりません。思案に暮れて窓の所になつて居りますと、大勢の聲が自分の部屋に近づいて来るのが聞えました。最早彼は戸の所に來ましたから、彼は絶望の餘り刀と着物を握つて、窓から身を躍らせました。飛び降るのは困難でありましたが、彼は少しも手足を挫くやうな事のないのを感じましたので、彼は飛び上つて、邸を取り圍

die den Hof umschloß; stieg zum Erstaunen seiner Verfolger, hinauf und befand sich bald im Freien.¹ Er floh, bis er an einen kleinen Wald kam, wo er sich erschöpft niederwarf. Hier überlegte er, was zu tun sei. Seine Pferde und seine Diener hatte er müssen im Stich lassen, aber sein Geld, das er in dem Gürtel trug, hatte er gerettet.

Sein erfinderischer Kopf zeigte ihm bald einen andern Weg zur Rettung. Er ging in dem Wald weiter, bis er an ein Dorf kam, wo er um geringen Preis ein Pferd kaufte, das ihn in kurzem in eine Stadt trug. Dort forschte er nach einem Arzt, und man riet ihm einen alten, erfahrenen Mann. Diesen bewog er durch einige Goldstücke, daß er ihm eine Arznei mitteilte, die einen todähnlichen Schlaf herbeiführte, der durch ein andres Mittel² augenblicklich wieder gehoben werden könnte. Als er im Besitz dieses Mittels war, kaufte er sich einen langen falschen Bart, einen schwarzen Talar und allerlei Büchsen und Kolben, so daß er füglich einen reisenden Arzt vorstellen konnte, lud seine Sachen auf einen Esel und reiste in das Schloß des Thiuli-Kos zurück. Er durfte gewiß sein, diesmal nicht erkannt zu werden, denn der Bart entstellte ihn so, daß er sich selbst kaum mehr kannte. Bei Thiuli angekommen, ließ er sich als den Arzt Chakamankabudibaba anmelden, und, wie er es gedacht hatte, geschah es; der prachtvolle Namen empfahl ihm bei dem alten Narren ungemein, so daß er ihn gleich zur Tafel einlud. Chakamankabudibaba erschien vor Thiuli, nun als sie kaum eine Stunde besprochen hatten, beschloß der Alte, alle seine Sklavinnen der Kur des weisen Arztes zu unterwerfen. Dieser konnte seine Freude kaum verbergen, daß er jetzt

nderen Hofeの方へと駆出しました。これを攀ち上たので、追手を驚かし忽ちにして廣場へ出ました。彼は小さな森迄逃げましたが、此所で疲切つて倒れて了ひました。此所で彼は何うせればならぬか考へました。馬とお供とは見棄てればなりませんでしたが、金は帯にくるんで置いたので取留めました。

彼の思付きの好い頭は直ぐに他の救助の道を考へ付きました。彼は更に森林中を進みまして或る村に出抜けました。此所で彼は僅かの金子で一頭の馬を求め、馬は忽ちにして彼を或る町へ運びました。其所でお醫者を探しました。すると人は一人の年老へた經驗のある人を教へて呉れました。此の醫者は數個の金貨の力で動かして、或る覺睡劑を持つて來させました。此睡りは今一つの藥の力で忽ち取除けられるのでした。彼は此藥が手に入りました時に、全く旅の醫者に扮装し得る様に、長い汚い髻と、黒色の高裾の着物と、種々の篋や俵を買ひ求めまして、此等の道具を驢馬の脊に積んで、チッリー・コス³の城中へ廻り戻りました。彼は此度こそ見あらはされまいと信じて差支ない程でした。何となればその髻は自分自身にすら、最早殆ど分らない位に化けておましたから。チッリーの所に着きますと、彼はヒヤカマンカブチババと云ふ醫者として刺を通じました所が、彼の思はく通りに行きました。此の豪儀な名前は老年の鈍物の所で唯ならず持つ、主人公は早速に彼をテーブルの所へ招待しました。ヒヤカマンカブチババはチッリーの前へ現はれました。そして凡そ一時間も會談したかせぬ内に、チッリーは女の奴隷嬢らに此の物知りの醫者の治療を享けさせる事に決しました。弟は今や愛する妹に再會することが出来ると云ふ喜を包み兼ねつゝ、胸を

seine geliebte Schwester wieder sehen solle, und folgte mit klopfendem Herzen Thiuli, der ihn ins Serail¹ führte. Sie waren in ein Zimmer gekommen, das schön ausgeschmückt war, worin sich aber niemand befand. „Chambaba oder wie du heißt,² lieber Arzt,” sprach Thiuli-Kos, „betrachte einmal jenes Loch dort in der Mauer, dort wird jede meiner Sklavinnen einen Arm herausstrecken, und du kannst dann untersuchen, ob der Puls krank oder gesund ist.” Mustapha mochte³ einwenden, was er wollte, zu sehen bekam er sie nicht; doch willigte Thiuli ein, daß er ihm allemal sagen wolle, wie sie sich sonst gewöhnlich befänden. Thiuli zog nun einen langen Zettel aus dem Gürtel und begann mit lauter Stimme seine Sklavinnen einzeln beim Namen zu rufen, worauf allemal eine Hand aus der Mauer kam und der Arzt den Puls untersuchte. Sechs waren schon abgelesen und sämtlich für gesund erklärt, da las Thiuli als die⁴ siebente „Fatme” ab, und eine kleine weiße Hand schlüpfte aus der Mauer. Zitternd vor Freude ergreift Mustapha diese Hand und erklärte sie mit wichtiger Miene für bedeutend krank. Thiuli ward sehr besorgt und befahl seinem weisen Chakamankabudibaba, schnell eine Arznei für sie zu bereiten. Der Arzt ging hinaus, schrieb auf einen kleinen Zettel: „Fatme! Ich will dich retten, wenn du dich entschließen kannst, eine Arznei zu nehmen, die dich auf zwei Tage tot macht! doch ich besitze das Mittel, dich wieder zum Leben zu bringen. Willst du, so sage nur, dieser Trank habe nicht geholfen, und es wird mir ein Zeichen sein, daß du einwilligst.”

Bald kam er in das Zimmer zurück, wo Thiuli seiner harrte. Er brachte ein unschädliches Tränk-

seiße. 乍らチッリーに從つて御殿の中に導かれました。二人は奇麗に飾られた一室に参りました。然し此所には誰も居りませんでした。チッリコスは「ヒヤムババとやら申す親愛なる醫者様や、一寸その壁の所の穴を御覽下され、そこから家の女奴隷が名々手を差出しませうから、それであなたに脈が丈夫か丈夫でないか診察することが出来ませう」と云ひました。ムスタフアは自分の心の底に思つてゐた事をば彼此と言出しては見たでせうけれども、女奴隷を見ることは出来ませんでした。然しチッリーは奴隷の平常の容態を、診察の度ごとに彼に云つて聞かせるといふ事は承諾しました。チッリーは帯の間から長い一枚の名札を引き出して、大きな聲で一人一人奴隷の名前を讀上げました。すると呼ばれる度に一つ宛の手が壁から出まして、醫者は脈を驗するのでありました。六人は最早呼終りまして、皆健全だと診断されました。その時チッリーは七人目の者としてファトメと讀上げました。小さな白い手が壁からするつと出ました。ムスタフアは嬉しさに慄へ乍ら此の手を握りまして、重々しい態度で重病だと宣しました。チッリーは非常に心配して、知物りのヒヤカマンカババに早くファトメの爲め薬を調合せよと命じました。醫者は外へ出て、一枚の小さな紙に斯う書きました。ファトメよ、お前はお前自分を二日間死なせる、或る薬を服用すると決心するならば、私はお前を救出してやらう。然し私はお前を再び蘇生させる薬は所持してゐる。承知ならば、此の水薬は利かないと只そう云てお呉れ、さうすればお前が承知したと云ふ表章(しるし)になるのだから。

直ぐに彼はチッリーの待てる室に歸て來ました。彼は無害の水薬を持って來て、も一度病めるファトメの脈を取りまして、同時に先き

lein mit, fühlte der kranken Fatme noch einmal den Puls und schob ihr zugleich den Zettel unter ihr Armband, das Tränklein aber reichte er ihr durch die Öffnung in der Mauer. Thiuli schien in großen Sorgen wegen Fatme zu sein und schob die Untersuchung der übrigen bis auf eine gelegeneren¹ Zeit auf. Als er mit Mustapha das Zimmer verlassen hatte, sprach er in traurigem Ton: „Chadibaba, sage aufrichtig, was hältst du von Fatmes Krankheit?“ Chakamankabudibaba antwortete mit einem tiefen Seufzer: „Ach Herr! möge der Prophet dir Trost verleihen, sie hat ein schleichendes Fieber, das ihr wohl den Garaus² machen kann.“ Da entbrannte der Zorn Thiulis: „Was sagst du, verfluchter Hund von einem Arzt? Sie, um die ich zweitausend Goldstücke gab, soll mir sterben wie eine Kuh? Wisse, wenn du sie nicht rettetest, so hau' ich dir den Kopf ab!“ Da merkte mein Bruder, daß er einen dummen Streich gemacht habe, und gab Thiuli wieder Hoffnung. Als sie noch so sprachen, kam ein schwarzer Sklave aus dem Serail, dem Arzt zu sagen, daß das Tränklein geholfen habe. „Biete deine ganze Kunst auf, Chakamdababelda, oder wie du dich schreibst,³ ich zahl' dir, was du willst,“ schrie Thiuli-Kos fast heulend vor Angst, so vieles Gold zu verlieren. „Ich will ihr ein Säftlein geben, das sie von aller Not befreit,“ antwortete der Arzt. „Ja! ja! gib ihr ein Säftlein,“ schluchzte der alte Thiuli. Frohen Mutes ging Mustapha, seinen Schlaftrunk zu holen, und als er ihm dem schwarzen Sklaven gegeben und gezeigt hatte, wie viel man auf einmal nehmen müsse, ging er zu Thiuli und sagte, er müsse noch einige heilsame Kräuter am See holen, und eilte zum Tore hinaus. An dem See, der nicht

の紙片を彼女の腕飾の下に押しやり、薬の方は然し壁の孔から渡しました。チャーリーは非常にファトメの事を心配して居る様に見えました。そして他の者の診察はもつと折の好い時に延ばすことゝしました。彼がムスタファと部屋を立ち去る時、彼は悲しげな調子で「ヒヤダババさん、貴方はファトメの病氣をどう思ふか遠慮なしに云つて下され」と申しました。ヒヤカマンカババは深い嘆息を漏して「オ、御主人! 何卒して豫言様があなたに慰安を與へ呉れよばい、ファトメは潜熱を持つてゐるので、或は一命を失ふやうなことになるかも知れません」と云ひました。するとチャーリーは赫として怒出し「何と抜かず! いまいましい犬醫者め、あの女には二千圓も出してあるのに、牝牛か何ぞの様に死んで了はにやならん? 覺えて居れ、お前が若しあれを助けなけりや、わしはお前の首を擧げてやる」と云ひました。そこで弟は馬鹿な計略をしたと氣付いたので、チャーリーに再び大丈夫だと云ひました。彼等がさう云ふてるところへ、一人の黒い奴隷が御殿からやつて来て、薬が少しも利かないと醫者に云ひました。「ヒヤカムダババと何か何とか云ふ御方や、お前さんの根かぎりの技術を盡して下され、わしはお前さんが欲しい丈けのものは拂ひますぢや」と、チャーリーはそんなに多額の金を失ふ心痛のために殆ど叫ぶやうに叫びました。「私は彼女の總ての苦痛を除く薬汁を與へませう」と醫者が答へますと、「さう、さうあれに薬汁を與へて呉れ」と老チャーリーは啜泣きをして云ひました。勇立つてムスタファは寢り薬を取りに行きました。それを黒い奴隷に渡して、一度にどの位飲んでよいか教へてから、チャーリーの所に行き、自分は此外に二三の海邊の薬草を持って來なければな

weit von dem Schloß entfernt war, zog er seine falschen Kleider aus und warf sie ins Wasser, daß sie lustig umherschwammen, er selbst aber verbarg sich im Gesträuch, wartete die Nacht ab und schlich sich dann in den Begräbnisplatz an dem Schlosse Thiulis.

Als Mustapha kaum eine Stunde lang aus dem Schloß abwesend sein mochte, brachte man Thiuli die Nachricht, daß seine Sklavin Fatme im Sterben liege. Er schickte hinaus an den See, um schnell den Arzt zu holen, aber bald kehrten seine Boten allein zurück und erzählten ihm, daß der arme Arzt ins Wasser gefallen und ertrunken, seinen schwarzen Talar sehe man im See schwimmen, und hie und da gucke auch sein stattlicher Bart aus den Wellen hervor. Als Thiuli keine Rettung mehr sah, erwünschte er sich und die ganze Welt, raufte sich den Bart aus und rannte mit dem Kopf gegen die Mauer. Aber alles dies konnte nichts helfen, denn Fatme gab bald unter den Händen der übrigen Weiber den Geist auf. Als Thiuli die Nachricht ihres Todes hörte, befahl er, schnell einen Sarg zu machen, denn er konnte keinen Toten im Hause leiden, und ließ den Leichnam in das Begräbnishaus tragen. Die Träger brachten den Sarg dorthin, setzten ihn schnell nieder und entflohen, denn sie hatten unter den übrigen Särgen stöhnen und seufzen gehört.

Mustapha, der sich hinter den Särgen verborgen und von dort aus die Träger des Sarges in die Flucht gejagt hatte, kam hervor und zündete sich eine Lampe an, die er zu diesem Zweck mitgebracht hatte. Dann zog er ein Glas hervor, das die erweckende Arznei enthielt, und hob dann den Deckel von Fatmes Sarg. Aber welches Entsetzen

らぬと云つて、急いで門外に出ました。城より程遠くない海邊で、彼は化けてゐた着物を抜き捨てて、海中へ投じましたが、着物はふわりふわり面白そうに浮んでました。然し彼自身は草叢の中に隠れて夜になるのを待ち、それからチャーリーの城の側の墓場に忍び込みました。

ムスタファが城中より脱け出でまして、不在になる事凡そ一時間にも成らうとする頃、女奴隷のファトメが死にかゝつてゐると云ふ報知がチャーリーの所へ来ました。彼は直ぐに醫者を連れて来るやうに海岸に使を立てましたが、やがて使者は只一人歸つて来て語るやう、醫者は海中に墜落して溺死したのであらう、彼の黒い長襦の着物は海中に浮んでゐるのを見だし、又彼の立派な髷は、此所彼所波の間に浮上つて居つたと云ひました。チャーリーは最早救助の道なしと見るや、自分と全世界とを呪ひまして、髷搔きむしり、果ては壁に頭を打ちつけるのでありました。然しこんな事を如何したとて何の役にも立ちませんでした。何となればファトメは他の女共の看護の下に間もなく息を引き取つて了つたからでありました。チャーリーが彼女の死の報告を聞きますと、直に棺を造る様に命じました。何となれば彼は如何なる死人をも邸内に我慢にも置くことが出来ませんからで、柩は墓地に持つて行かせました。擔いで行た者共は棺桶を其所へもつてゆくや、速かに下に卸して、逃げて行つて了ひました。何となれば他の棺桶の下で、呻き溜息する聲が聞えたからでありました。

ムスタファは棺桶の後に身を潜めて、此所から棺桶を擔いで来た人々を追出しましたが、今や出て参りまして、豫れて此の目的の爲めに持参しましたランプを点火しました。それから覺醒劑のは入つて居る瓶を取り出して、次にはファトメの棺桶の蓋をもち上げました。ところがランプの光に輝らして見れば自分の全く見知らぬ相鏡が現はれた、その時の彼の驚愕は何うでしたらう。私の妹

befiel ihm, als sich ihm beim Scheine der Lampe ganz fremde Züge zeigten! Weder meine Schwester noch Zoraide, sondern eine ganz andere¹ lag in dem Sarg. Er brauchte lange, um sich von dem neuen Schlage des Schicksals zu fassen; endlich überwog doch Mitleid seinen Zorn. Er öffnete sein Glas und flößte ihr die Arznei ein. Sie atmete, sie schlug die Augen auf und schien sich lange zu besinnen, wo sie sei. Endlich erinnerte sie sich des Vorgefallenen, sie stand auf aus dem Sarg und stürzte zu Mustaphas Füßen. „Wie kann ich dir danken, gütiges Wesen,“ rief sie aus, „daß du mich aus meiner schrecklichen Gefangenschaft befreitest!“ Mustapha unterbrach ihre Danksagungen mit der Frage, wie es denn geschehen sei, daß sie und nicht Fatme, seine Schwester, gerettet worden sei? Jene sah ihn staunend an. „Jetzt wird mir meine Rettung erst klar, die mir vorher unbegreiflich war,“ antwortete sie, „wisse, man hieß mich in jenem Schloß Fatme, and mir hast du deinen Zettel und den Rettungstrank gegeben.“ Mein Bruder forderte die Gerettete auf, ihm von seiner Schwester und Zoraiden Nachricht zu geben, und erfuhr, daß sie sich beide im Schloß befänden, aber nach der Gewohnheit Thiulis andere Namen bekommen hätten; sie hießen jetzt Mirza und Nurmahal.

Als Fatme, die gerettete Sklavin, sah, daß mein Bruder durch diesen Fehlgriff so niedergeschlagen sei, sprach sie ihm Mut ein und versprach, ihm ein Mittel zu sagen, wie er jene beiden Mädchen dennoch retten könne. Aufgeweckt durch diesen Gedanken, schöpfte Mustapha von neuem Hoffnung; er bat sie, dieses Mittel ihm zu nennen, und sie sprach: „Ich bin zwar erst seit

deなければゾーライテでも御座いませんで、全く別の女が棺桶に横はつて居たのであります。運命の新なる打撃から氣を鎮める爲めに暫らくの時間を費やしましたが、遂に同情の心は彼の怒に打ち勝ちました。彼は瓶を開いてその女の口に藥を注ぎ込みました。彼女は息を吹き、眼を見開き、何所に自分が居るのか暫くは考へてる様に見えましたが、遂に此の出来事を想出しまして、彼女は棺から立上がつて、ムスタファの足許に打伏しました。彼女は「御親切な御方様、妾はどうしたら貴方にお禮を申上げる事が出来ませう、恐ろしい捕はれの身から貴方は私をお救ひ下さつて」と聲を絞つて申しました。ムスタファは彼女の感謝の語を遮ぎつて、自分の妹のファトメでなくて此の女が救はれたのは、一體どうしてそう成つたのであるかと尋ねました。彼女は驚きの眼を見張て彼を見て居りましたが、「それで始めて私の救はれた譯が判りましたが、今まではどうしても合點が参りませんでした。まああの城中では私はファトメと呼ばれたと思召せ、そして貴方はあのお書付と御助けの藥を私に下さつたので御座います」と答へました。私の弟は妹とツォーライテに就いて、様子を聞かして呉れと助けた女に頼みますと、兩人ともあの城中に居るのは居るが、チッリーの習慣に従て、外の名前を貰つて居る云ふ事を知りました。二人は今ミルツァとヌルマハールと呼ばれてるのであります。

救はれた女奴隷のファトメは、私の弟が此の失策に由つてひどく落膽した事を見まして、彼の氣を勵まして、そして兩少女を救出す方法を談さうと約しました。此の考で氣を取直してムスタファは新しい希望を得ました。彼は此の女に手段を話して呉れえと頼みますと、彼女は申しました「妾はやつと五ヶ月間位しかチッリー家の奴隷にはなつて居りませんけれど、妾は最う初手から直ぐに脱れる工

fünf Monaten die Sklavin Thiulis, doch habe ich gleich vom Anfang auf Rettung gesonnen, aber für mich allein war sie zu schwer. In dem inneren Hof des Schlosses wirst du einen Brunnen bemerkt haben, der aus zehn Röhren Wasser speit; dieser Brunnen fiel mir auf. Ich erinnerte mich, in dem Hause meines Vaters einen ähnlichen gesehen zu haben, dessen Wasser durch eine geräumige Wasserleitung herbeiströmt; um nun zu erfahren, ob dieser Brunnen auch so gebaut sei, rühmte ich eines Tages seine Pracht und fragte nach seinem Baumeister. Ich selbst habe ihn gebaut, antwortete er, und das, was du hier siehst, ist noch das Geringste: aber das Wasser dazu kommt wenigstens tausend Schritte weit von einem Bach her und geht durch eine gewölbte Wasserleitung, die wenigstens mannshoch ist; und alles dies habe ich selbst angegeben. Als ich dies gehört hatte, wünschte ich mir oft, nur auf einen Augenblick die Stärke eines Mannes zu haben, um einen Stein an der Seite des Brunnens ausheben zu können, dann könnte ich fliehen, wohin ich wollte. Die Wasserleitung nun will ich dir zeigen; durch sie kannst du nachts in das Schloß gelangen und jene befreien. Aber du mußt wenigstens noch zwei Männer bei dir haben, um die Sklaven, die das Serail bei Nacht bewachen, zu überwältigen."

So sprach sie; mein Bruder Mustapha aber, obgleich schon zweimal in seinen Hoffnungen getäuscht, faßte noch einmal Mut und hoffte mit Allahs Hilfe den Plan der Sklavin auszuführen. Er versprach ihr, für ihr weiteres Fortkommen in ihre Heimat zu sorgen, wenn sie ihm behilflich sein wollte, ins Schloß zu gelangen. Aber ein Gedanke

夫を考へて居たので御座いますよ。けれども一人では脱れるのがとても六つかしう御座いました。お城の中庭に噴水のあるのを見お受けになりましたでせう。此は捨本の水管から噴出して居りますが、これが私の目に付きました。私は私の家にもこれと同じ様なのを見たことを思ひ出しました。でその水は一つの大きな水管から導かれてあつたのです。此の噴水も亦同じ様に出て居るかどうかを調べる爲め、或日の事で御座います、チャリーの前で噴水の立派な事を賞め、これを造つた人を尋ねて見ましたので御座います。自分で造つたのだとチャリーは答ました、そしてお前の見て居るのは未だ一番小さなものだ、が然し其の水は少なくとも千足も遠くの小川から来るので、いくら短く見積つても人間位の高さの一つ丸い水道を通る。一切の事は凡て俺自らの考案だと云ひました。私はこの事を聞きますと、彼の噴水の側の一枚の石を持上げられる爲めに、一寸の間で好いから男のやうな力を持ちたいものだと思つて居りました。こうすれば何所へなりとも勝手な方へ逃げて行かれるかと思ひました。では私が此の水導管を貴方に御目につけませう。此れを通つて行けば、夜中に城の中に這入り込めするし、御兩人をお救出しになることも出来する。然し御殿の夜番をしてる奴隷を取押へるのに、少なくとももう二人許り男を連れて行かなければなりません。」

彼の女の話は以上の通りでした。然し弟のムスタファは已に二度迄も當てがはずれましたけれど、猶ほもう一度氣を取直して、アラアの神の助に依て女奴隷の策を實行しやうと願ひました。で若しも彼女が城中に到達するが爲めに彼に手傳て呉れるなら、彼は彼女がこれから先き逃げて故郷に行く心配をしてやらうと約束しました。然し尙一つの考が彼の心配の種となりました。外でもありません、

machte ihm noch Sorge, nämlich der, woher er zwei oder drei treue Gehilfen bekommen könnte. Da fiel ihm Orbasans Dolch ein und das Versprechen, das ihm jener gegeben hatte, ihm, wo er seiner bedürfe, zu Hilfe, zu eilen, und er machte sich daher mit Fatme aus dem Begräbnis auf, um den Räuber aufzusuchen.

In der nämlichen Stadt, wo er sich zum Arzte umgewandelt hatte, kaufte er um¹ sein letztes Geld ein Roß und mietete² Fatme bei einer armen Frau in der Vorstadt ein. Er selbst aber eilte dem Gebirge zu, wo er Orbasan zum erstenmal getroffen hatte, und gelangte in drei Tagen dahin. Er fand bald wieder jene Zelte und trat unverhofft vor Orbasan, der ihn freundlich bewillkommnete. Er erzählte ihm seine mißlungenen Versuche, wobei³ sich der ernsthaftige Orbasan nicht enthalten konnte, hie und da ein wenig zu lachen, besonders wenn er sich den Arzt Chakamankabudibaba dachte. Über die Verrätereit des Kleinen aber war er wütend; er schwur, ihn mit eigener Hand aufzuhängen, wo er ihn finde. Meinem Bruder aber versprach er, sogleich zur Hilfe bereit zu sein, wenn er sich vorher von der Reise gestärkt haben würde. Mustapha blieb daher diese Nacht wieder in Orbasans Zelt, mit dem ersten Frührot aber brachen sie auf, und Orbasan nahm drei seiner tapfersten Männer, wohl beritten und bewaffnet, mit sich. Sie ritten stark zu und kamen nach zwei Tagen in die kleine Stadt, wo Mustapha die gerettet Fatme zurückgelassen hatte. Von da aus reisten sie mit dieser weiter bis zu dem kleinen Wald, von wo aus man das Schloß Thiulis in geringer Entfernung sehen konnte; dort lagerten sie sich, um die Nacht abzuwarten. Sobald

何所から二人三人の忠實な手動人を求めやうかと云ふ事でありました。其の時オルバーザンの刀の事が思付きました。それから何處でなりと御用の節は、急いで助力に行かうとオルバーザンが彼になした約束を想起しました。そこでファトメと共に墓場を出発して盜賊を捜しに行きました。

彼が醫者に變装しましたあの同じ町で、殘金のこらずを費して一頭の驢馬を購ひ、ファトメをば町端れの或貧乏な女の所へ預けました。彼自身は然しオルバーザンに始めて會つたあの山の方へと急ぎまして、三日で到着しました。彼は直ぐにオルバーザンの天幕を再び發見して、意外にもたやすくオルバーザンに會ひましたが、オルバーザンは喜んで彼を迎へてくれました。彼はオルバーザンに失錯談をしましたところ、聽いてゐて眞面目なオルバーザンは、談の此所彼所でちよいちよい笑はずには居れませんでした。特に醫者のヒヤカマンカブヤババの事を考へた時には一層笑ひました。然しあの小男の裏切りにはオルバーザンは怒て了ひ、見付け次第手づから絞殺してやると言ひました。然し先つ以て弟が旅の疲れを休めてから後、早速助太刀に出かけるとオルバーザンは弟に言ひました。ムスタファはそこで其夜は再びオルバーザンの天幕に泊りましたが、最初の曙の光がさし初めると直ぐ出立しました。そしてオルバーザンは三人の最も剛膽な者どもをして、馬の用意宜しく且つ確かりと武裝させて連れて行きました。彼らは強行しまして二日の後にはムスタファが救つたファトメを残して置いた小さな町へ來ました。其所から彼れは此の女も共々に、更にチッリーコスの城を間近の距離に見渡すことの出来る小さな森まで來まして、此所で陣を取りまして、夜の至るを待ちました。黄昏になりますや否や、彼

es dunkel wurde, schlichen sie sich, von Fatme geführt, an den Bach, wo die Wasserleitung anfing, und fanden diese bald. Dort ließen sie Fatme und einen Diener mit den Rossen zurück und schickten sich an, hinabzusteigen; ehe sie aber hinabstiegen, wiederholte ihnen Fatme noch einmal alles genau, nämlich: daß sie durch den Brunnen in den inneren Schloßhof kämen, dort seien rechts und links in der Ecke zwei Türme, — in der sechsten Türe, vom Turm rechts gerechnet, befänden sich Fatme und Zoraide, bewacht von zwei schwarzen Sklaven. Mit Waffen und Brecheisen wohl versehen, stiegen Mustapha, Orbasan und zwei andere Männer hinab in die Wasserleitung; sie sanken zwar bis an den Gürtel ins Wasser, aber nichtsdestoweniger gingen sie rüstig vorwärts. Nach einer halben Stunde kamen sie an den Brunnen selbst und setzten sogleich ihr Brecheisen an. Die Mauer war dick und fest, aber den vereinten Kräften der vier Männer konnte sie nicht lange widerstehen, bald hatten sie eine Öffnung eingebrochen, groß genug, um bequem durchschlüpfen zu können. Orbasan schlüpfte zuerst durch und half den andern nach. Als sie alle im Hof waren, betrachteten sie die Seite des Schlosses, die vor ihnen lag, um die beschriebene Türe zu erforschen. Aber sie waren nicht einig, welche es sei, denn als sie von dem rechten Turm zum linken zählten, fanden sie eine Türe, die zugemauert war, und wußten nun nicht, ob Fatme diese übersprungen oder mitgezählt habe. Aber Orbasan besann sich nicht lange: „Mein gutes Schwert wird mir jede Türe öffnen,“ rief er aus, ging auf die sechste Türe zu, und die andern folgten ihm. Sie öffneten die Türe und fanden sechs schwarze Sklaven auf

等はファトメーに案内されて水道の起點である小川の所に忍び寄つて、直にそれを発見しました。此所でファトメーと一人のお供とを馬と一緒に残して、自分等はその中へ下りやうと仕事に取掛りますと、まだ下りる前にファトメーはも一度凡ての模様を詳細に繰返して話ししました。即ち小川を辿つて城の中庭に来るので、此所には右左の隅の方に二つの塔がある——右の塔より數へて七つ目の扉の中にファトメーとゾーライデとが、二人の黒い奴隸に監視されて居ると云ふことを話ししました。武器や鐵槌を能く用意して、ムスタファと、アルバーザンの、他の二人の者は水道の中に下りて往きました。彼は殆んど腰の所まで水に侵りましたが、それに關はず勇ましく前進しました。半時間も経た頃愈々水の所へ到着しまして、直ぐ様持つて來た鐵槌を据へました。壁は厚く頑丈ではありましたが、四人の男の協力には長く抵抗する事が出来ませんでした。彼等は忽ち容易に潜り込む丈けに十分大きな入口を明けました。アルバーザンが第一番に潜り込みまして、他の者を助けました。彼等が皆庭には入つて了ひますと、前に述べたところの戸を探す爲めに前に横はる城の側面を眺めました。然し何れがさうか皆の意見が一致しませんでした。何となれば皆のものが右の塔から左に數へると、塗壇められた一つの戸がありましたが、さてそれをファトメーは飛ばしたのか數へたのか判らなかつたからでありました。然しアルバーザンは長くは考へて居りませんでした、「私の立派な刀は何れでも開くことが出来る」と叫んで、六つ目の扉の所へゆきました。他の者も彼れに續きました。彼は扉を開きますと、六人の黒人の奴隸が床に横はつて寝て居りました。彼等は目的の扉を見損な

stapha. Mit Tränen dankten die beiden ihrem edelmütigen Retter Orbasan; doch dieser trieb¹ sie eilends zur Flucht an, denn es war sehr wahrscheinlich, daß sie Thiuli-Kos nach allen Seiten verfolgen ließ. Mit tiefer Rührung trennten sich am andern Tag Mustapha und seine Geretteten von Orbasan; wahrlich! sie werden ihn nie vergessen. Fatme aber, die befreite Sklavin, ging verkleidet nach Balsora, um sich dort in ihre Heimat einzuschiffen.

Nach einer kurzen und vergnügten Reise kamen die Meinigen in die Heimat. Meinen alten Vater tötete beinahe die Freude des Wiedersehens; den andern Tag nach ihrer Ankunft veranstaltete er ein großes Fest, an welchem die ganze Stadt teilnahm. Vor einer großen Versammlung von Verwandten und Freunden mußte mein Bruder seine Geschichte erzählen und einstimmig priesen sie ihn und den edlen Räuber.

Als aber mein Bruder geschlossen hatte, stand mein Vater auf und führte Zoraiden ihm zu. „So löse ich denn,“ sprach er mit feierlicher Stimme, „den Fluch von deinem Haupte; nimm diese hin, als die Belohnung, die du dir durch deinen rastlosen Eifer erkämpft hast; nimm meinen väterlichen Segen, und möge² es nie unserer Stadt an Männern fehlen, die an brüderlicher Liebe, an Klugheit und Eifer dir gleichen.“

ルバーザンに感謝しましたが、オルバーザンは彼等に急いで逃げる様に急立ちました。何となればチャーリーコスが二人に對して、四方八方に追手を出すと云ふ事は誠に有り相な事であつたからでありました。深き感慨に胸打たれて居たムスタファと救はれた少女等はオルバーザンに訣別致しました。誠に彼等はオルバーザンを決して忘るゝ事はないでせう。救助された女奴隷のファートメーは然し變装してバルゾーラの方へ行きました。其所から故郷へ向けて船に乗り込む爲めでありませう。

短い間ではあるが樂しき旅行の後に、私の兄弟は故郷へ歸つてまゐりました。年老ひた私の父は再會の嬉しさに殆ど氣も絶えらんばかりでありました。兄妹の着いた次の日に父は大變なお祝を致しましたが、その祝には全町が肩を入れてくれました。親戚や朋友の大勢の集りの前で私の弟はその話を談させられました。一同は弟と高潔な盜賊のことを賞讃へました。

ところが私の弟が話を了りますと、私の父は立上つてツオーライテンを弟のところへ連れて來ました。父は莊重な調子を以て申しました「ではわしはお前の頭に掛けた呪ひを解いてやりませう。お前自身の不屈不撓の熱心に依つて獲得した賞與として、此人を引取りなさい。父なるわしの祝福を受けておくれ。して又兄弟の愛に於て、賢さと熱心に於て、お前に比べられる人々が、わしの町に決して缺けることのないやうに願ふのぢや。」

163
130
2133
17

註 釋

Die Karawane.

P. 2—1. hörte man は直譯すれば「人が聞いた」なれど、此處に叙述された者は Karawane なれば、主格を Karawane にして、それが(鈴の音を)響かすやう譯した。注意の爲め一言する。

2. schon は距離の未だ遠いことを表はしたのである。

3. Röllchen は Rölle に chen なる小さきもの、可愛ゆきものを表はす接尾語を附したることは言ふまでもなし。Die Rölle は荷馬などに下げる、輪形若しくは風鈴様の鳴物である。

4. Reiherbusch は青鷺(Reiher)の羽で出来た、房々とした馬頭の飾りである。

5. Gold は金の絲を指す。

P. 4.—1. schwangen.....auf は鎗を横にして相手に差向けたのを、再び鎗先を天に向けて鎗を立てなほすこと。aufschwingenの過去なり。

2. 此處は直譯すれば、「此外客から何を仕出かすべきか」の意。譯文参照。

3. das は次の „Ihr raucht.....Tabak,” 及び „Euer Rapp'.....Schritt,” を指す。„Ja, ja!” の前の einem も同じ意味の用法で、何れも次の語若しくは句を名詞と見做して、それに附けられた冠詞である。

4. da は殆ど語調のために用ひられたと見られる程の軽い意味。

P. 6—1. Wie auch=als auch で並びにまたの意。

2. den Zug schliessen(の過去が schloss)は行列の殿りをなして、行列の終ひをなす事。

3. goldgewirkt は金絲を入れて織込み、若しくは金絲にて縫ひ取りをしたの意。

4. aus は出生地を示す前置詞。

5. Der große Prophet は回々教の豫言者即ちマホメット。

6. so=wenn

7. der Grosswesir は回々教國主の下に仕ふる總理大臣を云ふ。

P. 8—1. in unserm Schatten (陰)=吾々の保護の下に。

P. 10—1. tüchtig はグイと勢よくやること。Zug は飲むこと。

Die Geschichte von Kalif Storch.

P. 10—2. 此の schmecken は gut schmecken の略と見るべし。即ち旨く味はうの意。

3. aus etwas tun は離すこと。

P. 10—1. hätte と Konjunktiv の形にしたるは、希望を表はしたのである。

2. die Pistole は往時特に西班牙に用ひた金貨。

P. 14—1. Züge は字形。

2. steht は次に geschrieben を略された意味。steht ges. は書かれてあるとの意。

P. 16—1. vor sich hinklappernd (嘴をカラカラと鳴らす)は自分獨りで何か獨語のやうに嘴を鳴らすこと。

2. wette meinen Bart は自分の髭を誓約に懸けるの意。戯れに何か誓ふ時に此語を用ゆることがある。然しその用法の由來は眞面目な意味から來たもので、昔は何れの國民にも概して髭を男子の威嚴の象徴と見做した。而して古の誓約に當つては髭を握つてしたものであつた。故に Bart を懸けるとは元來重い意味に用ひられたのである。

3. gen=nach. 主に詩に用ゆる語。

P. 18—1. nur ums Himmels willen は熟語にて「何うぞ」の意。更に分析すれば nur と ums 以下の二つに分れ、nur は ums 以下の語句の意味を強める語。ums 以下丈けて普通は「何うぞ」の意味。

2. gut=stark で、たつぶりの意。

3. 豫言者(マホメット)の髭を指して誓ふの意。P. 16—2. の註参照。

4. es wagen の es は下に言出す其ことを指し、wagen は「敢てする」の意。

5. denn は比較級を示す。als に同じ意味。hübscher.....denn とつゞく。

P. 20—1. gehorsamst (謹んで) は身分の高い人に向つてお禮を述べる時に使ふ慣用語。

2. von etwas sich erholen は何々から回復する、復歸する、治るの意。

3. einmal は軽く「まあ」位の意。

(補註) potz は愕きを表はす感動詞。Mecca, Medina は何れも回々教の聖場である。此兩所を感動の際口走るは、基督教徒が感動詞に Gott と呼ぶに似て、此兩地名は單に感動を表現した詞である。従つて potz Mecca 云々は「オヤこれはしまつた」などの意味をなす。

4. in einem fort は in einem Zug fort の略で、一生懸命になどの意味。

P. 22—1. waren u. blieben は以前も今も相變らずそのままなること。

P. 24—1. gewähren=許し與へる。

P. 26—1. wenn.....nur は輕き「何々としたい」の意を含んだ假定の意味。

P. 28—1. aber は「そこで」などの意味を極めて軽く含む。

2. vortragen は演説的に述べ立てる時に用ゆ。

3. ohnmächtig は意味の上よりは brachte er mich, welche vor Schrecken ohnmächtig geworden war となる。

P. 32—1. Hand reichen (手を差出す) は結婚を申込むの意。

2. daß の前に „Kann ich sie zu meiner Frau nehmen, indem ich es wohl voraussehe,...“ (私はかくかくの事を豫め豫知してゐるのに、彼の女衆を妻に娶ることが出来るといふので御座いますか) の如きを省略したものと見るべきである。

3. die Katze im Sacke kaufen は獨逸の諺で、中味をよく見ずに物を買ふこと、即ち輕卒な約束事をするを謂ふに用ひられる。die Katze の代りに das Schwein を用ひることもある。Katz とか Schwein は單に囊の中の物を意味する

P. 34—1. im Nu=in einem Nu(n)の略で、忽ちの意。

P. 38—1. sich auf den Weg machen は熟語で、出發するの意。

Die Geschichte von dem Gespensterschiff.

P. 42—1. ihm an die Hand gehen は熟語で、彼の手助けをするの意。

P. 44—1. Kaum.....so と對應する。二語で「何々するや否や」と譯する。

2. ein Bettler は體一つと成つて何一つ身に着けた所持品もなく、命乞をする人となつての意。

P. 46—1. es war dies の es は意味に於て dies と同じことを指す。dies は das Prädikat なる unser einziges Rettungsmittel と同格であるから、詰まり以上の三つのものは同一事を指す。Rettungsmittel は darum 以下に説くところのもの。

2. weit und breit は「見渡すかぎり」などの意味を表はす熟語。

3. nicht einmal は「況んや.....せぬ」の意。

P. 48—1. möchte は何々するかも知れぬの意を表はす助動詞。

2. recht は思切つて公然との意。

3. unten は甲板の下。

4. auf Gnade und Ungnade=どんな目に遭はうとも。

5. faßten ein Herz=f. den Mut=度胸を据ゑて。

P. 50—1. ob=über で、何々の原因に依つて、何々の故での意。

2. gebracht es uns an Werkzeugen=wir brauchen Werkzeugen.

3. nicht einmal は P. 46—3. の註を参照のこと。

4. Knarren は帆が風のためにパタパタ鳴ること。pfeifen は帆が風のためにビュービュー鳴ること。

P. 54—1. gar は wohl の意味を強めた詞で、二語で「よくよく」などの意。

2. habe ich's!=habe ich es gefunden で、es は幽霊を防ぐ方法を指す。

3. Geisterspuk の Geister と Spuk とは殆ど同じ意味。二字で幽霊の事。Zauberspuk はやはり此處は似通ふた意味に使はれたのである。

4. der Koran はマホメット教の聖經。

5. mochte=恐らく.....らしく。

- P. 56—1. Allah はマホメット教徒の信ずる神。
 2. zu Berg steigen は山の様にニヨツキと立つこと。
 P. 58—1. den Tag über は終日の意。
 P. 60—1. einliefen=涙る。
 2. sich erkundigen は尋ねて知ること。
 3. sie=die Toten.
 4. auf das Meer verzaubert=海上を脱離することの出来ぬやうに呪ひ込められる。
 P. 62—1. von Gott und Rechts wegen=神に對しても正しい道に對しても。
 2. gleichsam=謂ばゞ何々に同じもの。
 3. nicht genug loben=賞めても賞め盡せぬ。
 4. so wie=so bald als=何々するや否や。
 P. 64—1. Zante 島はギリシヤのイオニア海に在る。
 2. sich übermannen=自分を壓倒する、自分が敗ける即ちわれを忘れる。
 3. was は兩方とも das にかゝる。 hätte sagen lassen は「恐らく言はせなかつたらう」との意味で、自分が Derwisch から意見を加へられ、非難された事を指すのである。
 P. 66—1. mir brachen die Augen=meine Augen brachen. Augen brechen は瞑目すること。
 2. denn は此の處特殊の用法をしてゐる。「況んや」などの意。
 P. 68—1. Sindbad の話は Tausend und eine Nacht の物語の中にある。彼は有名な海上の冒険家である。
 2. ließ sie auf dem Glauben は彼等の信ずるがまゝに放任する。
 3. hinaus は hinausgehen の略。
 4. der Herr はマホメット教の聖地たるメッカに祀られたアラール神を謂ふのである。
 5. zwar.....doch(aber)と照應し、「何々とは謂へ.....然し」の意。
 6. aufstischen は食卓の上へ御馳走として出すこと。此處は ein guter Schwank を御馳走に喩へたのである。
 7. wohl=wie gut auch で、「よし何々であるとは謂へ」と云ふ意を表はす。
 P. 70—1. den Vorrang haben は上帝を占めるの意で、先づ先

- 番にやるの意となる。
 2. sollte.....erzählen 云々は彼が話しをすべきでないかの意。
 3. vielleicht は書加へれば、vielleicht könne es uns möglich sein, dass.....で、「怖らく斯くかくの事が吾々に出来るかも知れません」の意。
 4. Achtung u. Z. einflößt は尊敬と信用を人の心に注入する、即ち尊敬と信用を得るの意。
 5. Ich bin sehr geehrt は人々に何か云はれた時に、丁寧に挨拶する時に此の冒頭語を用ゆる。何々を甚だ光榮に存じますの意。
 6. Kummer 云々は書換えれば keinen Kummer habe ich となる。
 7. auch は何々ではあるけれどとの意。
 8. einbüßt は贖ひに出すこと。
 9. davon は腕を失つたことからの意。 ich habe sie.....einbüßt を指す。
 10 mit sich bringt=自然に然らしめる。

Die Geschichte von der abgehauenen Hand.

- P. 72—1. die Pforte は土耳其政府の特稱。
 2. der Marktschreier は昔大道の四辻なぞで、大聲に自己の醫術の技倆を吹聴した醫者。主として下等の醫者のことを云ふのである。
 (補註) bereit halten は準備を整へる。
 P. 74—1. drauf=darauf=それに對して。
 2. von statten gehen は vonstatten g. 又は von Statten g. と書き、成功する、旨く行くなどの意。 die Statt は語義上 stehen を意味する。
 3. betrug(betragen の過去)は云々の額に當るの意。
 4. die Hohe Pforte は土耳其朝廷を指す。
 5. sich verdingen は雇はれる。
 P. 76—1. war und blieb は以前も今もやはりそうだの意。
 2. Schlag auf Schlag (熟語) kommen=打撃が打撃に繼ぐ。
 3. der Marktschreier は P. 72—2 の註を見よ。
 4. eingeführt hätte=恐らく(自分を)引合せてくれたらうに。

P. 78—1. als=例へば……の如き。

2. viele=viele Leute.

(補註) die Zechine は Venetia 市に流通される金貨で、凡そ獨逸の九マルク以上十マルク位に價する。

3. das Gewölbe=Warengewölbe で、小賣店の事。

P. 80—1. ich hohe Preise habe は、私が高く價段を附けておく。

2. sich einfinden はそこへ行く、出版すること。

3. keine Seele=kein Mensch

P. 82—1. mich faßte は自分の氣を確かりさせること。

2. was steht zu eurem Befehl は「何御用ですか」の意を表はす慣用語。

3. mir's の es は意味の無い主格。

4. nicht also=tuet Ihr nicht also.

5. Gutes mit mir vorhaben は私に對して善いことを考へてゐるの意。

P. 84—1. ausrufen lassen=言振らす。

2. genuesisch は Africa の Genua 産の意。 genuesischen Samt は purpurrot と同格。

3. ins Auge fassen=見極める。

4. entfernt=遙かに何々でない。

5. viel geboten hatte は高く價踏みをしたとの意。 Bei Gott は一種の感動詞で、神に誓つて何々斷行する時に發する言葉。

P. 86—1. es tat mir der Gedanke=わくわくの考が私の胸に浮ぶ。

2. wohl=實に。

3. das wohl の wohl は恐らくの意。

4. mich einen Narren schalten=私を馬鹿だと叱責する。 es kam zu schlagen は擲合ひになること。 es には意味がない。

5. als=その時。 schon に對する。

P. 88—1. gut=多額の。

2. kostete mich=私に金を使はせる。 bar=現金で。

3. Schau auf=pass auf で、氣を附けて見よとの意。

P. 90—1. dagegen einwenden は或事に反對して議論する。

2. wohl mit etwas umgehen=ある事をうまくあしらう。

P. 94—1. aufs Ungefähr=運任せに、行當りばつたりは、盲目減法に。

2. der Morgen は擬人法に依つて、人格化されてゐる。即ち「朝といふ者か」の意。 ermahnte mich は自分に斯く々の事を思起さしてくれたとの意。

P. 96—1. solltet は驚き惟々の意を更に強むる助動辭。 nicht wissen はその前に solltet Ihr を略したものの。

2. Signore はイタリア語の「君」に當る。

P. 98—1. Weiteres 又 die Weitere, das Weiteres と同じ意味で、更に何か進んだ先き々の事。 bis auf はいつも慣用上相結合ふ前置詞で、二つで「何々の有る迄」の意を示す。 bis auf Weiteres は、故に、「猶ほ後程何か事の有る迄、後刻挨拶の有る迄」などの意味となる。

2. sich herabzogen は段々になつて下に續くこと。

3. in der Höhe angebracht=高い所に拵へられてある。

P. 100—1. Rat holen は参考資料(考の上の)を得んとすること、思付きを得んとすること。

2. im Begriff sein=何々せんとする。

3. in Hinsicht auf meine Person=私といふ人物に就いて。 in Hinsicht auf (熟語)=何々に就て。

P. 102—1. misstrauischer, strenger は何れも比較級の形容詞である。

2. überwiesen (überweisen の過去)は二格の目的格を取る。

P. 104—1. von hinnen gehen=言脱ける。

2. der Gesetze は das Gesetz の複數二格で、kundig なる形容詞が二格を支配するが故である。

3. wenn man 云々は、此れから以下のやうな條件の下にならばの意。

4. dort は einen ähnlichen Fall を指す。

P. 106—1. lauten は宣言されること。

2. in weitem Bogen=遠くまで曲線を畫いて。

3. versah mich mit Reisegeld=旅費を私に給する。

4. mein Haus beziehen=私の家に引移る。

P. 108—1. von aller edlen Gesinnung entblößt sein=高潔な

心行きを残らず無くして了ふ。 von etwas entblößt sein は或るものを全く剥取られて無くして了ふの意。

P. 110—1. gilt es=何々するのが肝心だ、是非さうせればならぬ。

2. halten ihn (acc.) für etwas は「彼を何々と想ふ」の意。

3. zumal は一纏めにして一時にの意。

P. 112—1. sein Leben zum Pfand setzen=彼の命を賭け物にする。

P. 114—1. höher anschlagen は實際の値打よりも高く値踏みする。

2. Widerstand leisten=抵抗する。

3. leichterem は leicht の比較級の形容詞である。「一段と気が軽くなつて。」

P. 116—1. es は Schicksal を指す。

Die Errettung Fatmes.

P. 116—2. trugen vereint.....bei=共に相助け合つて事をした。

P. 118—1. wollten は次に 'fortfahren (更に漕いで行く) の如き語を略した意。

2. jener は Barke(die)の代名詞三格。die Barkと混同せぬやうに、これは三本マストの商船を意味する。複数は兩方ともBarkenである。

3. schwebten は危険の中に窶り込み途方にくれて彼方此方漂ふ。

4. aber. 此處の aber は「兎も角」などの意味である。

5. nur は「(溺れんとする人を助けること)丈けには先づまづ」などの意。

P. 120—1. im Stich lassen は見捨てて去ること。

2. im Begriff sein は將に何々せんとす積りで居るの意。

3. 此處は書加へれば下の如き文章となるのである。 sondern war jene Freundin.....von ihren Eltern ihm zur Gattin zugesagt gewesen, und hatte er es nur unserm Vater noch nicht zu gestehen gewagt,.....

P. 122—1. das er nicht verdient hatte=彼が自分の身に受ける筈でなかつた。

2. nicht zu lange nach den Seeräubern (は、海賊に餘り長い時間後れず)の意。

3. gab sich einer dumpfen Verzweiflung hin は、氣もむしやくしやに成つて、絶望中に身も心も捨鉢になる。

P. 124—1. wenn は何々したとての意。

2. aller Mittel は複数二格。 berauben が二格を取る動詞なるが故である。

3. ihrer は上の娘達二人を指す。

4. fast は sehr の意。古き用語で、今は次等に此用法は廢れた。譯文には現代の用法で譯したけれど、此處はやはり古義を取るべき所と思ふ。印刷の都合上訂正することが出来なかつたから一言此處に附言して置く。

P. 126—1. im Gefühl seinen Würde は自分の威嚴といふことに思當つて(自分が侮辱された様な感じがしたから)。

2. Lust zu haben.....は復讐をして心癒せをしたしの意。

3. schuldig bleiben=何々すべき義務を持つ。

4. der Starke (gen. des Starken) を親方と譯したれど、原意は強い人の義である。一寸お断りまで。

P. 128—1. Bassa は土耳其の總督を特にかく謂ふ。

2. hinter die Hügel scheiden は丘の行方に吾々の眼界から絶えて無くなるの意。

P. 130—1. mache は以下の文章を Objekt としたので、mache, daß du fortkommst (出て行つて了へ)など、日常の用語に能く用ひられる。

2. es は此の災難に遭つた事を指す。 zuschreiben は何々に原因を歸する。

3. dem Untergang weichen は滅亡に供する、命を葬つてやる。

P. 132—1. nach etwas sich erkundigen=何々の様子若しくは譯を尋れる、探る、問ひたす。

2. einschlagen は賛成同意の手打ちをすることから、單に同意する事に用ひられる。

3. jemand(dativ)gram sein=誰かの人を遺恨に思ふ、誰かの事で氣を悪くしてゐる。

4. das Gastrecht 云々は客の權利は私には神聖だといふが、文字

通りの譯なれど、譯文は少し粋き過ぎたやうにも思ふ。

P. 134—1. heute noch=nicht später heute=今日の中に。

2. mit heiler Haut=無事な體で。

3. Todesangst ausstehen=危うく殺されんとした死の心配を嘗めて、それを堪え通した。

4. so=wenn.

5. ihm den edlen Räuber in seine Gnade empfehlen の中の ihm も seine も Allah を指す。高潔な盗人をばアラーの神の恩恵に預らせるやうに、アラーの神に托する、お頼みする。

P. 136—1. mich bedünkt=es mich bedünkt=es mir erscheint. 何々と見える、思はれる。

2. es はそれ以後の生涯を指す。

3. sich um etwas reißen und schlagen は、ある物を手に入れたきに、一心に成つて骨折る。sich um etwas reißen 丈けても、又は s. u. etwas schlagen だけでも同様の意味がある。

P. 138—1. Kapudan Bassa は土耳其の水師提督。

2. sich zur Ruhe setzen は挂冠して閑地に居る。

3. zu statten kommen は役に立つ。

P. 140—1. mochte は確かにそれと分らぬが、大方何々……であらうの意。譯文参照。

P. 142—1. guter Rat ist teuer は獨逸の諺で、此處は「良い考は仲々浮ばない」の意。其外「良い忠告は貴いものだ」の意味もある。

P. 144—1. im Freien (der Freie の Dativ) は廣場に。der Freie は das freie Feld に同じ。

2. Mittel は Arznei-mittel (藥) の意。

P. 146—1. Serail (佛蘭西讀みにセライと讀むが普通である) は土耳其の宮殿をいふ。

2. wie du heist は「汝が言ふがまゝだ」の意。譯文を参照せんことを望みます。

3. mochte einwenden の mochte は不確かの想像を表はす。二語で「彼れこれと申立てはしたのでしやう」の意。was er wollte とは、ムスタファが何とかして妹に會へるやうな工合に、先方に感付かれずに話を持込んで行かうと思つて爲す事。

4. die siebente は Sklavin のこと。

P. 148—1. gelegener は比較級の形容詞で、「もつと適當な」とか「もつと折の好い」の意。

2. Garaus machen は熟語で、全滅をさせる即ち死せしめるの意。

3. wie du dich schreibst は汝が自分を何とか書くがまゝだの意。譯文を参照せよ。

P. 150—1. den Geist aufgeben は靈魂を行くがまゝにする即ち落命する。

P. 152—1. andere は Sklavin.

P. 156—1. um は何々丈けの代價での意。乃ち此處は最後に残つた彼の金だけの代金での意。

2. jemand (acc.) bei jemand einmieten は、誰れそれを誰それの所に間借りして預ける。

3. wobei はその話しを仕てゐる際にの意。

160—1. schon は、あはや何々せんとしたといふ時の、「あはや」に當る意。心持ちが己にさう成つてゐたの意。

2. als は schon と對應して、「その時」の意。

3. wovon schon einige は wovon einige schon の意で、「その中の二三人は已に」の譯に當り、此聯絡せる言葉の中間に此種の挿語の入る事は獨逸語の癖である。

P. 162—1. zu etwas antreiben は、或る事をするやうに急立てる。

2. möge es の möge は助動詞でなくて、動詞として用ひられたので、何々を欲する、願ふの意。es は (zu)fehlen を受ける。缺けると云ふことの意。

發行所

電話 振替 東京下谷六四三三七八番

南山堂書

東京市本郷區龍岡町三十四番地



印刷所

日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

印刷者

渡邊 八太郎
東京市牛込區榎町七番地

發行者

鈴木 木幹太
東京市本郷區龍岡町三十四番地

著者

田中 棊

複製 不許

大正四年七月十七日

發行 印刷

正價 金五拾錢

(ハツアの童話)



Handwritten notes: 正, 乙, entlachen, 乙價金五拾錢

322
93

終